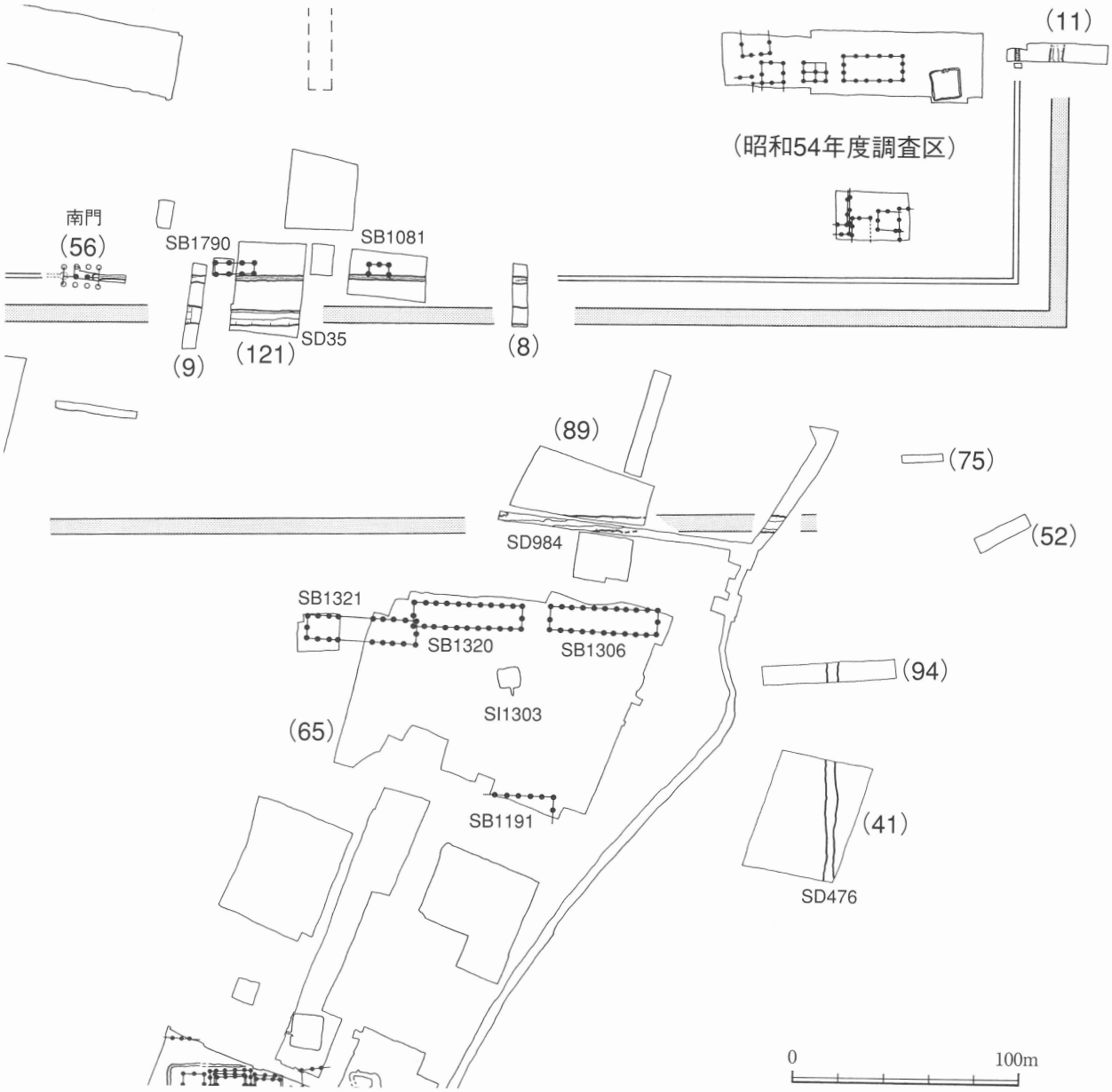


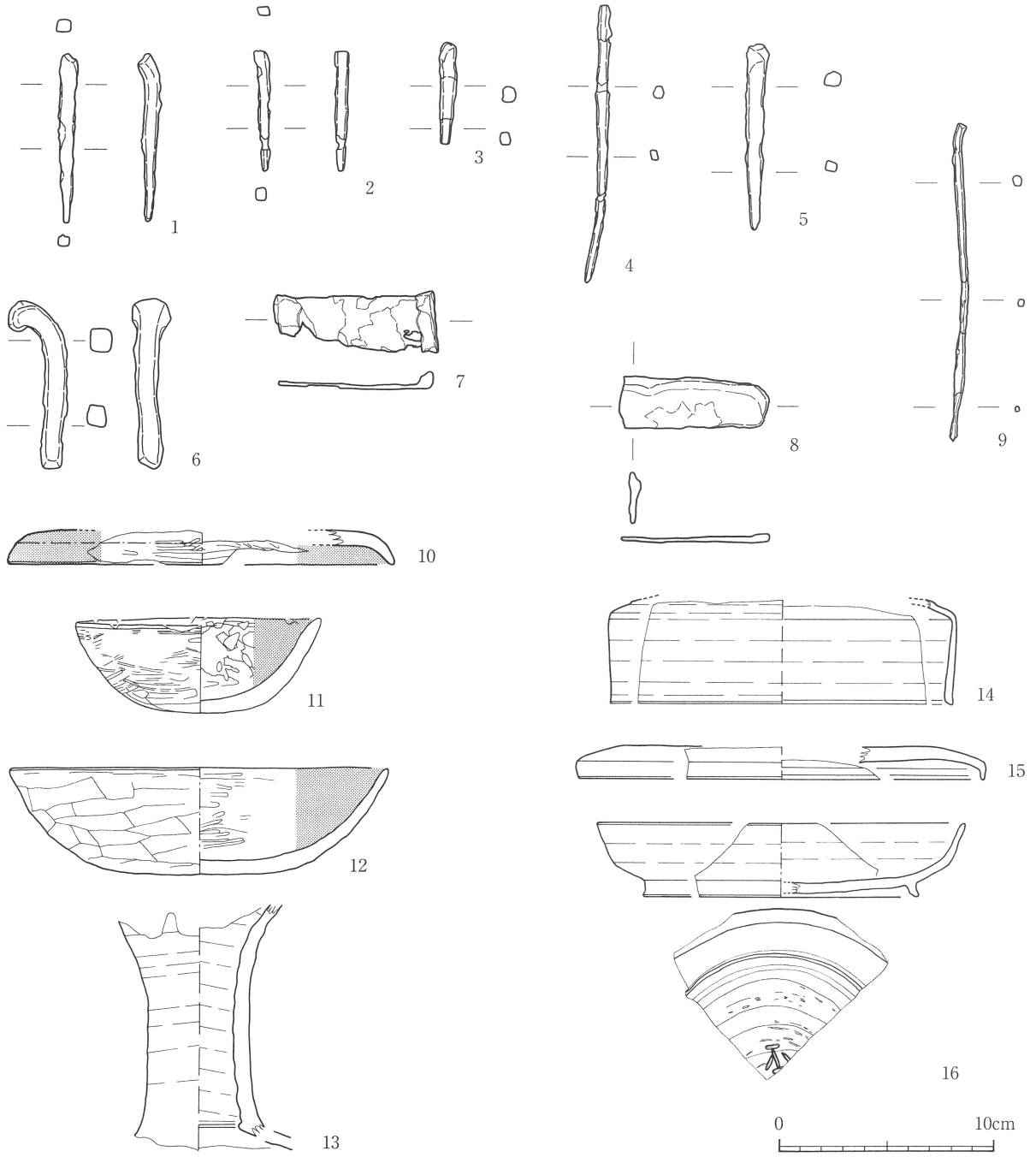
第142図　南方官衙東地区周辺遺構配置図　（　）内は調査次数

SI1303竪穴住居跡（第65次・第140、142、144図）

東西5.2m、南北5.1mの隅丸方形で、東壁の方向はN—5°—Eである。壁は直立気味に立ち上がり、高さは40cm残存している。床面はにぶい黄褐色シルト質粘土による貼床で、南側の床面上に焼土ならびに炭化物が広がっている。床面上で直径30～50cm、深さ50～60cmの円形のピットを2個検出した。配置から主柱穴と考えられるが、柱痕跡は検出できなかった。

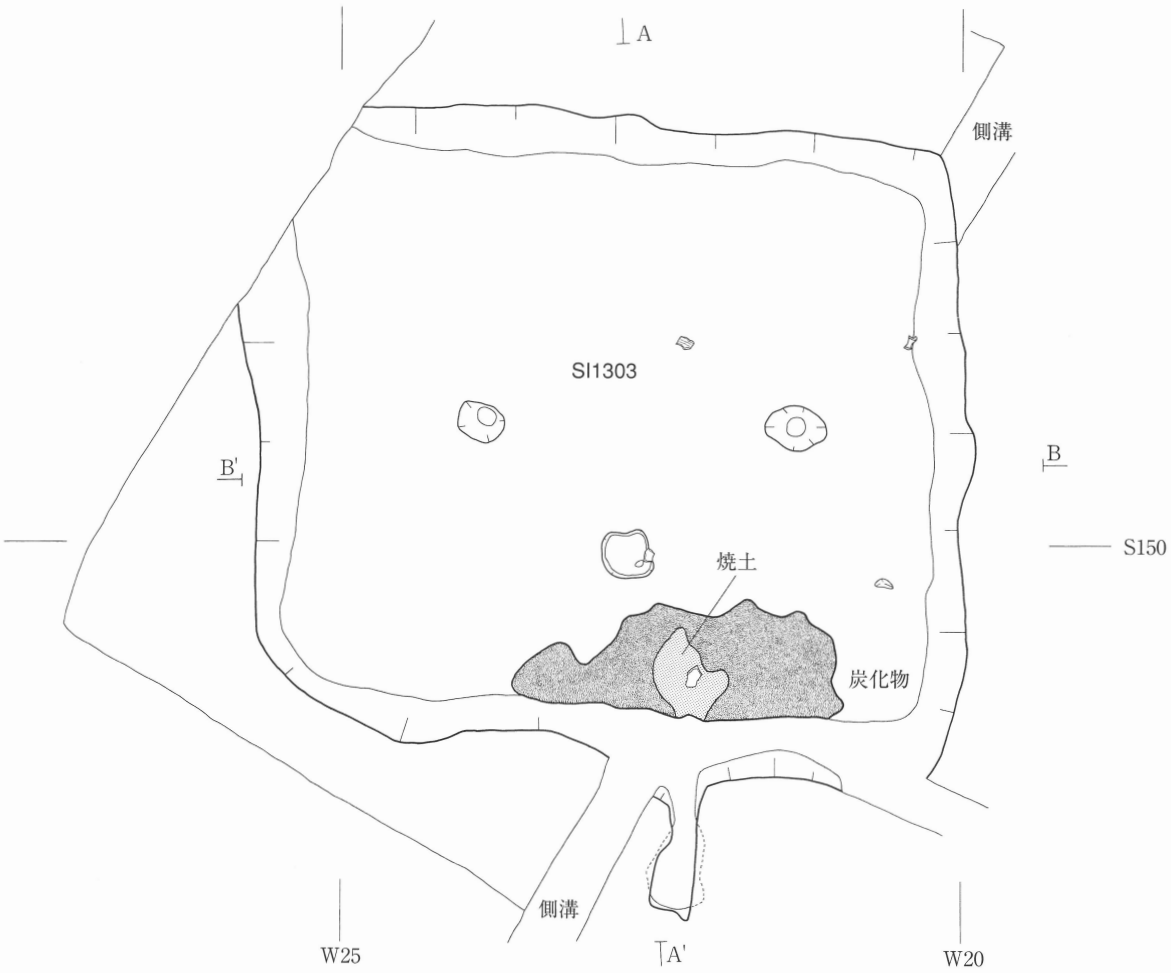
カマドは南壁東寄りにあり、天井部やソデの部分が撹乱を受け煙道のみ検出された。煙道は長さ160cm、上幅25～35cmである。カマド前面の箇所に焼土ならびに炭化物が堆積している

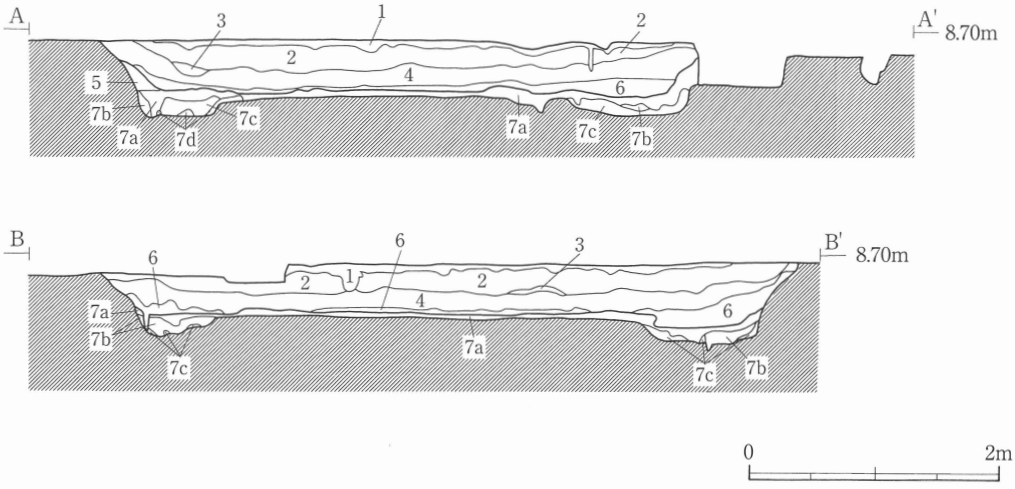
遺物は住居跡床面近くの堆積土中から体部に段や稜を持たない土師器<中>C-114・115坏（第143図11、12）、両面黒色処理されたC-118蓋（第143図10）、内面にカエリのない須恵器<中>E-83・87蓋（第143図14、15）などが出土している。また堆積土の上層からは底部に「金」もしくは「平」とヘラ書きされた須恵器<中>E-84高台付坏（第143図16）や、釘などの鉄製品が出土している。またこの他に掘り方埋土中から頸部のみの須恵器<中>E-86長頸壺（第143図13）も出土している。



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
1	N-66-①	鉄製品	釘	SI1303	2	長さ8.0以上　幅～0.9　厚さ～0.9				65	
2	N-66-②	鉄製品	釘	SI1303	2	長さ5.6以上　幅～0.7　厚さ～0.7				65	
3	N-66-③	鉄製品	釘	SI1303	2	長さ4.8以上　幅～0.7　厚さ0.4～0.7				65	
4	N-64	鉄製品	鉄鏃	SI1303	2	長さ13.0　幅0.3～0.6　厚さ0.3～0.5				65	
5	N-62	鉄製品	釘	SI1303	2	長さ8.8　幅0.5～1.1　厚さ0.5～0.8				65	
6	N-58	鉄製品	釘	SI1303	2	長さ8.0　幅0.8～1.8　厚さ0.8～0.9				65	
7	N-59	鉄製品	不明	SI1303	2	縦1.8～2.8　横7.4				65	
8	N-61	鉄製品	不明	SI1303	2	縦2.0～2.4　横6.8				65	
9	N-63	鉄製品	鉄鏃	SI1303	2	長さ14.8　幅0.2～0.5　厚さ0.2～0.4				65	
10	C-118	土師器	蓋	SI1303	4	残存高1.6　口径18.0	体部ヘラミガキ、端部黒色処理	体部ヘラミガキ、端部黒色処理		65	
11	C-114	土師器	坏	SI1303	4	器高4.5　口径11.5　底径5.5	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅣ2a	65	
12	C-115	土師器	坏	SI1303	4	器高5.0　口径17.7　底径8.9	口縁部ヘラミガキ、体部・底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅣ1a	65	
13	E-86	須恵器	長頸壺	SI1303	9	残存高11.5	口頸部ロクロナデ	口頸部ロクロナデ		65	
14	E-83	須恵器	蓋	SI1303	4	残存高4.8　口径16.0	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅱ3	65	
15	E-87	須恵器	蓋	SI1303	2、4	残存高1.5　口径19.0	端部ロクロナデ、体部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅱ	65	
16	E-84	須恵器	高台付坏	SI1303	2	器高3.5　口径17.2　底径12.8	口縁部・体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅰ1	65	

第143図　SI1303　出土遺物





層位	土　色	土 性	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト	火山灰を含む
2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物・火山灰を多量に含む
3	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	炭化物と焼土を多量に含む
4	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	炭化物と焼土を微量に含む
5	10YR4/4　褐色	シルト	
6	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む
7a	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む
7b	10YR5/2　灰黄褐色	シルト質粘土	炭化物を微量に含む
7c	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物を微量に含む
7d	10YR6/2　灰黄褐色	シルト質粘土	

第144図　SI1303　平・断面図

3．寺院西方建物群

方四町Ⅱ期官衙の南西で、郡山廃寺の北西に位置している。南を材木列(塀)で区画され、その北に掘立柱建物跡が配置されている。建物跡の全容が明らかな遺構には、総柱建物跡が多い。方四町Ⅱ期官衙の内部でも総柱の建物跡はきわめて稀で、しかも一箇所に集中するような地点は今のところ発見されていない。Ⅱ期官衙全域でも、この地区のみ複数棟の総柱あるいは束柱のある建物が検出されている。

SB1370建物跡（第96次・第146図）

桁行７間、総長15m(柱間寸法220cm)、梁行２間、総長5.2m(柱間寸法260cm)の東西棟の建物跡で、方向は梁行(西柱列)でN―2°―W、桁行(南柱列)でE―3°―Nである。柱穴は一辺50～110cmの隅丸方形で、深さは30～50cmである。柱痕跡は直径15～30cmである。内部の柱は、柱穴や柱痕跡とも小規模なものが多く、柱筋も梁列ではほぼ揃っているものの、桁列では不揃いとなっている。よって内部の柱は、束柱であると考えられる。S1E5のみ抜き取り穴が検出されている。

遺物は柱穴掘り方より、土師器坏、甕片、須恵器甕片が出土している。

SD1367・1372溝跡、SA272・1380材木列、SB1390・1395建物跡を切り、SD1381溝跡に切られている。

SB1375建物跡（第96次・第146図）

南北１間以上、総長2.8m以上(柱間寸法280cm)で、建物跡の南西隅と考えられ、柱列の方向はN―0°―E(真北方向)である。柱穴は一辺50～110cmの隅丸長方形で、深さは40～50cmである。柱痕跡は直径28～40cmである。調査区北壁際で落込みを検出しているが、柱間寸法から別遺構の一部と考えられる。

遺物はS2柱穴掘り方より、土師器甕片が１点出土している。

SD1367溝跡に切られている。

SB1390建物跡（第96次・第146図）

東西２間、総長3.8m(柱間寸法185～190cm)、南北２間、総長3.8m(柱間寸法180～195cm)の総柱建物跡で、方向は西柱列でN―3°―E、南柱列でE―2°―Sである。柱穴は一辺50～75cmの隅丸方形で、深さは30～40cmである。柱痕跡は直径20～30cmである。一部の柱に抜き取り穴が見られる。

SD1372溝跡を切り、SB1370建物跡に切られている。

SB1395建物跡（第96次・第146図）

東西２間、総長４m(柱間寸法200cm)、南北２間、総長4.4m(柱間寸法210～220cm)の総柱建物跡で、方向は西柱列でN―3°―W、南柱列でE―2°―Nである。柱穴は一辺50～90cmの隅丸方形で、深さは50cm程である。柱痕跡は直径20～25cmである。一部の柱に抜き取り穴が見られる。調査区の制約から確認できなかったが、南北の規模が２間以上になる可能性が残されている。

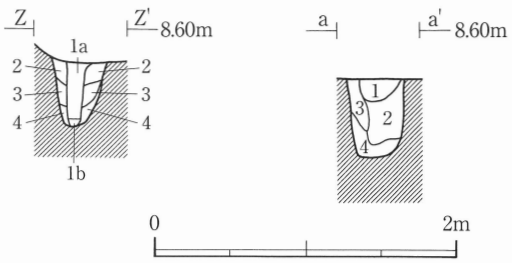
SD1367・1369溝跡、SA1380材木列を切り、SB1370建物跡に切られている。

SA1365材木列（第96次・第146図）

直径５～25cm程の丸材をE―2°―N方向に立て並べている。掘り方は上幅15～35cmで、深さは残存状況の良好な箇所で45～50cm、調査区西半では削平され途切れている。

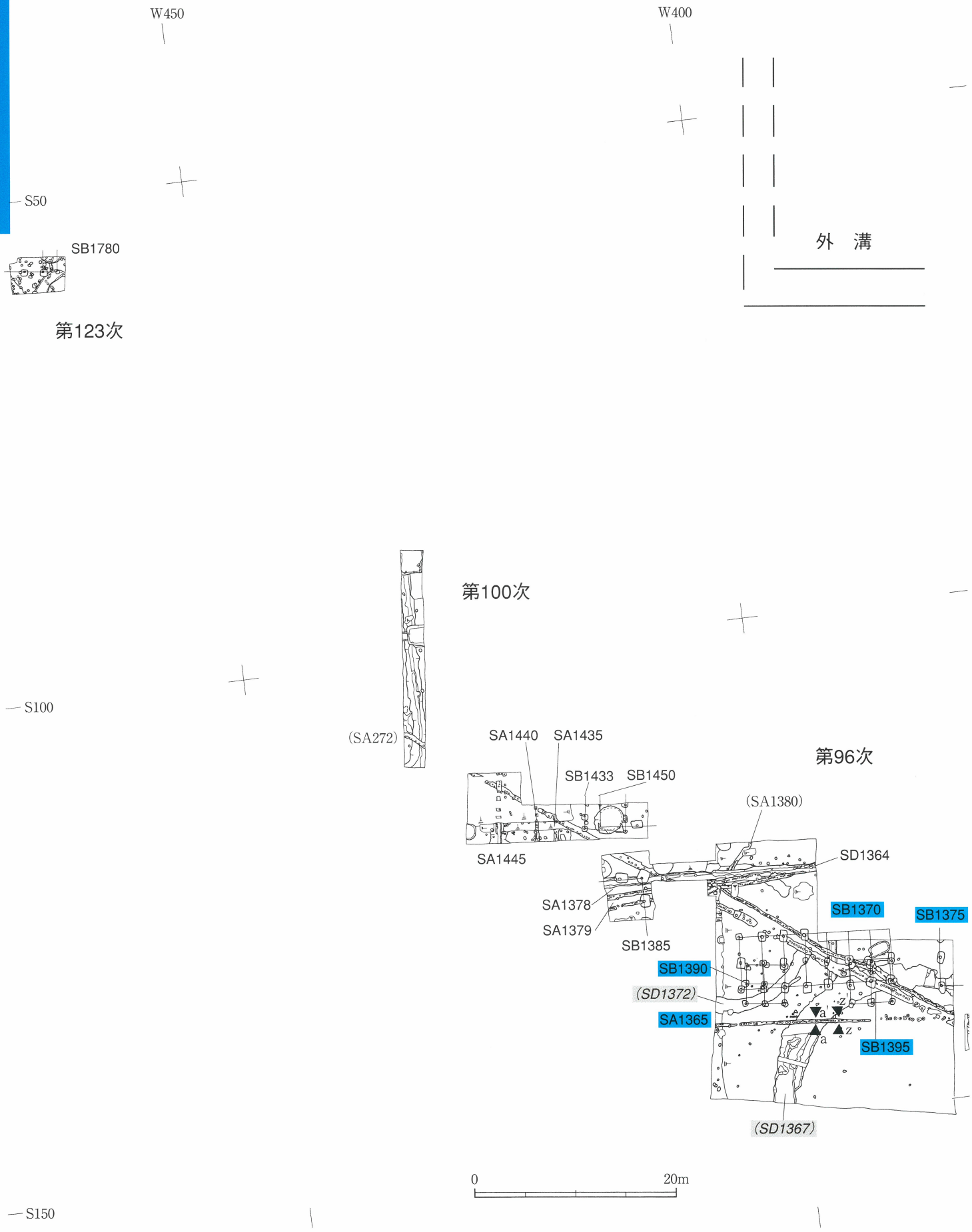
遺物は掘り方中より土師器坏、甕、須恵器甕片が少量出土している。

SD1367溝跡、SA272・1380材木列を切り、SD1381溝跡に切られている。

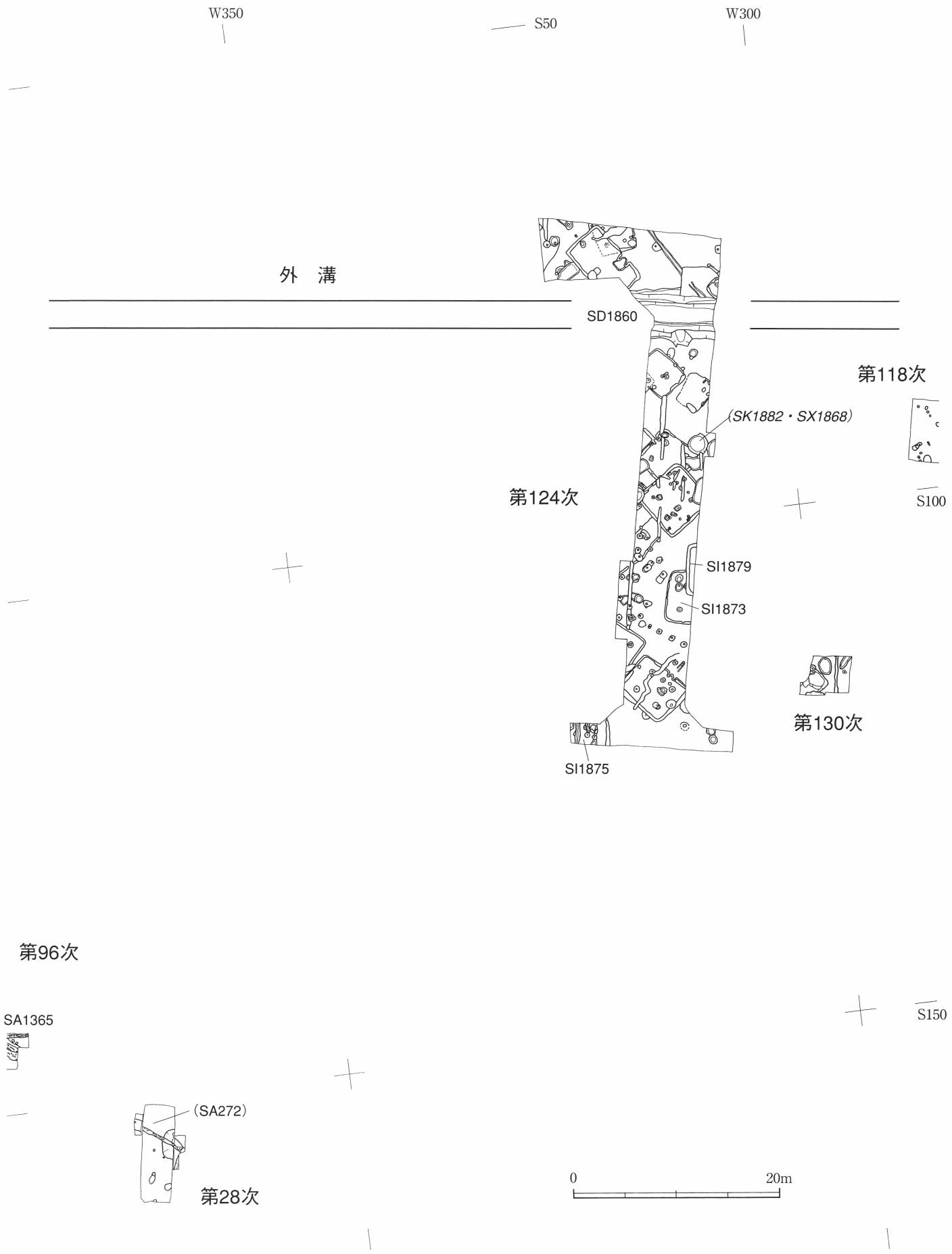


層位	土色	土性	備考
z-z'			
1a	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	柱痕跡
1b	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	灰色粘土を含む
3	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	
4	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄
a-a'			
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	柱痕跡の一部
2	10YR3/4 黒褐色	粘土質シルト	
3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	
4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	

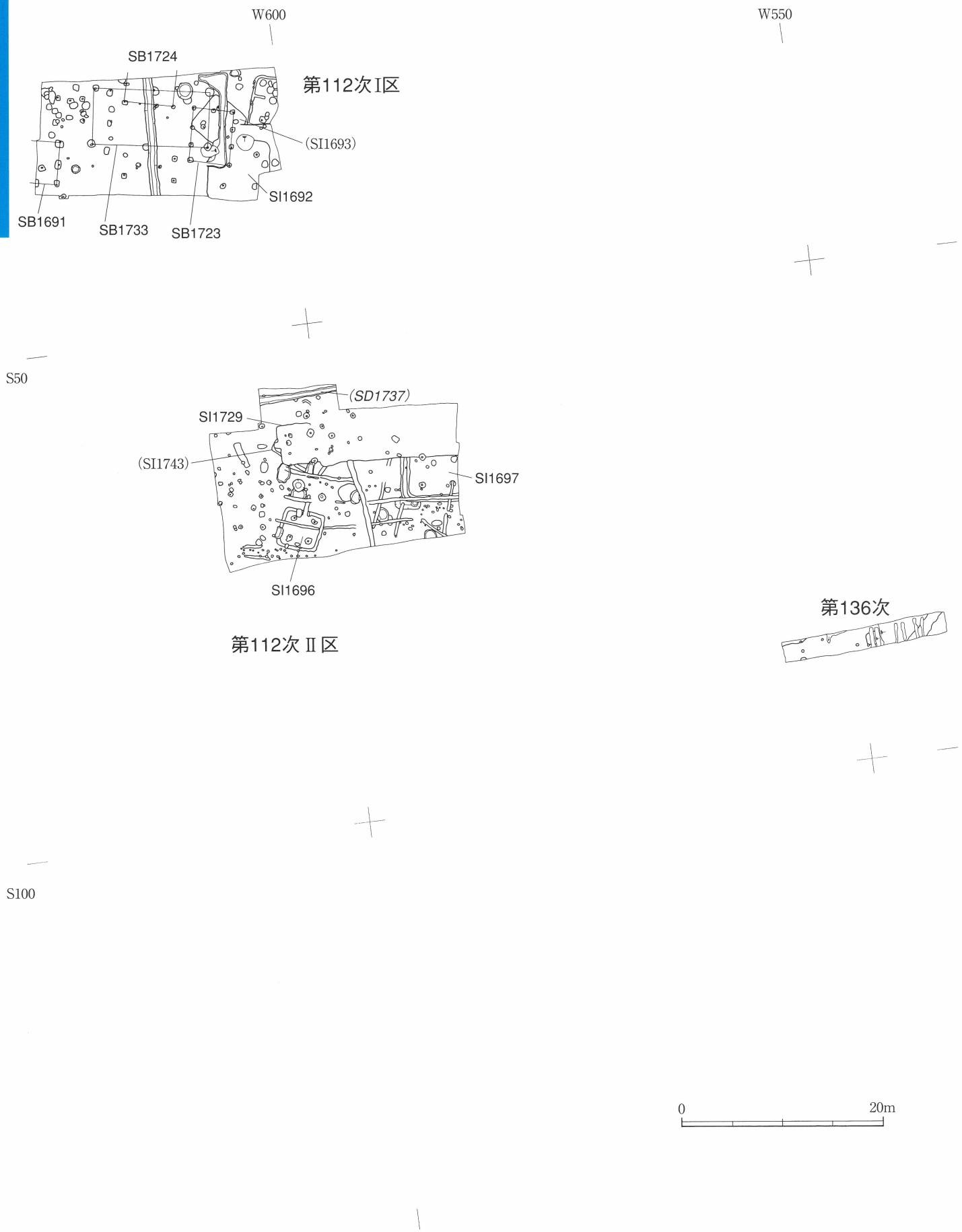
第145図　SA1365　断面図



第146図　Ⅱ期官衙南方1



第147図　Ⅱ期官衙南方2



第148図　Ⅱ期官衙西方1

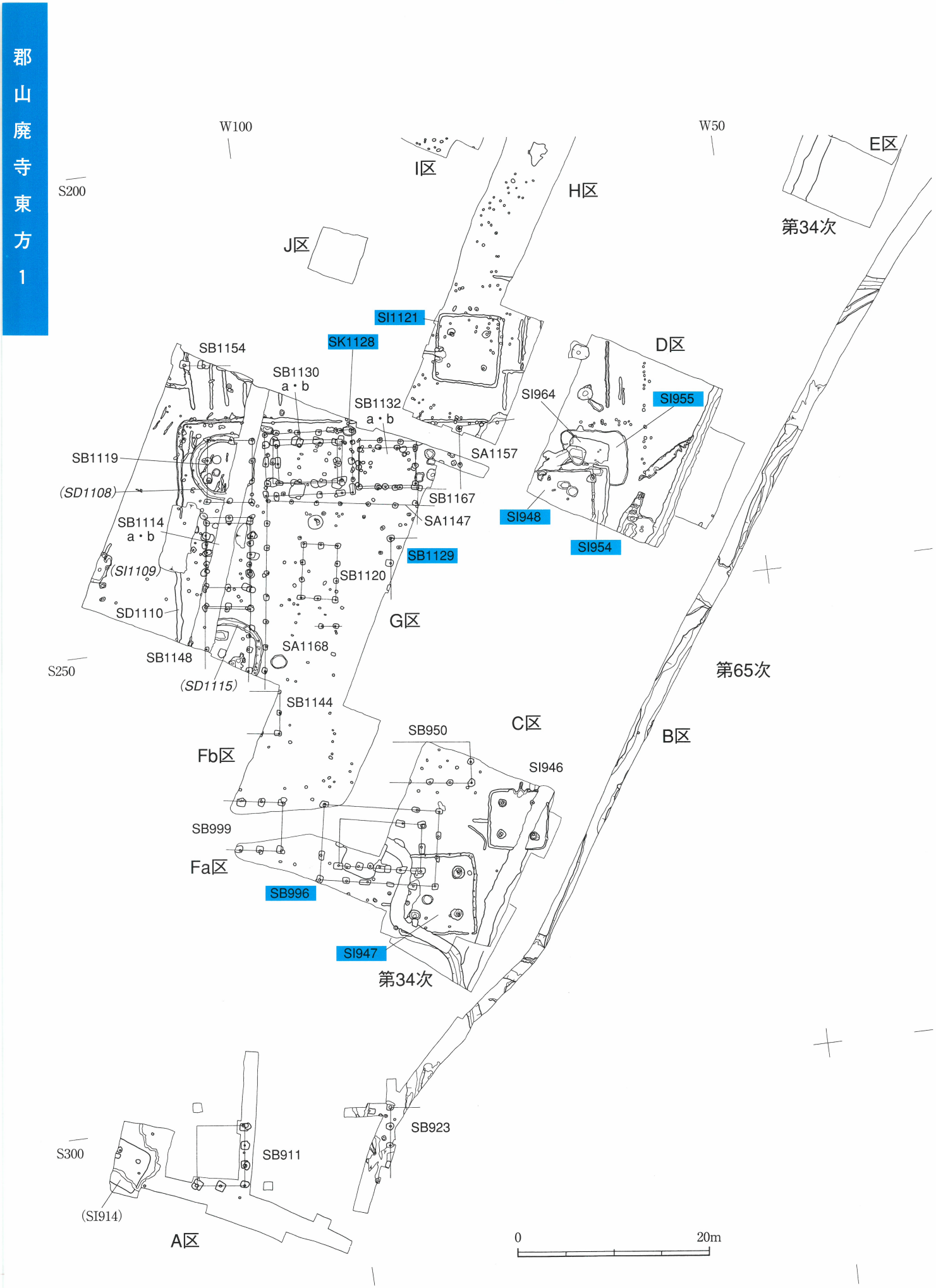
4．寺院東方建物群

郡山廃寺の東に位置し、16棟ほどの掘立柱建物跡が検出され、３時期の変遷が確認されている。建物の中にはSB1130建物跡やSB996建物跡のように、規模は小さいながら四面廂付建物跡が含まれ、最終時期の遺構群にはSA1147一本柱列による塀跡が伴っている。第65次調査については、正式報告が刊行されているので、記載を省略すべきところではあるが、遺跡全体の年代的な検討の上で重要な遺構、遺物が含まれているので、一部ではあるが掲載する。

SB996建物跡（第65次・第149、150図）

桁行５間、総長12m（身舎部分柱間寸法210～220cm、平均215cm、廂部分柱間寸法220～300cm、平均246cm）、梁行３間、総長８m（身舎部分柱間寸法220～260cm、平均240cm、廂部分柱間寸法220～280cm、平均260cm）の東西棟の四面廂付建物跡で、梁行の方向はN―2°―Eである。柱穴は一辺60～110cmの隅丸長方形のものが多く、柱

第149図　SB996、SI947　平面図



第150図　郡山廃寺東方1

痕跡は身舎で直径15～26cm、廂で直径14～28cmである。柱穴の深さは、身舎で35～60cmで、廂で30～70cmである。N3E1柱穴の柱痕跡下部の材が残存していた。身舎のN1E1のみに抜き取り穴が見られる。

遺物は掘り方中より土師器坏、甕片や、須恵器坏、甕片が出土している。

SI947・1101竪穴住居跡を切り、SD931溝跡に切られている。

SI947竪穴住居跡（第65次・第149、150図）

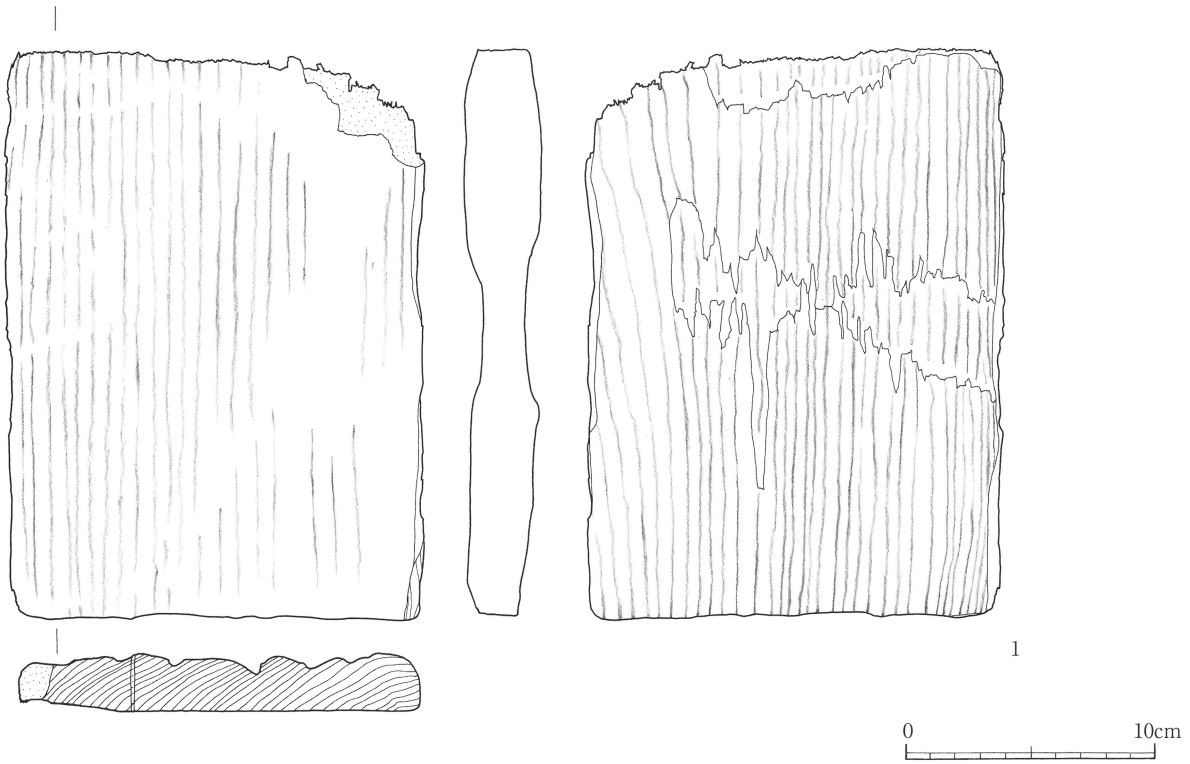
東西8.2m、南北8.6mの隅丸方形で、東壁の方向はN—2°—Wである。壁は垂直気味に立ち上がるところと緩やかに立ち上がるところがあり、高さは15～30cm残存している。床面は褐灰色粘土による貼床で、西側の床面上に焼土ならびに炭化物が広がっている。床面上で5つのピットを検出したが、そのうち規模や形態、配置からP1～P4が主柱穴と考えられた。P1、P3からは底面より礎板状に板材が重なり合って出土した。各々の板材は脆弱であったが、P3から出土した板材（第151図1）は、埋設時の形態を明瞭に残していた。

カマドは西壁中に位置したと推定されるが、SD931溝跡に切られ煙道のみ検出された。煙道は残存長100cm、上幅22～27cm、下幅12～16cmで、明瞭ではないが先端がやや凹んでいる。

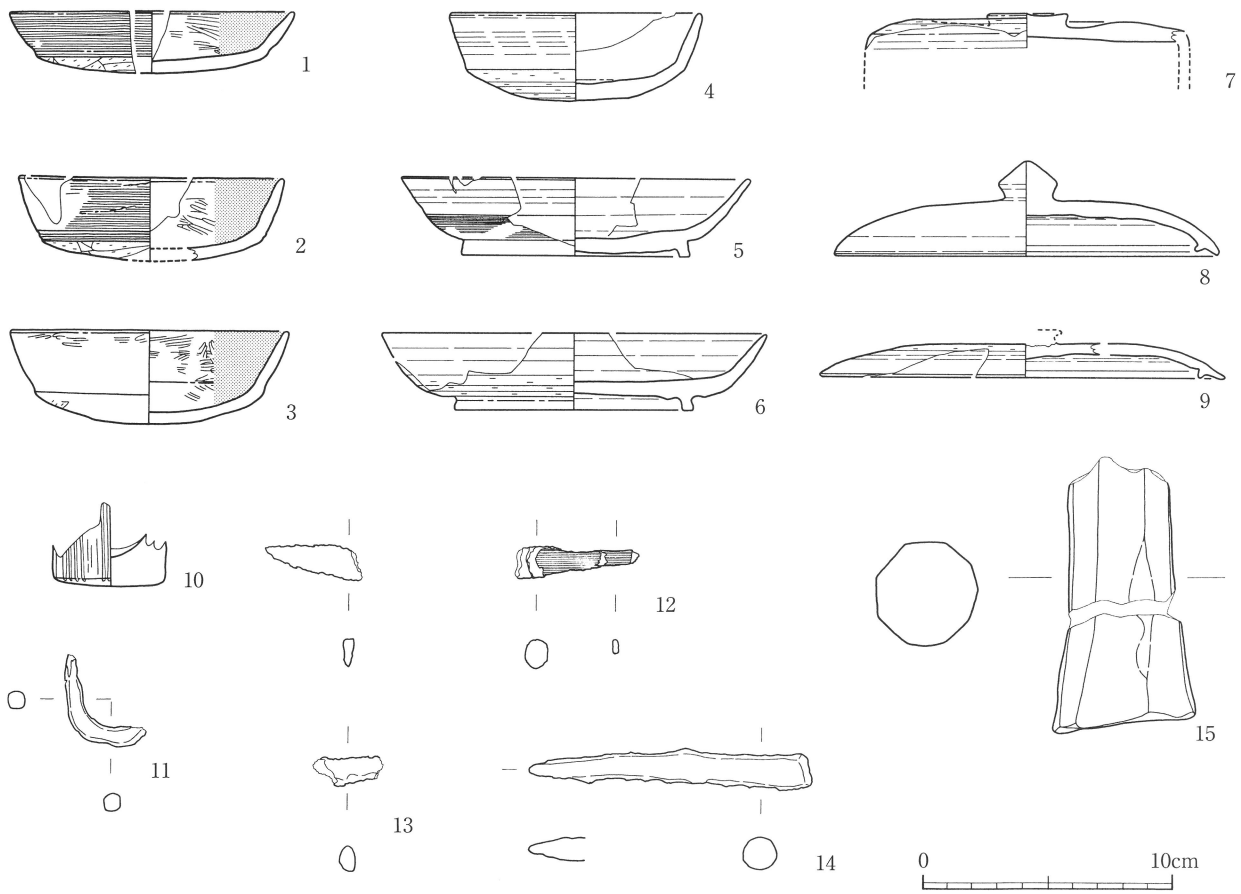
周溝は上幅15～40cm、下幅4～21cm、床面からの深さは7～12cmで、断面形はほぼU字形である。周溝内よりピットを14箇所で検出した。

遺物は住居跡床面から体部の下端に段のある土師器<中>C-8坏（第152図2）、丸底の須恵器<中>E-1坏（第152図4）、器高があまりなく体部が外傾する<中>E-17高台付坏（第152図5）、器高が比較的高いと推定される<中>E-77蓋（第152図7）、天井部が平らな<中>E-19蓋（第152図8）、天井部がさらに低くなる<中>E-18蓋（第152図9）、残欠の鉄製品<中>N-26・27不明品（第152図11、13）などが出土している。またP1から鉄製品<中>N-15刀子（第152図12）、P3から土製品<中>P-9（第152図15）、周溝内から比較的扁平な土師器<中>C-3坏（第152図1）が出土している。その他堆積土中から土師器<中>C-33坏（第152図3）、須恵器<中>E-78高台付坏（第152図6）、土製品<中>P-10不明品（第152図10）、鉄製品<中>N-24不明品（第152図14）などが出土している。

SD931溝跡、SB997建物跡に切られている。



第151図　SI947　出土遺物（1）



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
SI947（1）											
1	中L-1	木製品	板材	SI947	P3	長さ22.7　幅16.6　厚さ1.8～3.2				65	
SI947（2）											
1	中C-3	土師器	坏	SI947・周溝	堆積土	器高2.5　口径11.4　底径9.2	口縁部・体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ　黒色処理	AⅡ3	65	
2	中C-8	土師器	坏	SI947	床面	残存高3.4　口径（10.7）　底径（8.8）	口縁部・体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ　黒色処理	AⅡ3	65	
3	中C-33	土師器	坏	SI947	堆積土	器高3.8　口径11.2　底径9.2	口縁部ヘラミガキ、体部・底部不明	ヘラミガキ　黒色処理	AⅡ3	65	
4	中E-1	須恵器	坏	SI947	床面	器高3.6　口径10.2　底径8.8	口縁部・体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	不明	Ⅰ1a	65	
5	中E-17	須恵器	高台付坏	SI947	床面	器高3.1　口径14.0　底径9.2	口縁部・体部ロクロナデ→一部ナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅰ1	65	
6	中E-78	須恵器	高台付坏	SI947	堆積土	器高3.1　口径15.4　底径9.6	口縁部・体部ロクロナデ→ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅰ1	65	
7	中E-77	須恵器	蓋	SI947	床面	残存高1.4　口径（13.0）	つまみ部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ		65	
8	中E-19	須恵器	蓋	SI947	床面	器高4.8　口径15.4	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅰ2a	65	
9	中E-18	須恵器	蓋	SI947	床面	残存高1.3　口径16.3	端部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅰ2	65	
10	中P-10	土製品	不明	SI947	堆積土	縦3.4以上　横4.6	体部ハケメ、底部指ナデ	指ナデ		65	
11	中N-26	金属製品	不明	SI947	床面	長さ3.7　厚さ0.5～0.75				65	
12	中N-15	鉄製品	刀子	SI947	P1	刀部長3.8以上、茎部長4.2以上、茎元幅1.3、棟幅～4.0				65	
13	中N-27	金属製品	不明	SI947	床上	長さ2.8以上、幅0.7～1.1				65	
14	中N-24	金属製品	不明	SI947		長さ11.4、幅～1.5				65	
15	中P-9	土製品	不明	SI947	P3	縦11.8以上、横4.0～5.5	ヘラケズリ			65	

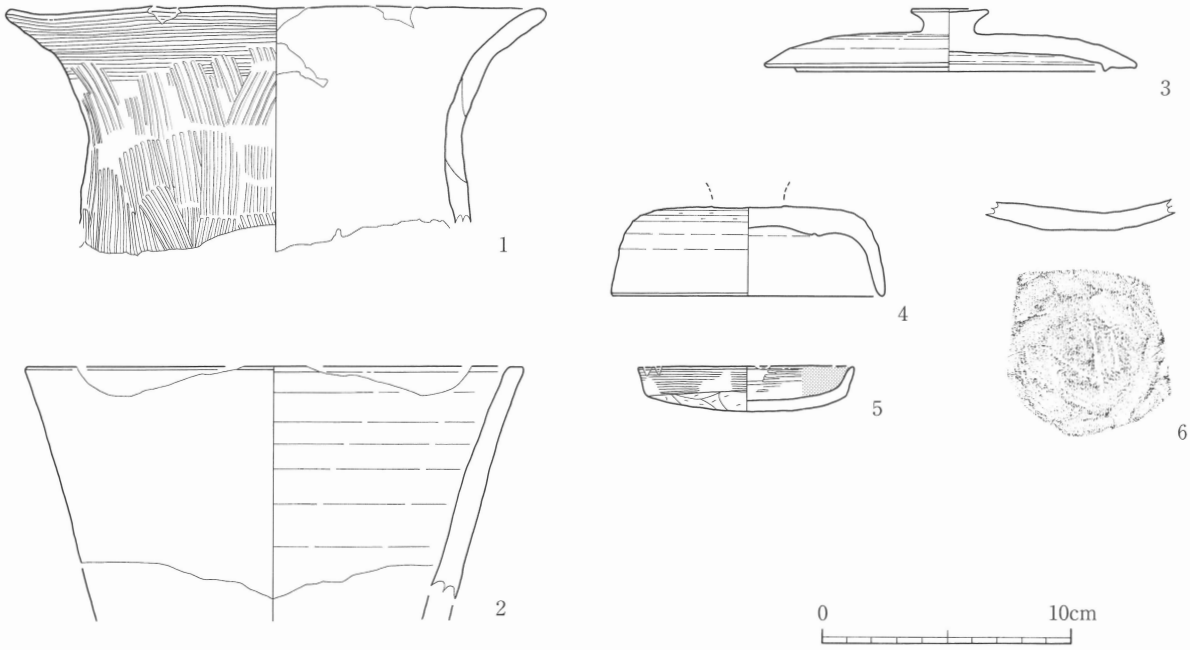
第152図　SI947　出土遺物（2）

SI948竪穴住居跡（第65次・第150、155図）

東西6.1m、南北5.15m以上の方形か長方形と推定され、東壁の方向はN―2°―Wである。壁は垂直に立ち上がり、高さ20～25cm残存している。床面は灰黄褐色粘土質シルトと黒褐色粘土による貼床で、P1の西側に80×135cmの範囲で、高さ6cmのマウンド状の高まりがある。床面上で10個のピットを検出したが、そのうち規模や形態、配置からP1が主柱穴と考えられた。

カマドは北壁中に天井部やソデが崩壊した痕跡のみを検出した。これらを撤去した床面上で83×45cmの不整形で、深さ5cm程のピットを検出した。

周溝は北壁の一部と東壁に認められ、幅14～25cm、深さ3～6cmで、断面形はU字形である。周溝内よりピッ



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
1	中C-37	土師器	甕	SI948	床面	残存高8.75　口径21.6	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	口縁部・体部不明	AⅠ	65	
2	中E-81	須恵器	甕	SI948	P1	残存高10.2　口径20.0	口縁部・体部不明	口縁部・体部ロクロナデ	Ⅰ	65	
3	中E-9	須恵器	蓋	SI948	P1	器高2.5　口径14.9	端部・つまみ部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ→ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅰ2b	65	
4	中E-79	須恵器	蓋	SI948	掘り方	残存高3.5　口径10.3	端部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅱ2	65	
5	中C-4	土師器	坏	SI948	堆積土	器高2.8　口径8.6　底径8.0	口縁部・体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅡ3	65	
6	中C-89	土師器	坏	SI948	堆積土	残存高1.2　底径3.0	体部ヘラケズリ、底部木葉痕	ヘラミガキ、黒色処理		65	

第153図　SI948　出土遺物

トを6箇所で検出した。

遺物は住居跡床面からハケメ調整の顕著な土師器<中>C-37甕（第153図1）、堆積土中からはきわめて小型の土師器<中>C-4坏（第153図5）、底部に木葉痕の残るC-89坏（第153図6）、掘り方埋土中からは器高が高い須恵器<中>E-79蓋（第153図4）、P1からカエリがありきわめて扁平な須恵器<中>E-9蓋（第153図3）、口縁部がラッパ状に開くE-81甕（第153図2）が出土している。

SI954・955竪穴住居跡を切っている。

SI954竪穴住居跡（第65次・第150、155図）

東西7.3m以上、南北5.9m以上の方形か長方形と推定され、東壁の方向はN—4°—Eである。壁は垂直に立ち上がり、高さは残存状況の良好な箇所で20cm程である。床面は黒褐色粘土質シルトによる貼床である。床面上で2個のピットを検出したが、そのうち規模や形態、配置からP1が主柱穴と考えられた。

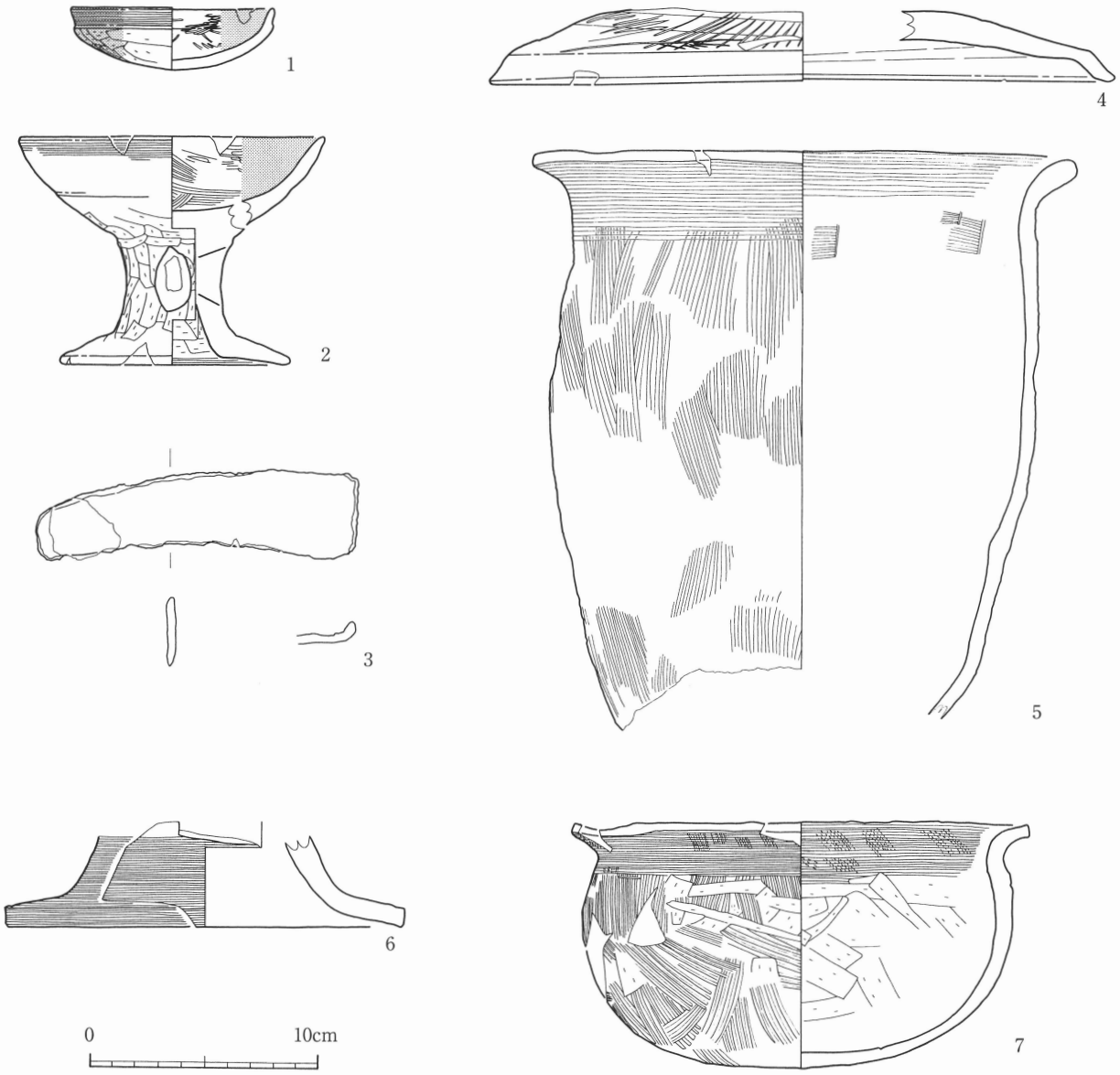
周溝は幅21～30cm、深さ10～11cmで、断面形はU字形である。北壁の西半で途切れている。

遺物は住居跡床面から脚部に窓を有する土師器<中>C-18高坏（第154図2）、基部がL字に折れ曲がった鉄製品<中>N-9鎌（第154図3）、堆積土中からはハケメ調整の土師器<中>C-94甕（第154図5）、P2からは両面黒色処理され、小振りの土師器<中>C-15坏（第154図1）、天井部に櫛描き状の沈線が多数入る須恵器<中>E-82蓋（第154図4）が出土している。

SI955竪穴住居跡を切り、SI948竪穴住居跡に切られている。

SI955竪穴住居跡（第65次・第150、155図）

東西6.56m、南北5.7mの隅丸方形で、南北軸の方向はN—0°—Eである。壁は緩やかに立ち上がり、高さは5～20cm残存している。床面は黒褐色粘土質シルトによる貼床で、張替えを伴う造り替えがあると考えられる。



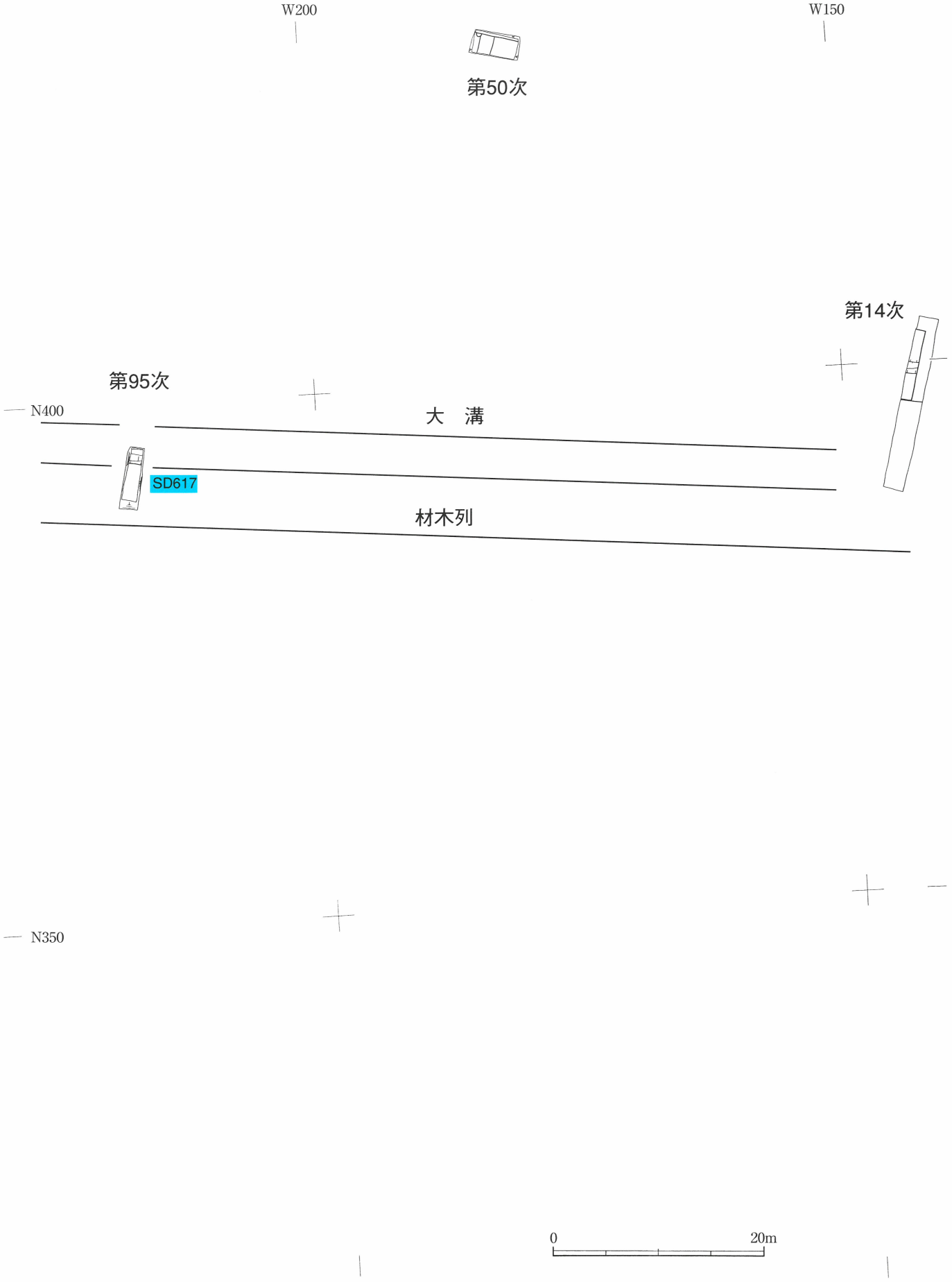
図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
1	中C-15	土師器	坏	SI954	P2	器高2.7　口径8.8　底径8.7	口縁部ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリ黒色処理	口縁部→底部ヘラミガキ、黒色処理	AⅡ1b	65	
2	中C-18	土師器	高坏	SI954	床面	器高10.0　口径13.3　底径10.1	口縁部ヨコナデ、坏底・脚柱部ヘラケズリ、脚裾部摩滅	坏部ヘラミガキ・黒色処理、脚柱部ヘラケズリ、脚裾部ヨコナデ	Ⅰ	65	
3	中N-9	金属製品	鎌	SI954	床面	長さ14.1				65	
4	中E-82	須恵器	蓋	SI954	P2	残存高3.0　口径27.0	端部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ→櫛描沈線	ロクロナデ	Ⅱ2	65	
5	中C-94	土師器	甕	SI954	堆積土	残存高25.7　口径23.6	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	AⅠ1b	65	
6	中C-35	土師器	高坏	SI955	掘り方	残存高4.0　底径17.4	脚裾部ヘラナデ	脚裾部一部ヘラケズリ	Ⅱ	65	
7	中C-20	土師器	鉢	SI955	堆積土	器高10.8　口径20.0	口縁部ハケメ→ヨコナデ、体部・底部ハケメ→ヘラケズリ	口縁部ハケメ→ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリ	Ⅱ	65	

第154図　SI954・955　出土遺物

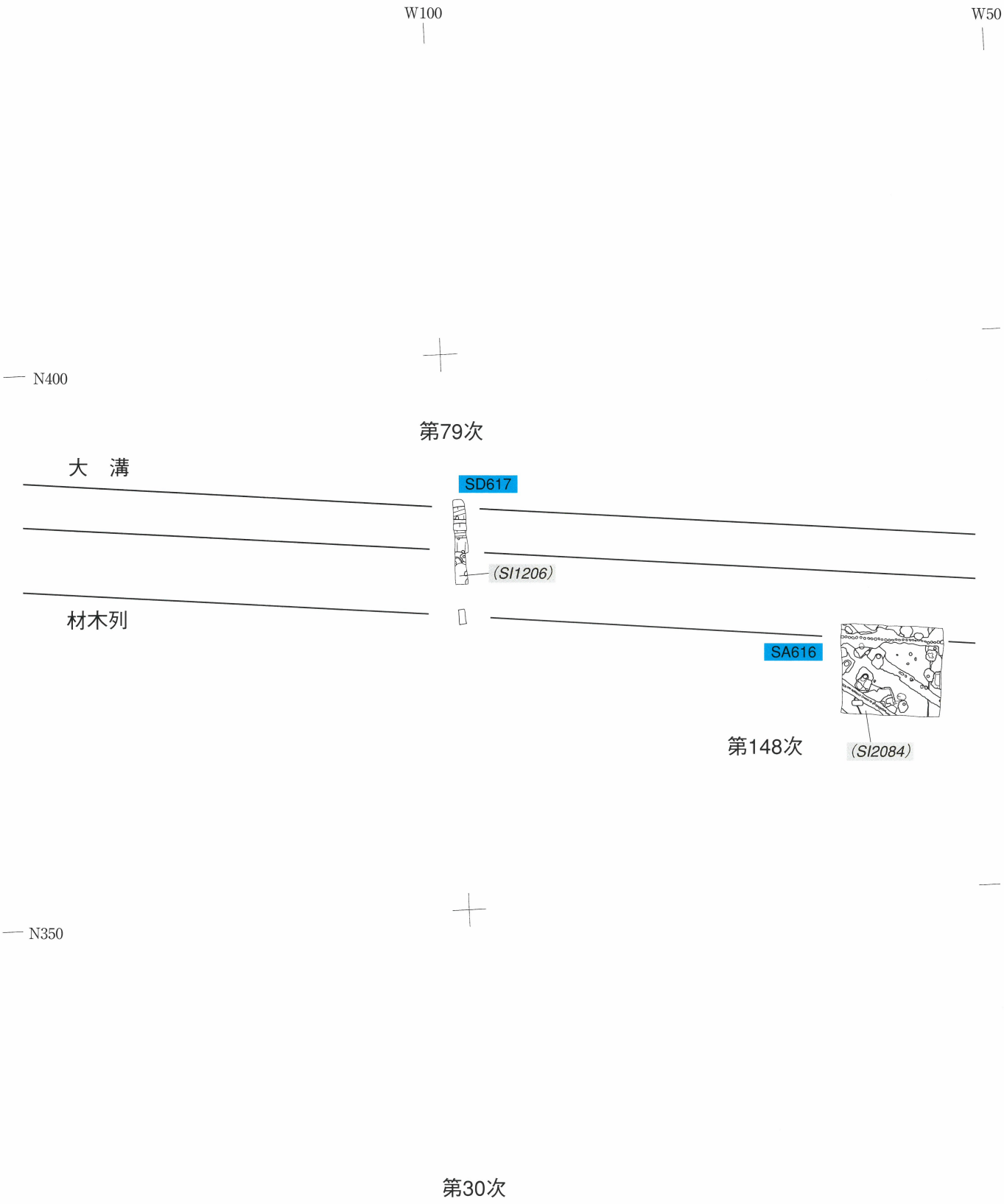
カマドは北壁やや西よりにあり、55×75cmの範囲が深さ13cm程で舌状に北に延びている。周辺の床面上に焼土やソデなどの痕跡が全くないことから、住居の使用された最終段階より以前の旧カマドと考えられる。

遺物は堆積土中から半球形の土師器<中>C-20甕（第154図７）、掘り方埋土中から窓の付いていた痕跡を留める土師器<中>C-35高坏脚部片（第154図６）が出土している。

SI954・964竪穴住居跡に切られている。



第131図　方四町Ⅱ期官衙北辺1



第132図　方四町Ⅱ期官衙北辺2

2．南方官衙

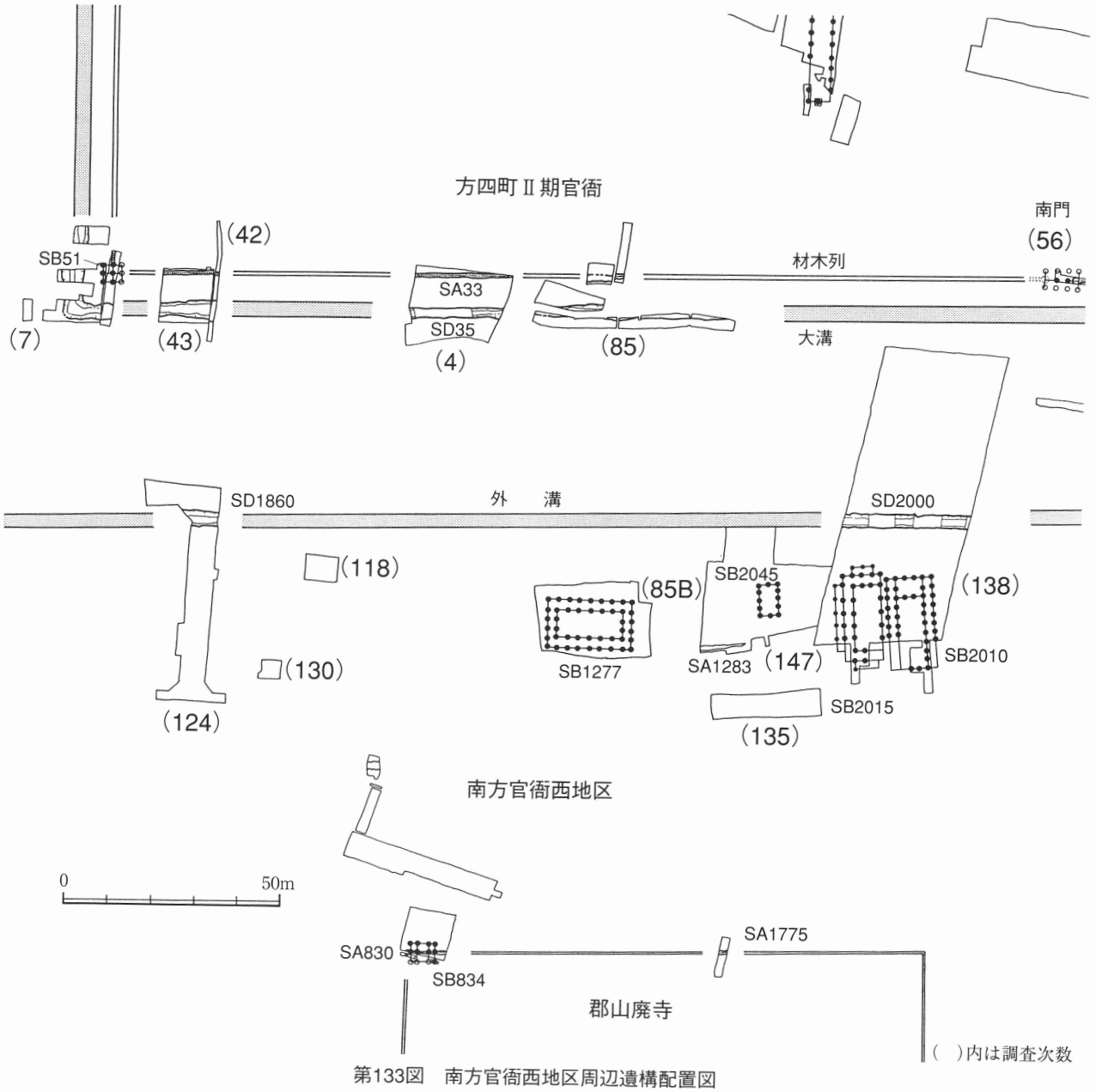
南方官衙は方四町Ⅱ期官衙の南に、正殿やその周辺の主要建物と同等か、より規模が大きい建物により構成されている。建物の北側は「外溝」としたSD2000溝跡(註14)により遮蔽されており、その南側に整然と並んでいる。便宜上、東地区と西地区に分けているが、どのようなまとまりになって機能していたかについては明らかではない。

[南方官衙西地区]

SB1277建物跡（第85次・第133、136図）

桁行８間、総長19.6m(身舎部分柱間寸法240～278cm、平均260cm、廂部分柱間寸法185～218cm、平均199cm)、梁行５間、総長11m(身舎部分柱間寸法190～225cm、平均207cm、廂部分柱間寸法227～257cm、平均240cm)の東西棟の四面廂付建物跡で、梁行の方向はN―2°―Eである。柱穴は一辺62～142cmの隅丸長方形、隅丸方形、あるいは不整方形を呈する。柱痕跡は身舎で直径23～31cm、廂で直径18～31cmである。柱穴の深さは廂で14～24cmである。柱穴掘り方の埋土や柱痕跡には炭化物や焼土は含まれていない。

SB1278・1280建物跡、SA1283材木列を切っている。

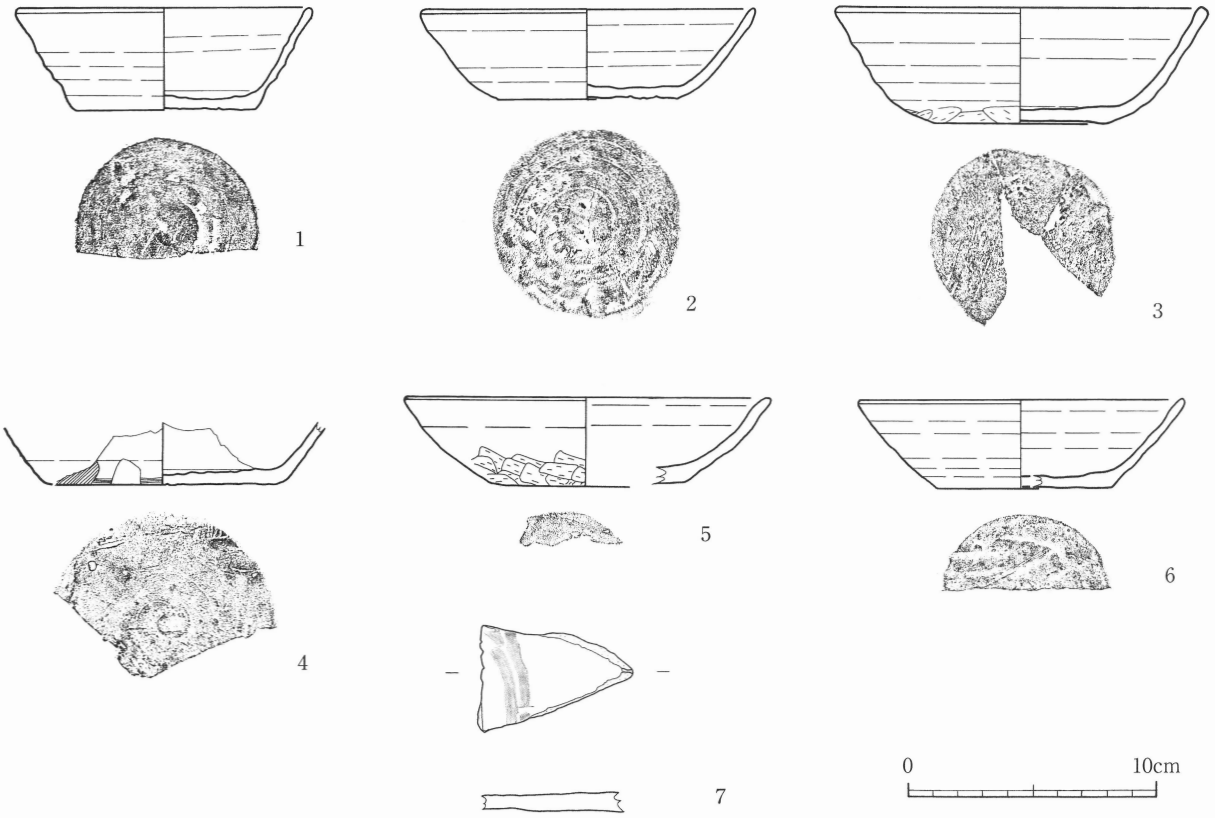


第133図　南方官衙西地区周辺遺構配置図

SB2010建物跡（第138次・第133、137図）

桁行10間、総長21m（身舎部分柱間寸法200～220cm、平均210cm）、梁行５間、総長10.8m（身舎部分柱間寸法210～220cm、平均220cm、廂部分柱間寸法200・220cm）の南北棟で、東西に廂を有する建物跡である。方向は身舎の東桁行でN―3°―Wである。身舎の柱穴は一辺85～120cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径25～38cmの円形または楕円形である。身舎は北から２間のところで仕切られている。柱穴掘り方や柱痕跡は、身舎が廂に比べてやや大きくなっている。柱痕跡は木質の材が残っているもの（N11E2柱穴）がある。また各柱穴の柱は抜き取り、あるいは切り取りを受けており、柱下部が地中に残ったもの（N10E2柱穴）もある。

遺物は掘り方中では、N7E1から器種は不明であるが外面に二条の墨痕のある土師器C-916底部片（第134図７、写真図版772）、N3E3からは長さ5.5cmの頂部が平坦なN-110釘（写真図版772）が、N4W2からも長さ9.5cmの釘状の鉄製品N-109（写真図版772）が出土している。抜き取り穴ではN5E2から高さ6.5cm以上の円面硯、N6E1からは底部回転ヘラ切り後に手持ちヘラケズリされた須恵器E-456坏（第134図１）、N6W2からは長さ4.5cmの釘状の鉄製品N-108（写真図版772）、N9E2からは回転ヘラ切り痕跡が観察される須恵器E-458坏（第134図４）、N11E2からは宝珠形のツマミを有する大形の須恵器E-466蓋の破片（写真図版772）、N11E3からは内部に緑色の鉱物を含むK-253鉱石（写真図版772）が出土している。このほかN11E2の抜き取り穴からは、底部に回転ヘラ切り後手持ちヘラ



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
1	E-456	須恵器	坏	SB2010N6E1	抜き取り穴	器高4.1　口径12.0　底径7.4	口縁部・体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ→手持ちヘラケズリ	口縁部・体部　ロクロナデ	Ⅱ1b	138	772
2	E-467	須恵器	坏	SB2010bN10E2	抜き取り穴	器高3.6　口径13.6　底径7.2	口縁部・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り→回転ヘラケズリ	口縁部・体部　ロクロナデ	Ⅱ1b	138	772
3	E-451	須恵器	坏	SB2010N11E3	抜き取り穴	器高4.4　口径15.0　底径7.0	口縁部・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	口縁部・体部　ロクロナデ	Ⅱ1b	138	772
4	E-458	須恵器	坏	SB2010bN9E2	抜き取り	残存高2.5　底径9.6	体部ロクロナデ→ナデ、底部回転ヘラ切り→ヘラナデ→ナデ	体部ロクロナデ	Ⅱ1	138	772
5	E-453	須恵器	坏	SB2010N10E2	抜き取り	器高3.6　口径14.7　底径7.8	口縁部・体部ロクロナデのちヘラケズリ、底部ケズリ	口縁部・体部　ロクロナデ	Ⅱ1b	138	772
6	E-452	須恵器	坏	SB2010bN10E2	抜き取り	器高3.6　口径13.1　底径7.0	口縁部・体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	口縁部・体部　ロクロナデ	Ⅱ1b	138	772
7	C-916	土師器	坏	SB2010N7E1	柱穴跡	長さ5.7	二条の墨痕あり	黒色処理	A	138	772

第134図　SB2010　出土遺物

ケズリがされた須恵器E−452・467坏（第134図６、２）、底部に手持ちヘラケズリのみが観察される須恵器E−453坏（第134図５）などの多くの遺物が出土している。

SD1951・1995溝跡を切り、SD2008・2018・2019溝跡に切られている。

SB2015建物跡（第138次・第133、137図）

桁行７間、総長19.6m（身舎部分柱間寸法280〜310cm、平均298cm、廂部分柱間寸法230cm）、梁行４間、総長8.8m（身舎部分柱間寸法200〜225cm、平均215cm、廂部分柱間寸法225cm）の南北棟で、南、北、西に廂を有する建物跡である。方向は身舎の西桁行でN—1°—Wである。身舎の柱穴は一辺83〜140cmの隅丸長方形で、柱痕跡は直径20〜40cmの円形または楕円形である。廂の柱穴は一辺60〜123cmの長方形で、柱痕跡は直径20〜36cmの円形または楕円形である。各柱穴の掘り方や柱間寸法にややばらつきがある。柱穴の掘り方や柱痕跡は身舎が廂に比べやや大きくなっている。ほとんどの柱穴に抜き取り穴が見られるが、西桁行の抜き取り穴は掘り方底面に及んでいる。柱痕跡の中には、木質部が残っているもの（N2E5、N3E5、N5E5柱穴）がある。さらに廂のある建物の南、北、西側には、掘り方が直径27〜40cm程の円形で、直径10〜14cmの柱痕跡が伴う柱穴が取り付いている。

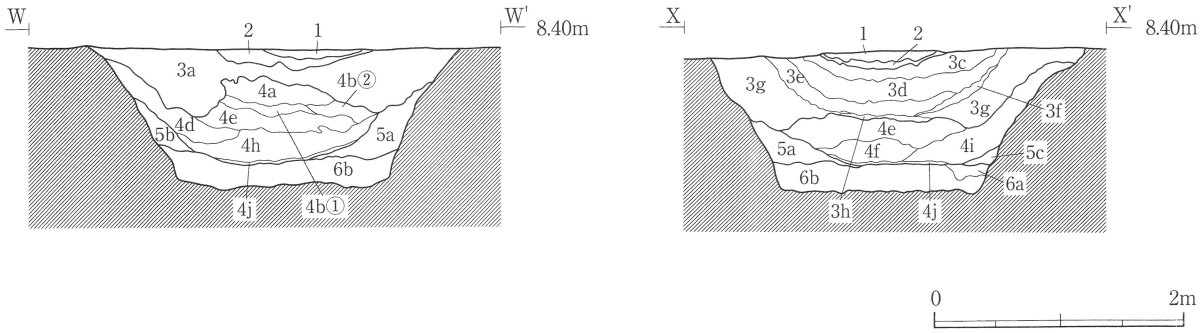
遺物は、柱穴の抜き取り穴N1E4から鉄滓、N4W2、N7E3から瓦片、各柱穴より土師器、須恵器の小片が多量に出土している。

SA1910材木列、SD1995・1951・1952溝跡を切り、SD2002・2003・2009・2013・2031・2041溝跡に切られている。

SD2000溝跡（第138次・第133、137図）

上幅300〜340cm、底面幅160〜170cm、深さ120cm程、断面形は逆台形の溝跡であり、おおむね平坦である。第65次調査のSD984溝跡や第124次調査のSD1860溝跡と連続する遺構である。方向はE—0°—S（真東西）で、第65次調査から第124次調査で検出した箇所まで360m程である。方四町Ⅱ期官衙の外郭大溝と心々で48〜50m離れて平行している。堆積土中の第２層は灰白色火山灰である。

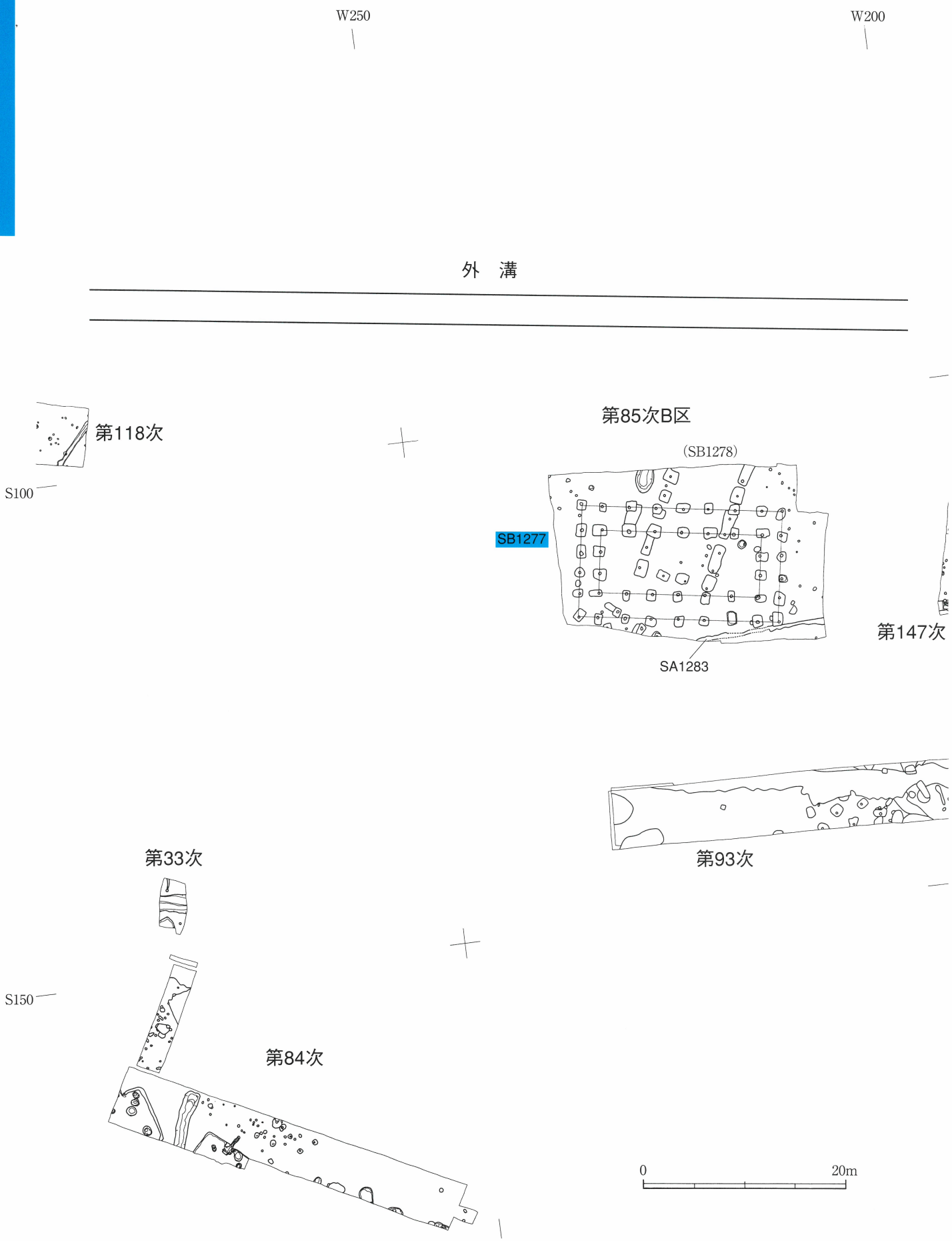
遺物は第138次調査区内の第１層中より底部に回転糸切り痕跡が観察される土師器坏、鉄滓、鉄片、第３層中よ



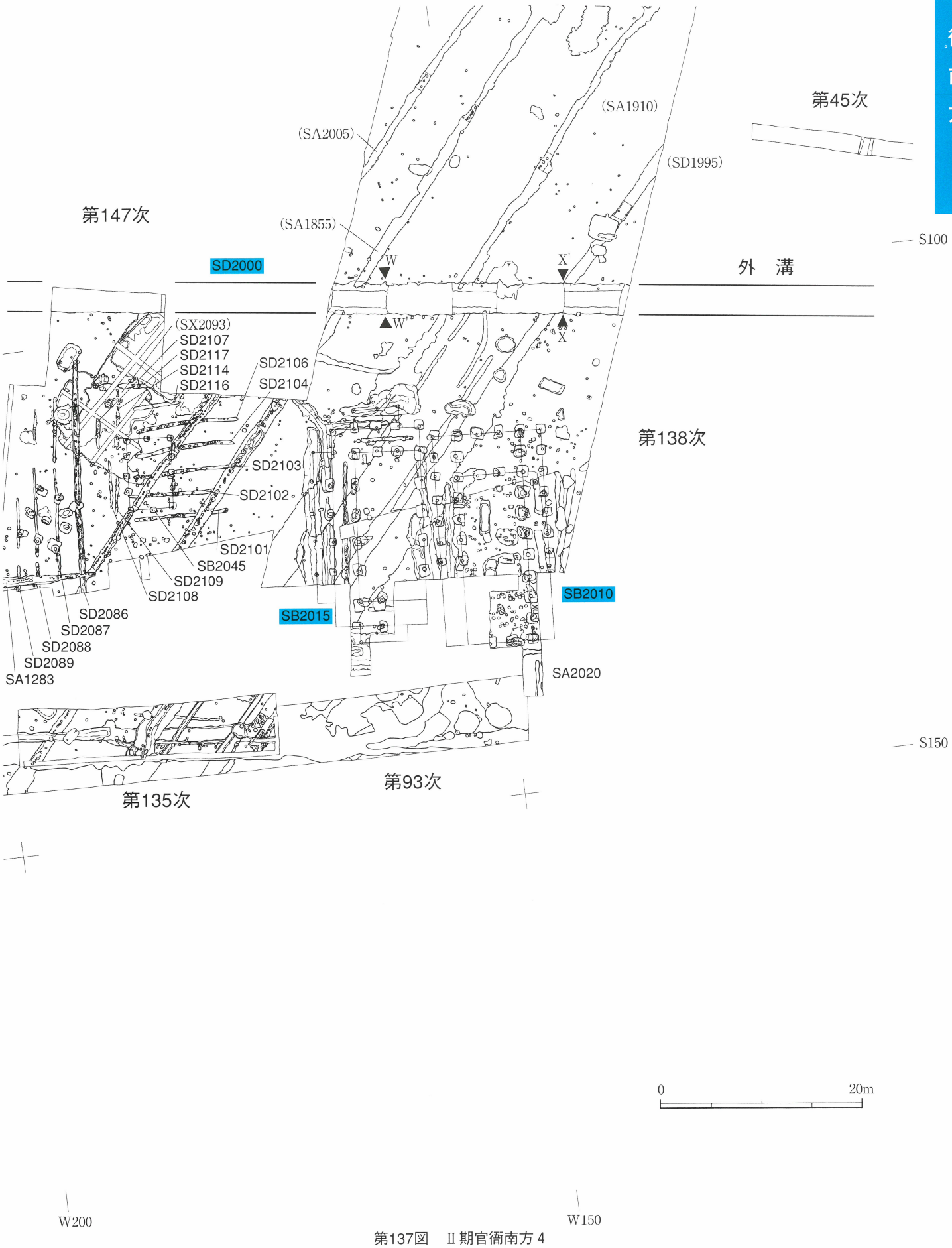
遺構名	層位	土色	土性	備考
SD2000	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	
	2	10YR6/2 灰黄褐色	火山灰	「灰色火山灰」
	3a	10YR5/1 褐灰色	粘土	細かくマンガン粒を含む
	3b	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	（調査区西壁）
	3c	10YR3/2 黒褐色	粘土	褐色粘土を小ブロックで含む
	3d	10YR4/1 褐灰色	粘土	
	3e	10YR3/1 黒褐色	粘土	
	3f	10YR4/2 灰黄褐色	砂質粘土	褐色土を全体に細かく含む
	3g	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色粘土（Ⅳ層）を小ブロックで含む
	3h	5Y4/1 灰色	粘土	明黄褐色粘土を小ブロックで含む。酸化鉄が顕著である。
	4a	10YR4/1 褐灰色	粘土	
	4b①	10YR3/1 粘土	粘土	
	4b②	10YR5/1 褐灰色	粘土	3a層に炭粒、焼土を微量に含む
	4c	10YR7/6 明黄褐色	粘土	Ⅳ層と黒褐色粘土（調査区西壁）
	4d	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	
	4e	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	
	4f	5Y5/1 灰色	粘土	
	4g	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	明黄褐色粘土（Ⅳ層）を含む（調査区西壁）

遺構名	層位	土色	土性	備考
SD2000	4h	2.5Y7/2 灰黄褐色	粘土	灰黄褐色、黒褐色粘土が細かく混合している
		10YR3/1 黒褐色	粘土	
	4i	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	灰黄褐色、黒褐色粘土とにぶい黄橙色シルトの混合層
		10YR3/1 黒褐色	粘土	
		10YR7/4 にぶい黄橙色	シルト	
	4j	5Y3/1 オリーブ黒	粘土	
	5a	10YR3/1 黒褐色	粘土	黒褐色粘土とにぶい黄橙色シルトの混合層
		10YR6/4 にぶい黄橙色	シルト	
	5b	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	
	6a	10YR4/1 褐灰色	粘土	灰黄褐色粘土がまじる
	6b	2.5Y5/1 黄灰色	粘土	黒褐色粘土、灰色粘土を含む（グライ化）

第135図　SD2000　断面図



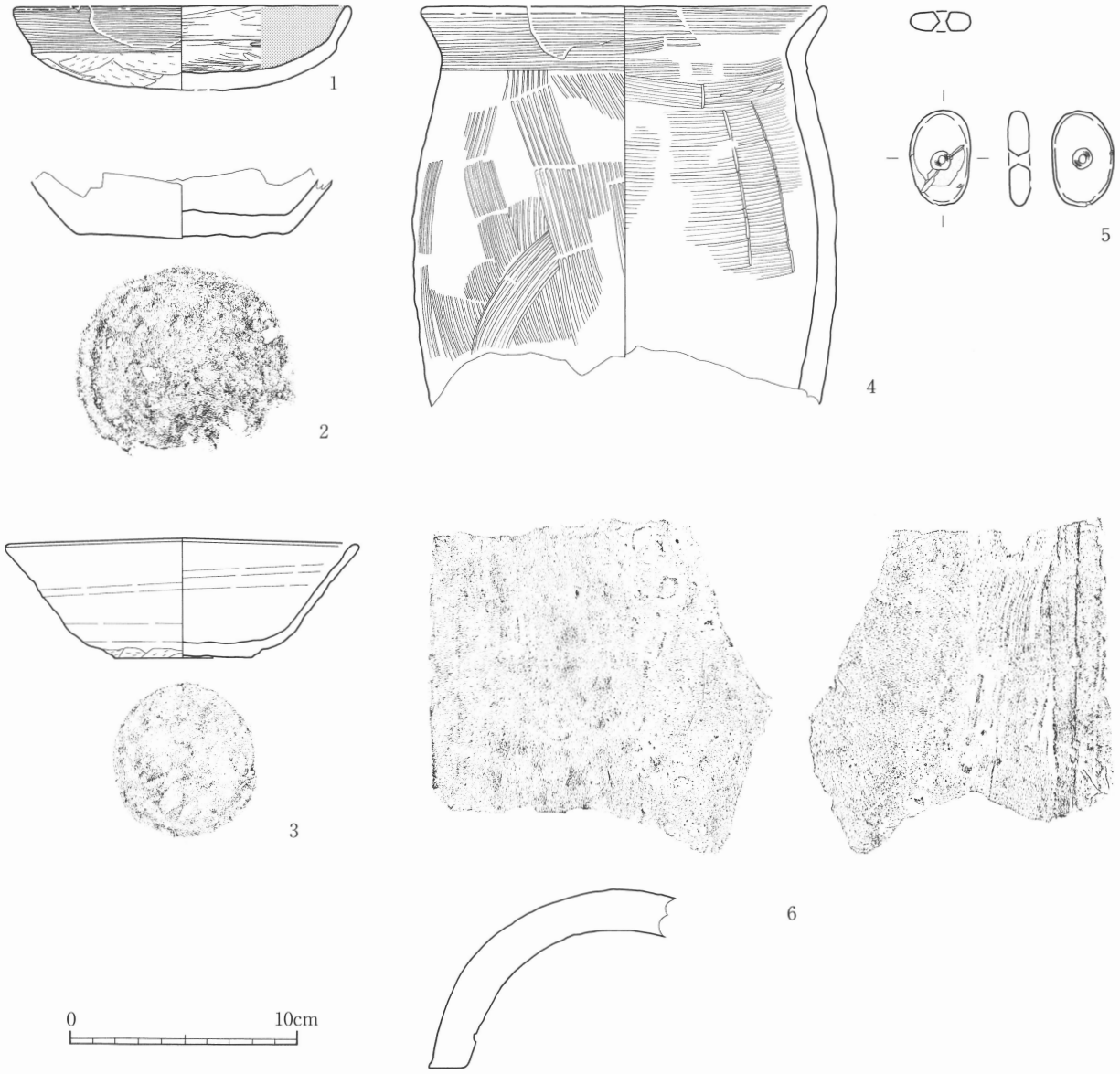
第136図　Ⅱ期官衙南方3



第137図　Ⅱ期官衙南方4

り凸面に擦り消しが施されたF-95丸瓦(第138図６)、焼け面のある礫石器、第４層上面よりは内面が黒色処理され体部中央に段のある土師器C-897坏(第138図１)、第４層中より外面がハケメ調整された長胴形の土師器C-900甕(第138図４)、底部に手持ちヘラケズリされた須恵器E-454坏(第138図３)、第６層中より底部のみの縄文土器A-４鉢(第138図２)、直径0.3cm程の孔のあるK-250有孔石製品(第138図５)、内面にカエリのある須恵器の蓋などが出土している。また第65次調査区内の堆積土中からは埦形滓や丸瓦片(註15)、第124次調査区内の堆積土中からは底部に回転ヘラケズリの施された須恵器坏やカエリのある蓋と対になる須恵器坏、縄叩きの後ナデ調整のされる桶巻き作りの平瓦片(註16)などが出土している。

第138次調査区ではSA1855・1910材木列、SD1952・1955溝跡を切っている。第65次調査区ではSI992竪穴住居跡を切り、SD345・1164溝跡に切られている。



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	写真図版
				出土遺構	層位					
1	C-897	土師器	坏	SD2000	4	器高3.6　口径14.9　底径13.4	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅡ2	773
2	A-4	縄文土器	鉢	SD2000　東端部	底面	残存高3.0　底径9.4	体部ミガキ、底部ヘラケズリ	体部・底部ナデ		773
3	E-454	須恵器	坏	SD2000	4	器高5.2　口径15.6　底径6.0	口縁部・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅱ1b	773
4	C-900	土師器	甕	SD2000	4	器高17.6　口径17.8	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	口縁部ハケメ、体部ヘラナデ	B1	773
5	K-250	石製品	有孔石製品	SD2000	6	長さ4.2　横幅2.8　厚さ0.9	穴に回転ケズリ痕有			773
6	F-95	瓦	軒丸瓦	SD2000	3	幅10.7　長さ14.4	凸面すり消し、凹面糸切りのち布目痕、ケズリ			773

第138図　SD2000　出土遺物

［南方官衙東地区］

SB1191建物跡（第65次・第140図）

東西５間かそれ以上、総長13ｍかそれ以上（柱間寸法250～270cm）、南北１間以上、総長2.7ｍ以上（柱間寸法270cm）の東西棟の建物跡で、東西柱列の方向はＥ―1°―Ｓである。柱穴は一辺74～190cmの隅丸方形か隅丸台形で、深さは99cm程のものがある。柱痕跡は直径22～35cmであるが、30cmのものが多い。周囲の掘立柱建物跡と比べて柱痕跡や掘り方の規模で傑出している。建物の北と東側をSD1190・1308溝跡が140～180cm程離れて巡っている。

SD345・921・1305溝跡に切られている。

SB1306建物跡（第65次・第140図）

桁行10間、総長23.7ｍ（柱間寸法220～250cm）、梁行２間、総長5.2ｍ（柱間寸法250～265cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はＥ―2°―Ｓである。柱穴は一辺70～155cmの隅丸方形か隅丸長方形で、深さは42～92cmである。柱痕跡は直径15～34cmで、20cm前後のものが多い。痕跡の中に焼土と炭化物を含んでいることから、火災に遭ったと考えられる。建物の東、西、南側をSD1319・1188・1180溝跡が、柱穴より100～120cm離れて巡っている。

遺物は柱穴掘り方より、底部より体部へ屈曲して立ち上がる土師器<中>Ｃ-123坏などが出土している。

SD345溝跡に切られている。

SB1320建物跡（第65次・第140図）

桁行10間、総長23.5ｍ（柱間寸法220～250cm）、梁行２間、総長5.2ｍ（柱間寸法230～280cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はＥ―1°―Ｓである。柱穴は一辺70～210cmの隅丸方形か隅丸長方形で、柱痕跡は直径13～33cmであるが、20～30cmのものが多い。抜き取りがあり、その深度が深いため柱痕跡が検出されない柱穴もある。

建物の東、南側をSD1333・1336溝跡が、柱穴より110～150cm離れて巡っている。これらの溝跡の堆積土中には焼土と炭化物が含まれ、柱の抜き取り穴にも炭化物が含まれるものがあることから、SB1320建物跡が火災に遭ったと考えられる。

遺物は柱穴抜き取り穴より、土師器<中>Ｃ-94・124甕などが出土している。

SB1321建物跡（第65次・第140図）

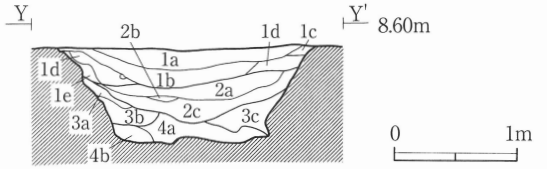
桁行10間、総長23.3ｍ（柱間寸法210～270cm）、梁行２間、総長５ｍ（柱間寸法250cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はＥ―3°―Ｓである。柱穴は一辺85～155cmの隅丸方形か隅丸長方形であるが、周囲の建物跡の柱穴掘り方に比べ平面形が丸みを帯びている。柱穴の深さは60～70cm程で、柱痕跡は直径11～25cmで、20cm前後のものが多い。抜き取りは認められない。

SD476溝跡（第41、94次・第141図）

上幅150～270cm、底面幅60～160cm、深さ70～100cm程、断面形は逆台形あるいは扁平なＵ字形の溝跡であり、おおむね平坦である。南の第41次調査区にも続く溝跡である。方向はＮ―2°―ＷからＮ―0°―Ｅで、第41次調査から第94次調査まで45ｍ程検出し、さらに南北に続いている。堆積土は４層である。第41次調査区内では、最上層に灰白色火山灰が多量に含まれていた。外溝の形状に類似している。

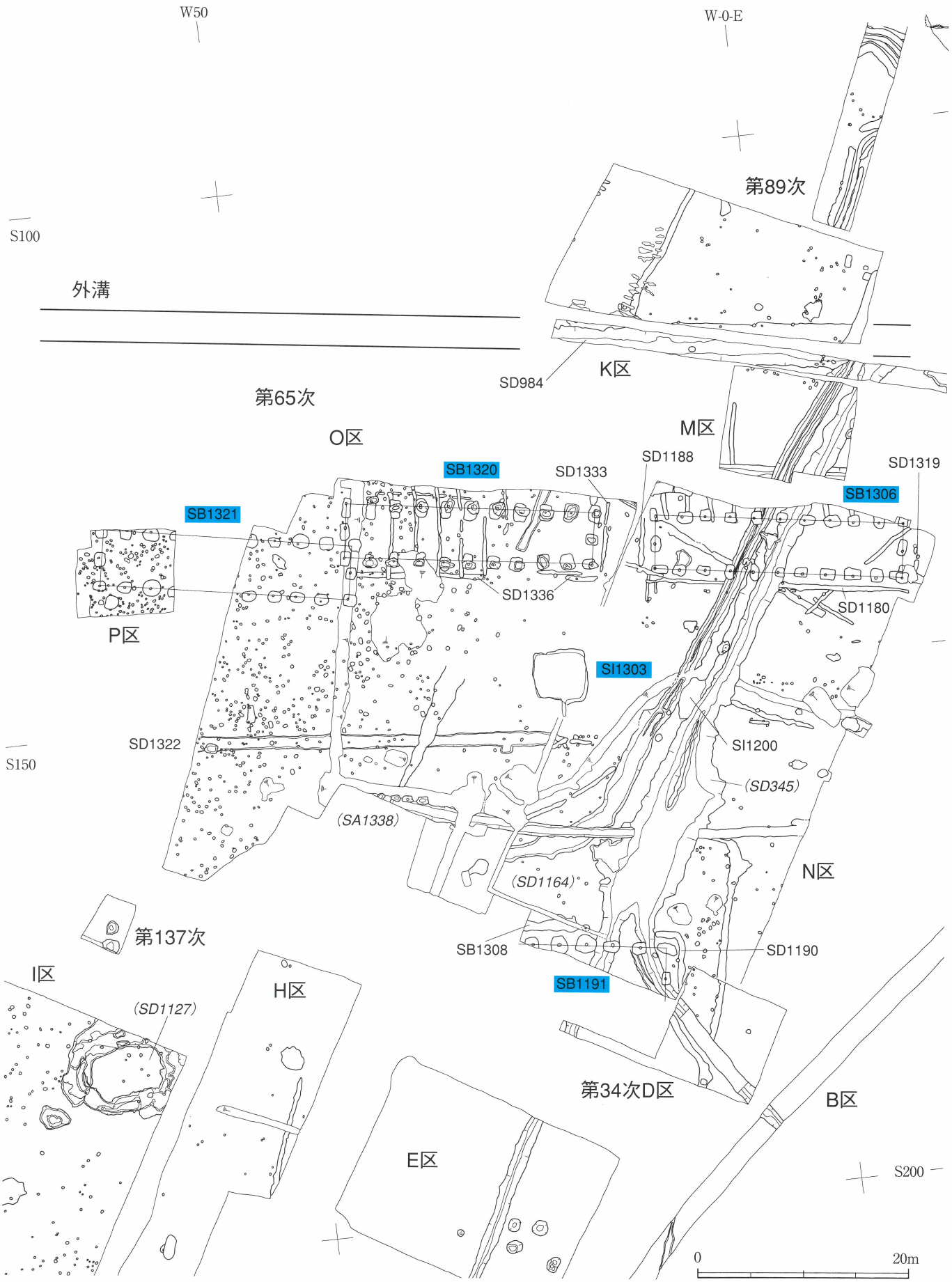
遺物は堆積土中から土師器、須恵器片が少量出土している。

SI1361竪穴住居跡を切り、SD1356溝跡に切られている。

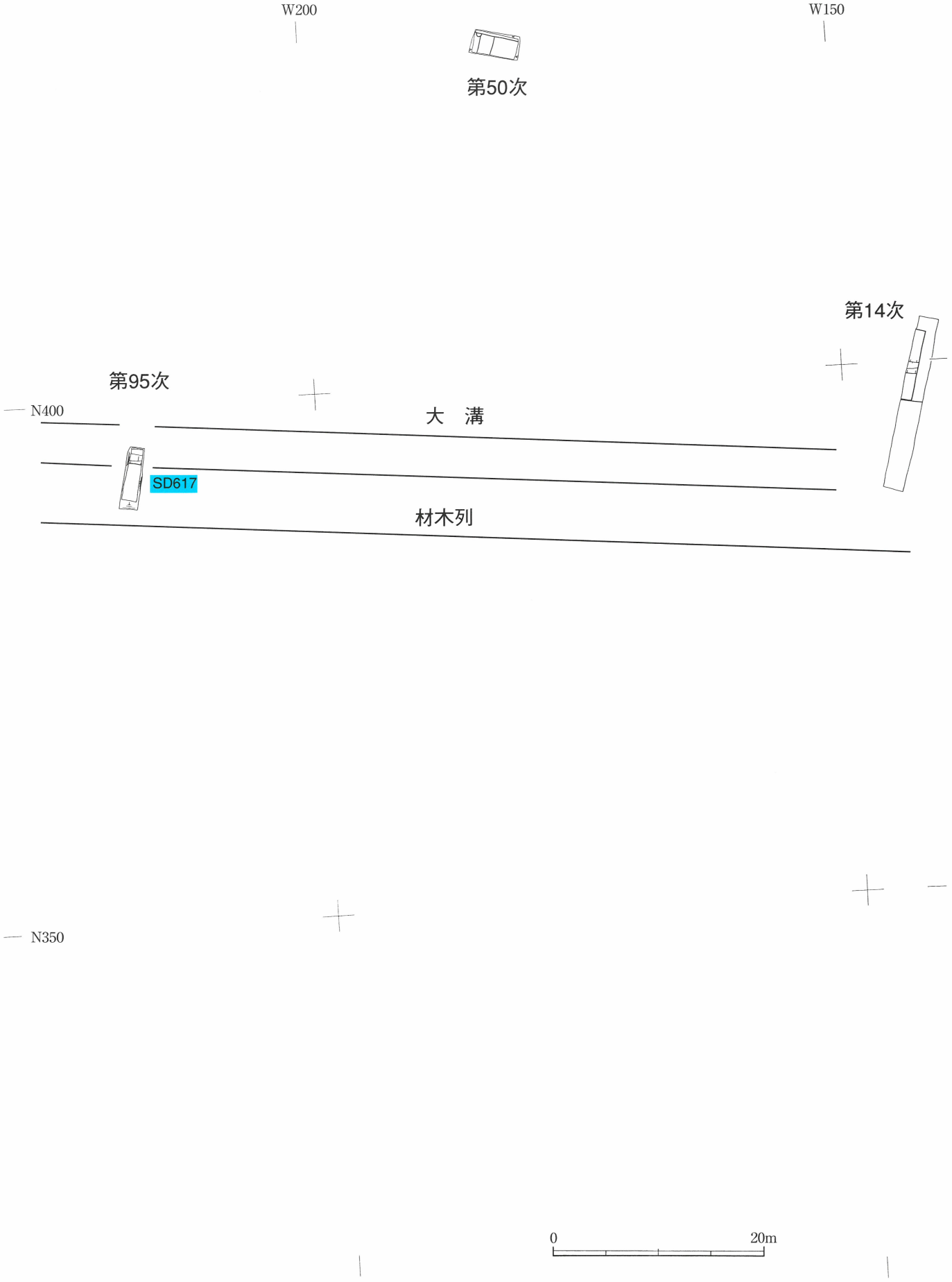


層位	土色	土性	備考
1a	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	灰白色火山灰を含む
1b	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	
1c	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	
1d	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	
1e	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
2a	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	
2b	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
2c	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
3a	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト	
3b	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	
3c	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
4a	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	
4b	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	

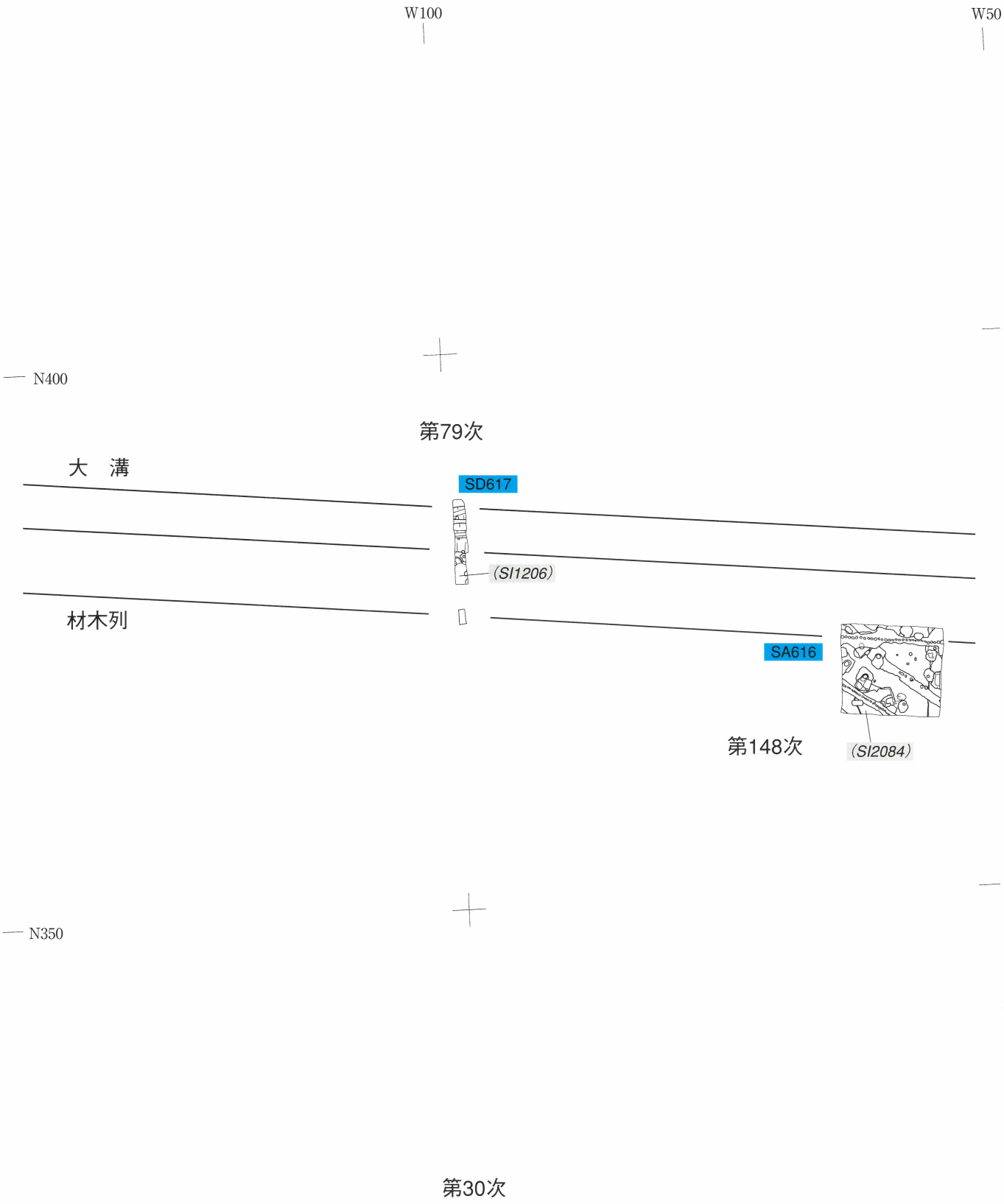
第139図　SD476　断面図



第140図　Ⅱ期官衙南方5



第131図　方四町Ⅱ期官衙北辺1



第132図　方四町Ⅱ期官衙北辺2

2．南方官衙

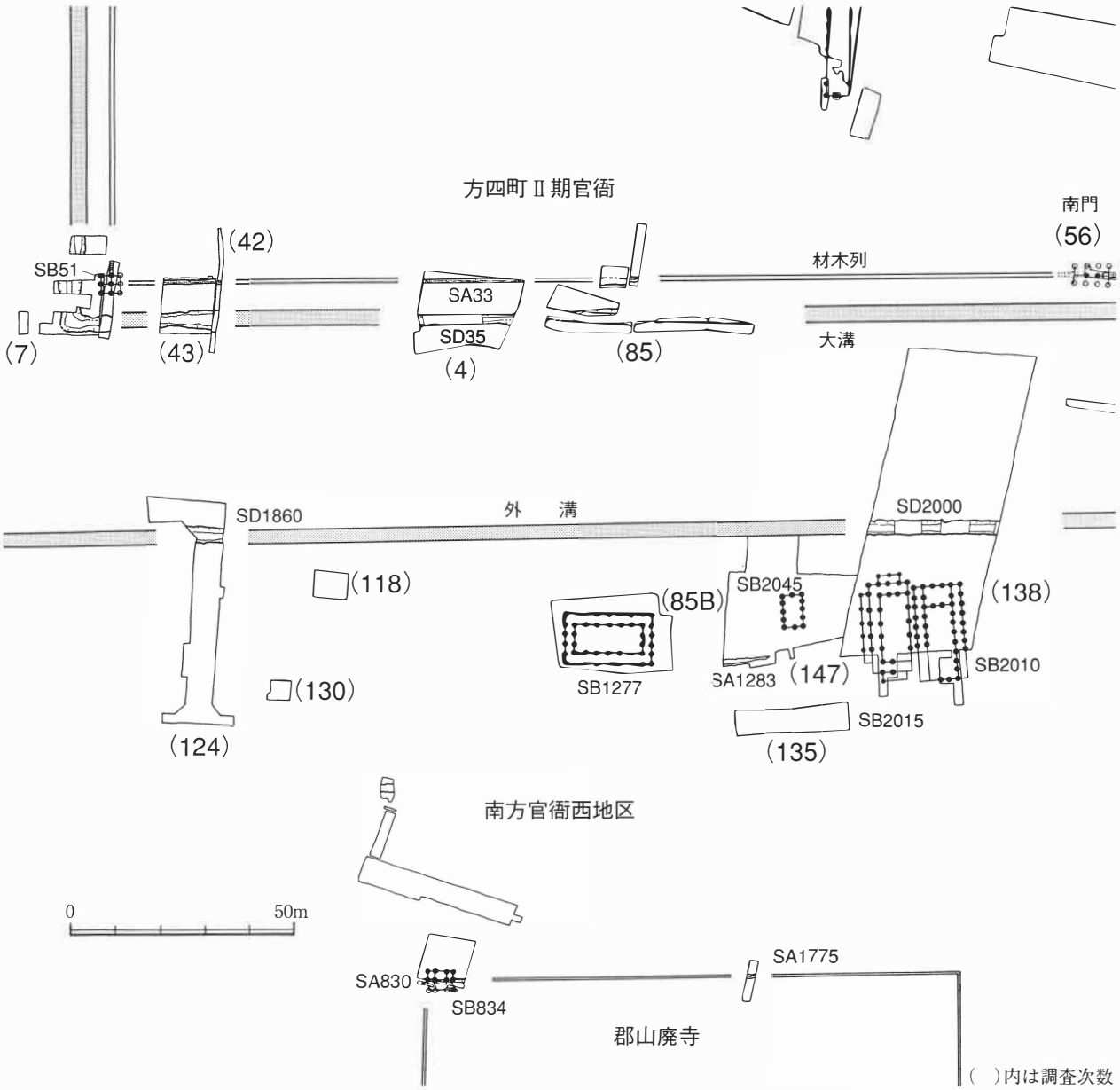
南方官衙は方四町Ⅱ期官衙の南に、正殿やその周辺の主要建物と同等か、より規模が大きい建物により構成されている。建物の北側は「外溝」としたSD2000溝跡（註14）により遮蔽されており、その南側に整然と並んでいる。便宜上、東地区と西地区に分けているが、どのようなまとまりになって機能していたかについては明らかではない。

［南方官衙西地区］

SB1277建物跡（第85次・第133、136図）

桁行８間、総長19.6m（身舎部分柱間寸法240～278cm、平均260cm、廂部分柱間寸法185～218cm、平均199cm）、梁行５間、総長11m（身舎部分柱間寸法190～225cm、平均207cm、廂部分柱間寸法227～257cm、平均240cm）の東西棟の四面廂付建物跡で、梁行の方向はN―2°―Eである。柱穴は一辺62～142cmの隅丸長方形、隅丸方形、あるいは不整方形を呈する。柱痕跡は身舎で直径23～31cm、廂で直径18～31cmである。柱穴の深さは廂で14～24cmである。柱穴掘り方の埋土や柱痕跡には炭化物や焼土は含まれていない。

SB1278・1280建物跡、SA1283材木列を切っている。

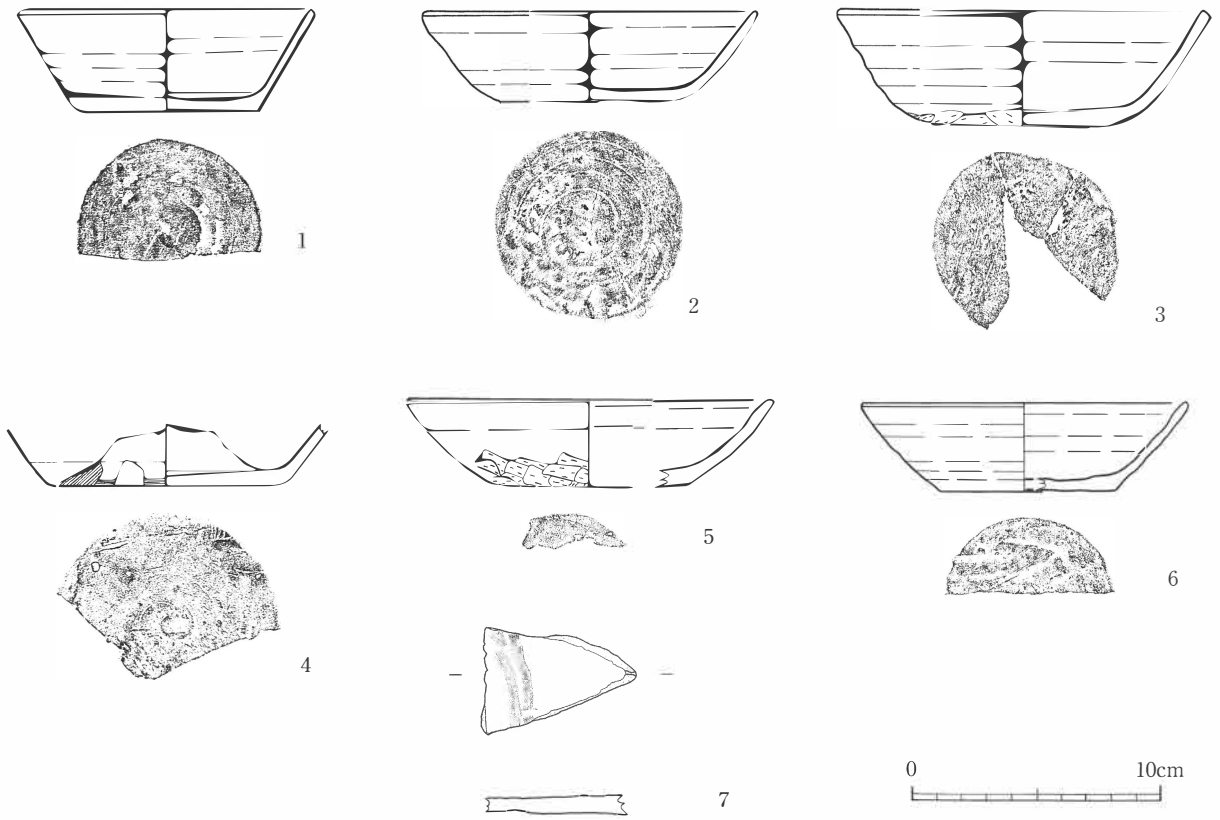


第133図　南方官衙西地区周辺遺構配置図

SB2010建物跡（第138次・第133、137図）

桁行10間、総長21m（身舎部分柱間寸法200～220cm、平均210cm）、梁行５間、総長10.8m（身舎部分柱間寸法210～220cm、平均220cm、廂部分柱間寸法200・220cm）の南北棟で、東西に廂を有する建物跡である。方向は身舎の東桁行でN―3°―Wである。身舎の柱穴は一辺85～120cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径25～38cmの円形または楕円形である。身舎は北から２間のところで仕切られている。柱穴掘り方や柱痕跡は、身舎が廂に比べてやや大きくなっている。柱痕跡は木質の材が残っているもの（N11E2柱穴）がある。また各柱穴の柱は抜き取り、あるいは切り取りを受けており、柱下部が地中に残ったもの（N10E2柱穴）もある。

遺物は掘り方中では、N7E1から器種は不明であるが外面に二条の墨痕のある土師器C-916底部片（第134図７、写真図版772）、N3E3からは長さ5.5cmの頂部が平坦なN-110釘（写真図版772）が、N4W2からも長さ9.5cmの釘状の鉄製品N-109（写真図版772）が出土している。抜き取り穴ではN5E2から高さ6.5cm以上の円面硯、N6E1からは底部回転ヘラ切り後に手持ちヘラケズリされた須恵器E-456坏（第134図１）、N6W2からは長さ4.5cmの釘状の鉄製品N-108（写真図版772）、N9E2からは回転ヘラ切り痕跡が観察される須恵器E-458坏（第134図４）、N11E2からは宝珠形のツマミを有する大形の須恵器E-466蓋の破片（写真図版772）、N11E3からは内部に緑色の鉱物を含むK-253鉱石（写真図版772）が出土している。このほかN11E2の抜き取り穴からは、底部に回転ヘラ切り後手持ちヘラ



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
1	E-456	須恵器	坏	SB2010N6E1	抜き取り穴	器高4.1　口径12.0　底径7.4	口縁部・体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ→手持ちヘラケズリ	口縁部・体部　ロクロナデ	Ⅱ1b	138	772
2	E-467	須恵器	坏	SB2010bN10E2	抜き取り穴	器高3.6　口径13.6　底径7.2	口縁部・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り→回転ヘラケズリ	口縁部・体部　ロクロナデ	Ⅱ1b	138	772
3	E-451	須恵器	坏	SB2010N11E3	抜き取り穴	器高4.4　口径15.0　底径7.0	口縁部・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	口縁部・体部　ロクロナデ	Ⅱ1b	138	772
4	E-458	須恵器	坏	SB2010bN9E2	抜き取り	残存高2.5　底径9.6	体部ロクロナデ→ナデ、底部回転ヘラ切り→ヘラナデ→ナデ	体部ロクロナデ	Ⅱ1	138	772
5	E-453	須恵器	坏	SB2010N10E2	抜き取り	器高3.6　口径14.7　底径7.8	口縁部・体部ロクロナデのちヘラケズリ、底部ケズリ	口縁部・体部　ロクロナデ	Ⅱ1b	138	772
6	E-452	須恵器	坏	SB2010bN10E2	抜き取り	器高3.6　口径13.1　底径7.0	口縁部・体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	口縁部・体部　ロクロナデ	Ⅱ1b	138	772
7	C-916	土師器	坏	SB2010N7E1	柱穴跡	長さ5.7	二条の墨痕あり	黒色処理	A	138	772

第134図　SB2010　出土遺物

ケズリがされた須恵器E−452・467坏（第134図６、２）、底部に手持ちヘラケズリのみが観察される須恵器E−453坏（第134図５）などの多くの遺物が出土している。

SD1951・1995溝跡を切り、SD2008・2018・2019溝跡に切られている。

SB2015建物跡（第138次・第133、137図）

桁行７間、総長19.6m（身舎部分柱間寸法280〜310cm、平均298cm、廂部分柱間寸法230cm）、梁行４間、総長8.8m（身舎部分柱間寸法200〜225cm、平均215cm、廂部分柱間寸法225cm）の南北棟で、南、北、西に廂を有する建物跡である。方向は身舎の西桁行でN—1°—Wである。身舎の柱穴は一辺83〜140cmの隅丸長方形で、柱痕跡は直径20〜40cmの円形または楕円形である。廂の柱穴は一辺60〜123cmの長方形で、柱痕跡は直径20〜36cmの円形または楕円形である。各柱穴の掘り方や柱間寸法にややばらつきがある。柱穴の掘り方や柱痕跡は身舎が廂に比べやや大きくなっている。ほとんどの柱穴に抜き取り穴が見られるが、西桁行の抜き取り穴は掘り方底面に及んでいる。柱痕跡の中には、木質部が残っているもの（N2E5、N3E5、N5E5柱穴）がある。さらに廂のある建物の南、北、西側には、掘り方が直径27〜40cm程の円形で、直径10〜14cmの柱痕跡が伴う柱穴が取り付いている。

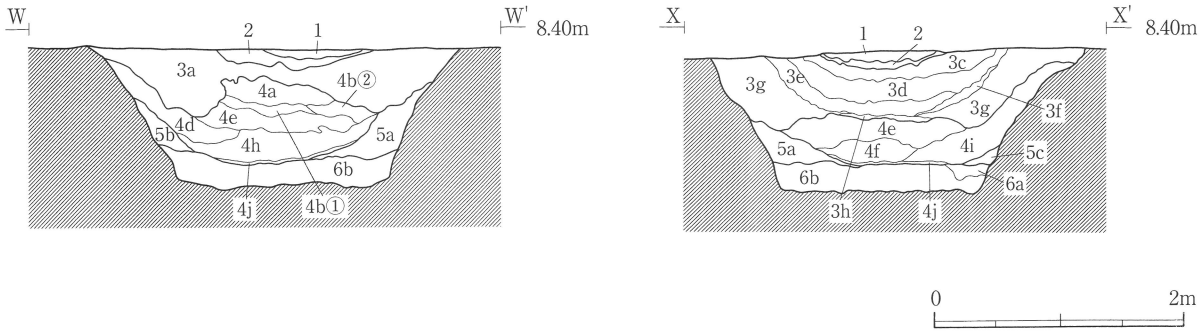
遺物は、柱穴の抜き取り穴N1E4から鉄滓、N4W2、N7E3から瓦片、各柱穴より土師器、須恵器の小片が多量に出土している。

SA1910材木列、SD1995・1951・1952溝跡を切り、SD2002・2003・2009・2013・2031・2041溝跡に切られている。

SD2000溝跡（第138次・第133、137図）

上幅300〜340cm、底面幅160〜170cm、深さ120cm程、断面形は逆台形の溝跡であり、おおむね平坦である。第65次調査のSD984溝跡や第124次調査のSD1860溝跡と連続する遺構である。方向はE—0°—S（真東西）で、第65次調査から第124次調査で検出した箇所まで360m程である。方四町Ⅱ期官衙の外郭大溝と心々で48〜50m離れて平行している。堆積土中の第２層は灰白色火山灰である。

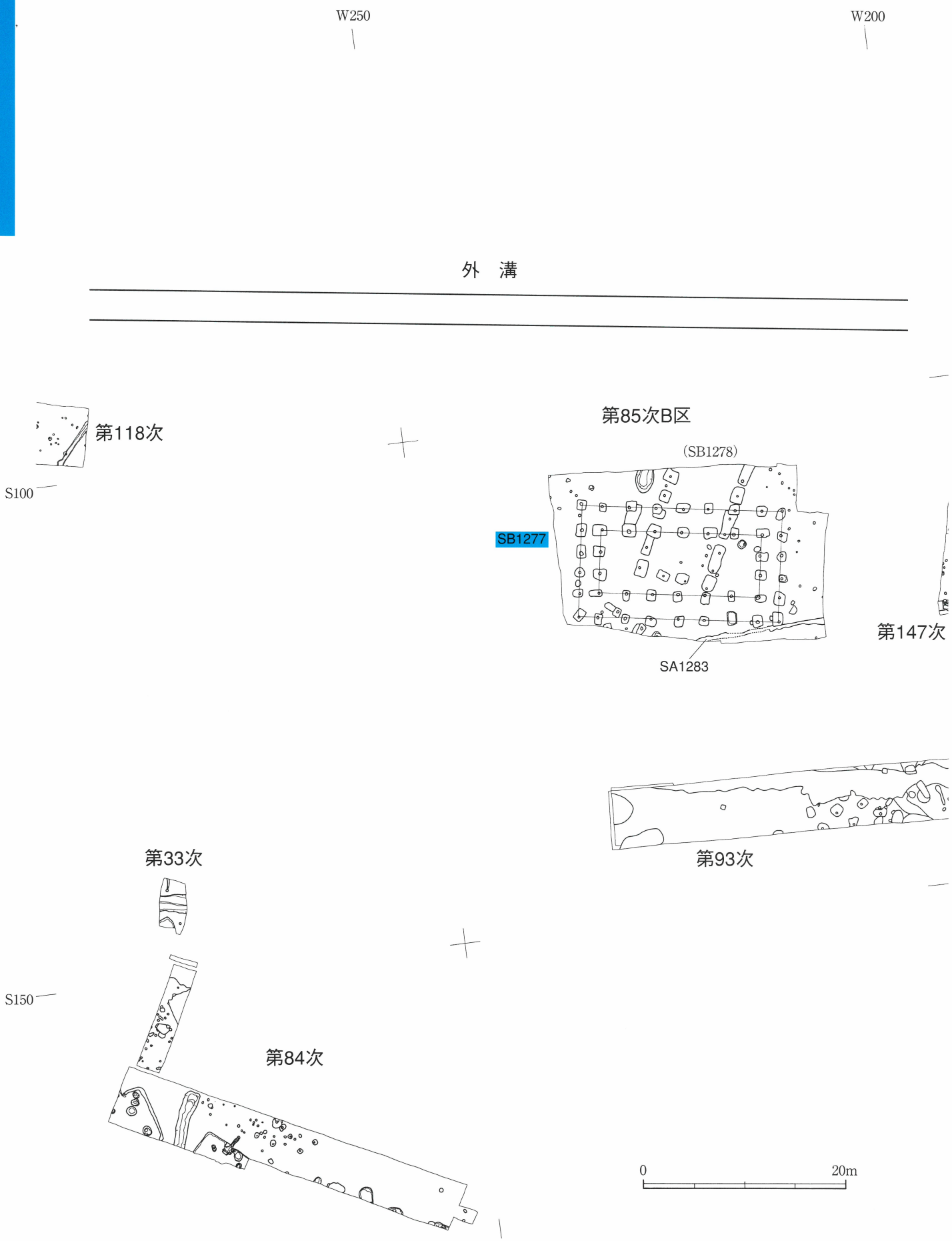
遺物は第138次調査区内の第１層中より底部に回転糸切り痕跡が観察される土師器坏、鉄滓、鉄片、第３層中よ



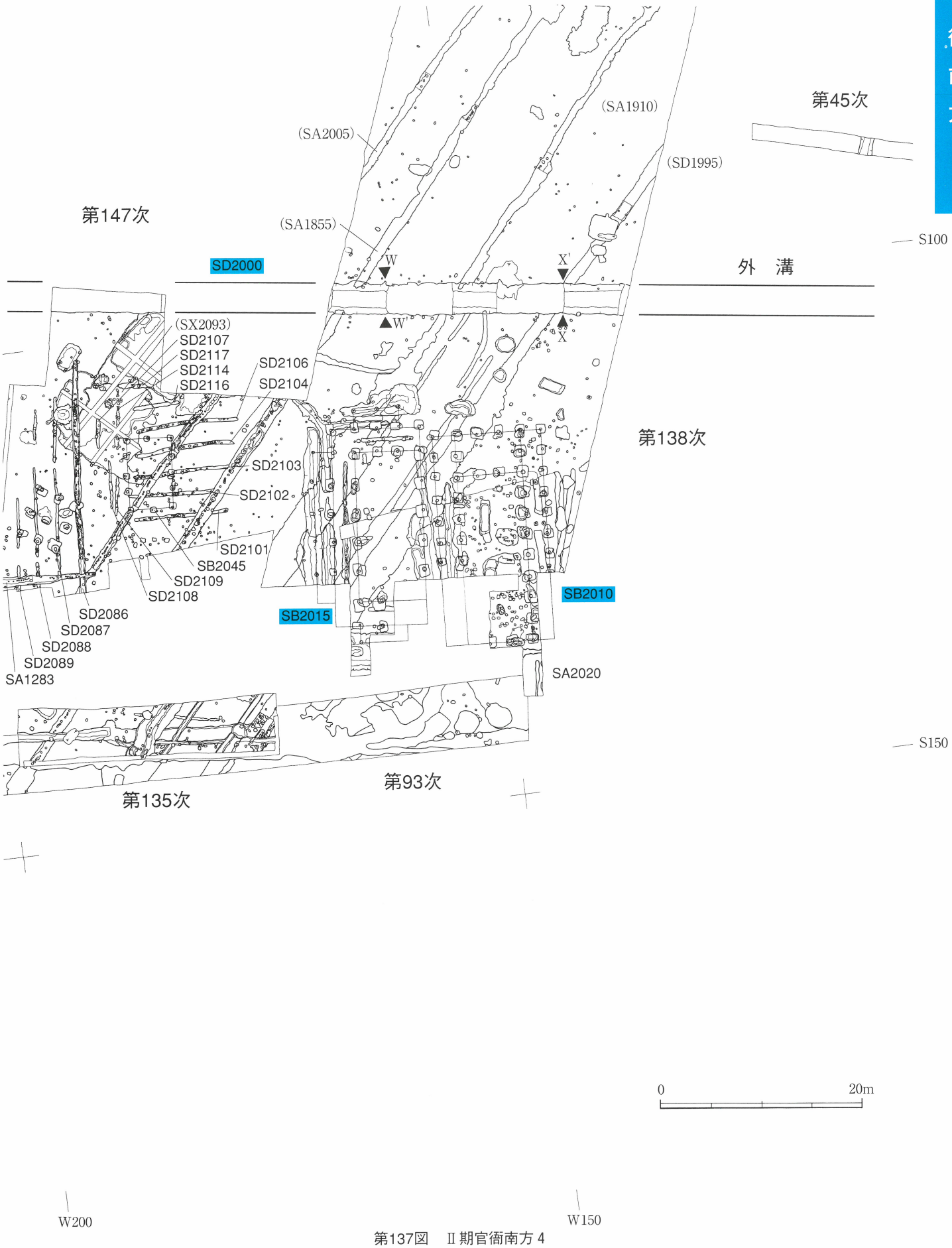
遺構名	層位	土色	土性	備考
SD2000	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	
	2	10YR6/2 灰黄褐色	火山灰	「灰色火山灰」
	3a	10YR5/1 褐灰色	粘土	細かくマンガン粒を含む
	3b	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	（調査区西壁）
	3c	10YR3/2 黒褐色	粘土	褐色粘土を小ブロックで含む
	3d	10YR4/1 褐灰色	粘土	
	3e	10YR3/1 黒褐色	粘土	
	3f	10YR4/2 灰黄褐色	砂質粘土	褐色土を全体に細かく含む
	3g	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色粘土（Ⅳ層）を小ブロックで含む
	3h	5Y4/1 灰色	粘土	明黄褐色粘土を小ブロックで含む。酸化鉄が顕著である。
	4a	10YR4/1 褐灰色	粘土	
	4b①	10YR3/1 粘土	粘土	
	4b②	10YR5/1 褐灰色	粘土	3a層に炭粒、焼土を微量に含む
	4c	10YR7/6 明黄褐色	粘土	Ⅳ層と黒褐色粘土（調査区西壁）
	4d	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	
	4e	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	
	4f	5Y5/1 灰色	粘土	
	4g	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	明黄褐色粘土（Ⅳ層）を含む（調査区西壁）

遺構名	層位	土色	土性	備考
SD2000	4h	2.5Y7/2 灰黄褐色	粘土	灰黄褐色、黒褐色粘土が細かく混合している
		10YR3/1 黒褐色	粘土	
	4i	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	灰黄褐色、黒褐色粘土とにぶい黄橙色シルトの混合層
		10YR3/1 黒褐色	粘土	
		10YR7/4 にぶい黄橙色	シルト	
	4j	5Y3/1 オリーブ黒	粘土	
	5a	10YR3/1 黒褐色	粘土	黒褐色粘土とにぶい黄橙色シルトの混合層
		10YR6/4 にぶい黄橙色	シルト	
	5b	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	
	6a	10YR4/1 褐灰色	粘土	灰黄褐色粘土がまじる
	6b	2.5Y5/1 黄灰色	粘土	黒褐色粘土、灰色粘土を含む（グライ化）

第135図　SD2000　断面図



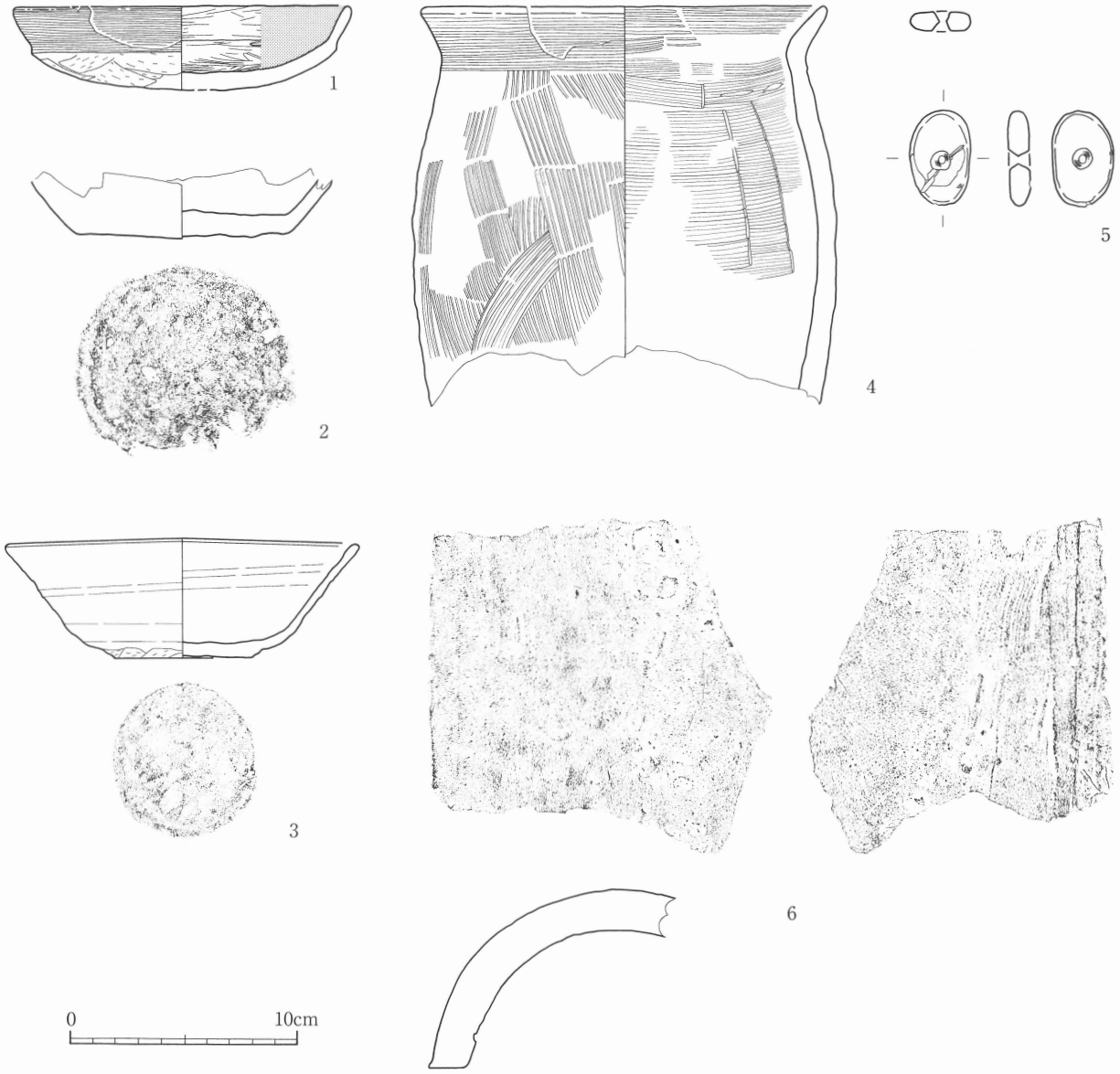
第136図　Ⅱ期官衙南方3



第137図　Ⅱ期官衙南方4

り凸面に擦り消しが施されたF-95丸瓦(第138図６)、焼け面のある礫石器、第４層上面よりは内面が黒色処理され体部中央に段のある土師器C-897坏(第138図１)、第４層中より外面がハケメ調整された長胴形の土師器C-900甕(第138図４)、底部に手持ちヘラケズリされた須恵器E-454坏(第138図３)、第６層中より底部のみの縄文土器A-４鉢(第138図２)、直径0.3cm程の孔のあるK-250有孔石製品(第138図５)、内面にカエリのある須恵器の蓋などが出土している。また第65次調査区内の堆積土中からは埦形滓や丸瓦片(註15)、第124次調査区内の堆積土中からは底部に回転ヘラケズリの施された須恵器坏やカエリのある蓋と対になる須恵器坏、縄叩きの後ナデ調整のされる桶巻き作りの平瓦片(註16)などが出土している。

第138次調査区ではSA1855・1910材木列、SD1952・1955溝跡を切っている。第65次調査区ではSI992竪穴住居跡を切り、SD345・1164溝跡に切られている。



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	写真図版
				出土遺構	層位					
1	C-897	土師器	坏	SD2000	4	器高3.6　口径14.9　底径13.4	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅡ2	773
2	A-4	縄文土器	鉢	SD2000　東端部	底面	残存高3.0　底径9.4	体部ミガキ、底部ヘラケズリ	体部・底部ナデ		773
3	E-454	須恵器	坏	SD2000	4	器高5.2　口径15.6　底径6.0	口縁部・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅱ1b	773
4	C-900	土師器	甕	SD2000	4	器高17.6　口径17.8	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	口縁部ハケメ、体部ヘラナデ	B1	773
5	K-250	石製品	有孔石製品	SD2000	6	長さ4.2　横幅2.8　厚さ0.9	穴に回転ケズリ痕有			773
6	F-95	瓦	軒丸瓦	SD2000	3	幅10.7　長さ14.4	凸面すり消し、凹面糸切りのち布目痕、ケズリ			773

第138図　SD2000　出土遺物

［南方官衙東地区］

SB1191建物跡（第65次・第140図）

東西５間かそれ以上、総長13ｍかそれ以上（柱間寸法250～270cm）、南北１間以上、総長2.7ｍ以上（柱間寸法270cm）の東西棟の建物跡で、東西柱列の方向はＥ―1°―Ｓである。柱穴は一辺74～190cmの隅丸方形か隅丸台形で、深さは99cm程のものがある。柱痕跡は直径22～35cmであるが、30cmのものが多い。周囲の掘立柱建物跡と比べて柱痕跡や掘り方の規模で傑出している。建物の北と東側をSD1190・1308溝跡が140～180cm程離れて巡っている。

SD345・921・1305溝跡に切られている。

SB1306建物跡（第65次・第140図）

桁行10間、総長23.7ｍ（柱間寸法220～250cm）、梁行２間、総長5.2ｍ（柱間寸法250～265cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はＥ―2°―Ｓである。柱穴は一辺70～155cmの隅丸方形か隅丸長方形で、深さは42～92cmである。柱痕跡は直径15～34cmで、20cm前後のものが多い。痕跡の中に焼土と炭化物を含んでいることから、火災に遭ったと考えられる。建物の東、西、南側をSD1319・1188・1180溝跡が、柱穴より100～120cm離れて巡っている。

遺物は柱穴掘り方より、底部より体部へ屈曲して立ち上がる土師器<中>Ｃ-123坏などが出土している。

SD345溝跡に切られている。

SB1320建物跡（第65次・第140図）

桁行10間、総長23.5ｍ（柱間寸法220～250cm）、梁行２間、総長5.2ｍ（柱間寸法230～280cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はＥ―1°―Ｓである。柱穴は一辺70～210cmの隅丸方形か隅丸長方形で、柱痕跡は直径13～33cmであるが、20～30cmのものが多い。抜き取りがあり、その深度が深いため柱痕跡が検出されない柱穴もある。

建物の東、南側をSD1333・1336溝跡が、柱穴より110～150cm離れて巡っている。これらの溝跡の堆積土中には焼土と炭化物が含まれ、柱の抜き取り穴にも炭化物が含まれるものがあることから、SB1320建物跡が火災に遭ったと考えられる。

遺物は柱穴抜き取り穴より、土師器<中>Ｃ-94・124甕などが出土している。

SB1321建物跡（第65次・第140図）

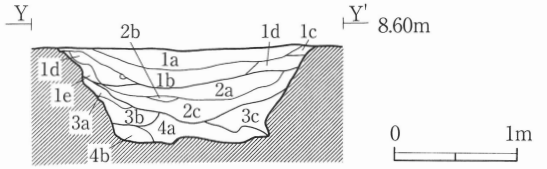
桁行10間、総長23.3ｍ（柱間寸法210～270cm）、梁行２間、総長５ｍ（柱間寸法250cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はＥ―3°―Ｓである。柱穴は一辺85～155cmの隅丸方形か隅丸長方形であるが、周囲の建物跡の柱穴掘り方に比べ平面形が丸みを帯びている。柱穴の深さは60～70cm程で、柱痕跡は直径11～25cmで、20cm前後のものが多い。抜き取りは認められない。

SD476溝跡（第41、94次・第141図）

上幅150～270cm、底面幅60～160cm、深さ70～100cm程、断面形は逆台形あるいは扁平なＵ字形の溝跡であり、おおむね平坦である。南の第41次調査区にも続く溝跡である。方向はＮ―2°―ＷからＮ―0°―Ｅで、第41次調査から第94次調査まで45ｍ程検出し、さらに南北に続いている。堆積土は４層である。第41次調査区内では、最上層に灰白色火山灰が多量に含まれていた。外溝の形状に類似している。

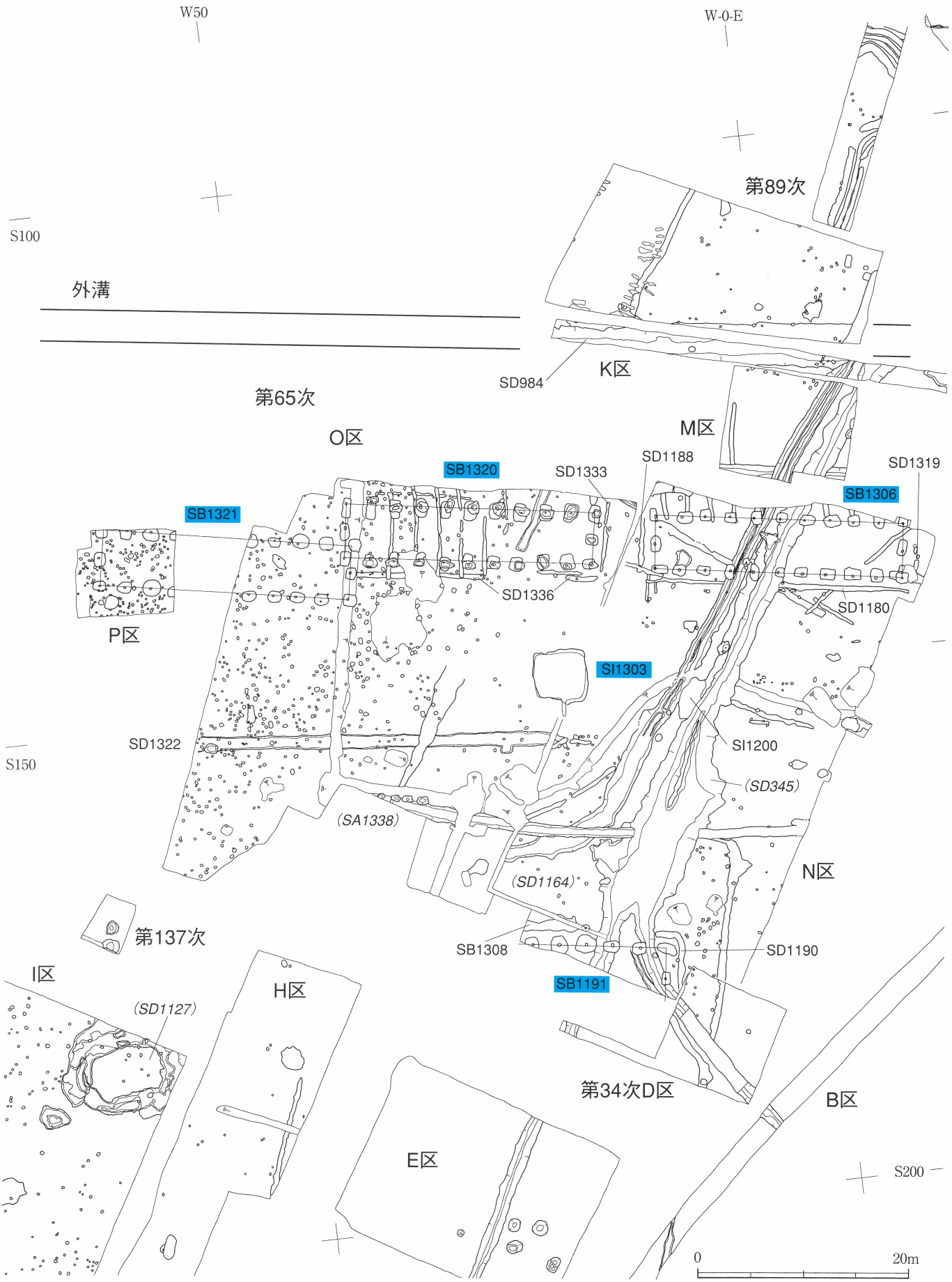
遺物は堆積土中から土師器、須恵器片が少量出土している。

SI1361竪穴住居跡を切り、SD1356溝跡に切られている。

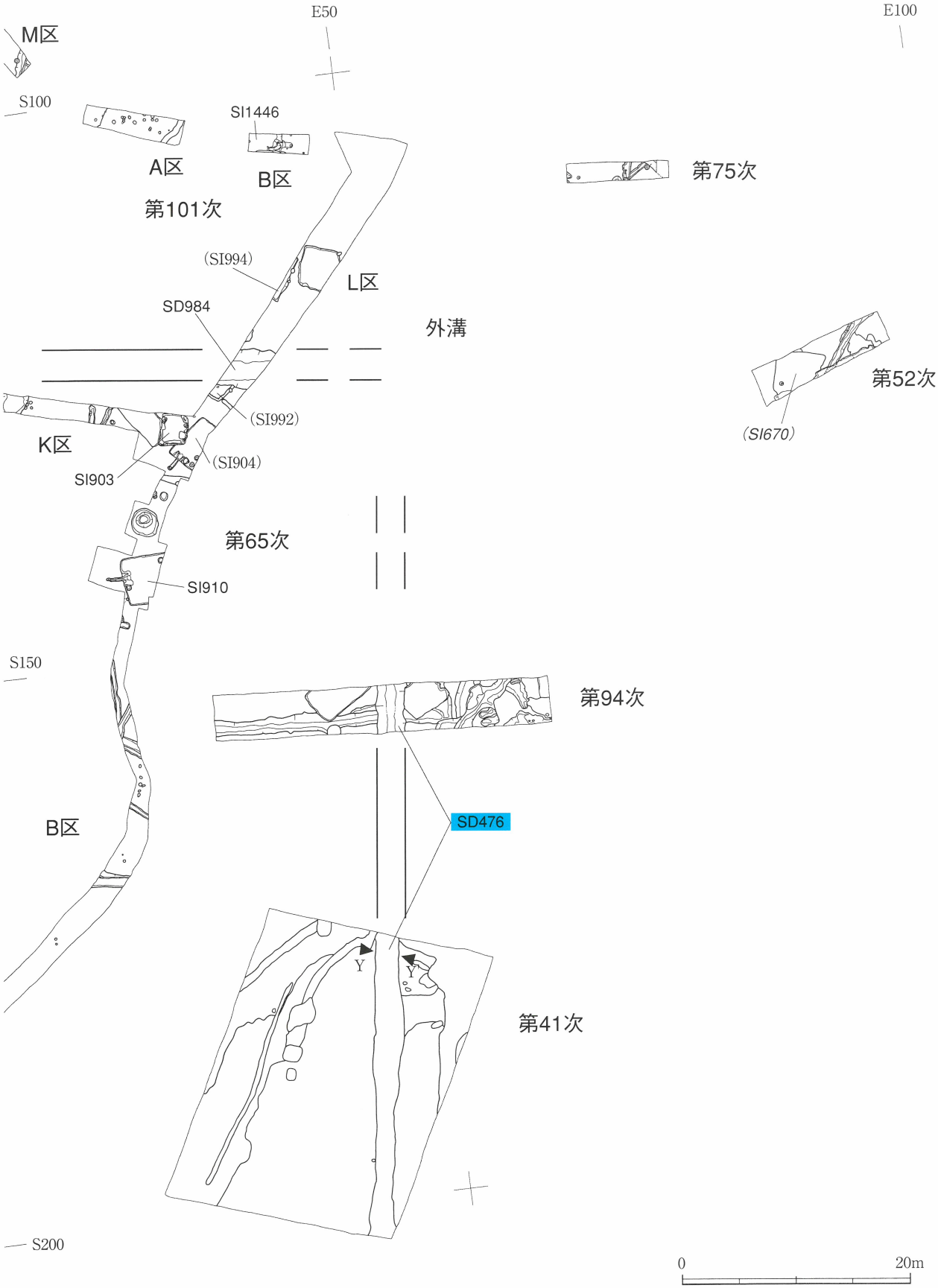


層位	土色	土性	備考
1a	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	灰白色火山灰を含む
1b	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	
1c	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	
1d	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	
1e	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
2a	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	
2b	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
2c	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
3a	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト	
3b	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	
3c	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
4a	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	
4b	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	

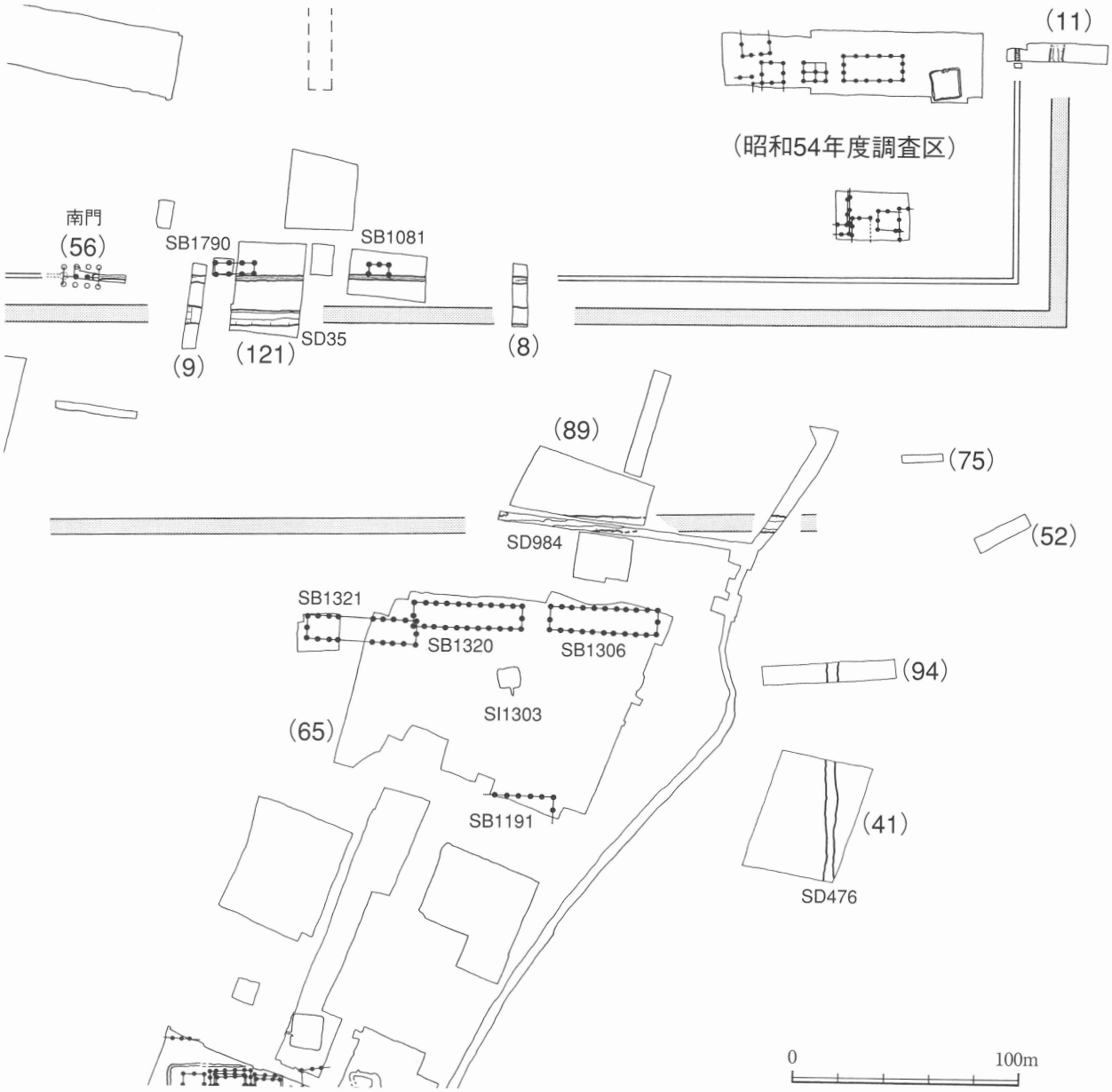
第139図　SD476　断面図



第140図　Ⅱ期官衙南方5



第141図　Ⅱ期官衙南方6



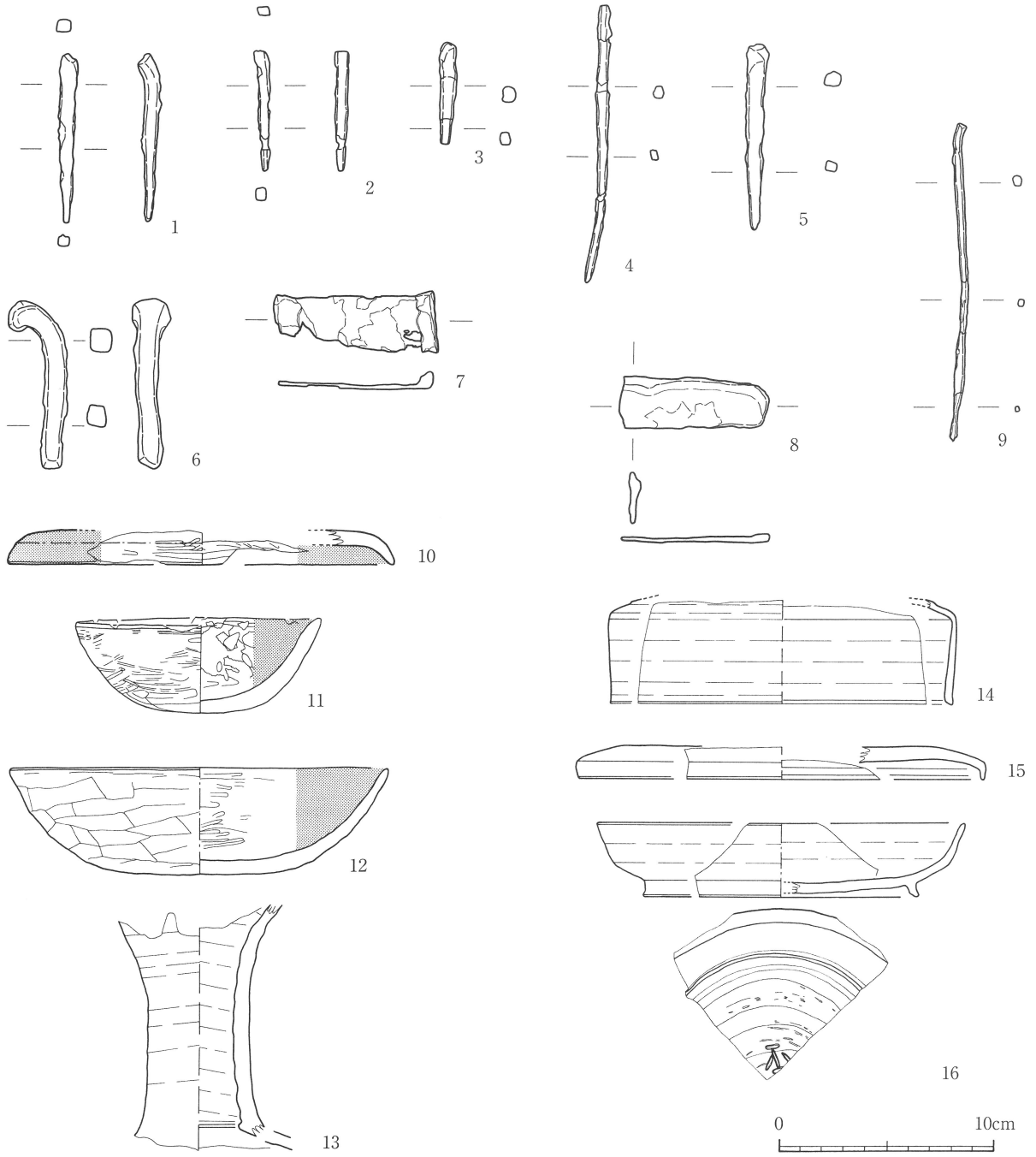
第142図　南方官衙東地区周辺遺構配置図　（　）内は調査次数

SI1303竪穴住居跡（第65次・第140、142、144図）

東西5.2m、南北5.1mの隅丸方形で、東壁の方向はN—5°—Eである。壁は直立気味に立ち上がり、高さは40cm残存している。床面はにぶい黄褐色シルト質粘土による貼床で、南側の床面上に焼土ならびに炭化物が広がっている。床面上で直径30～50cm、深さ50～60cmの円形のピットを2個検出した。配置から主柱穴と考えられるが、柱痕跡は検出できなかった。

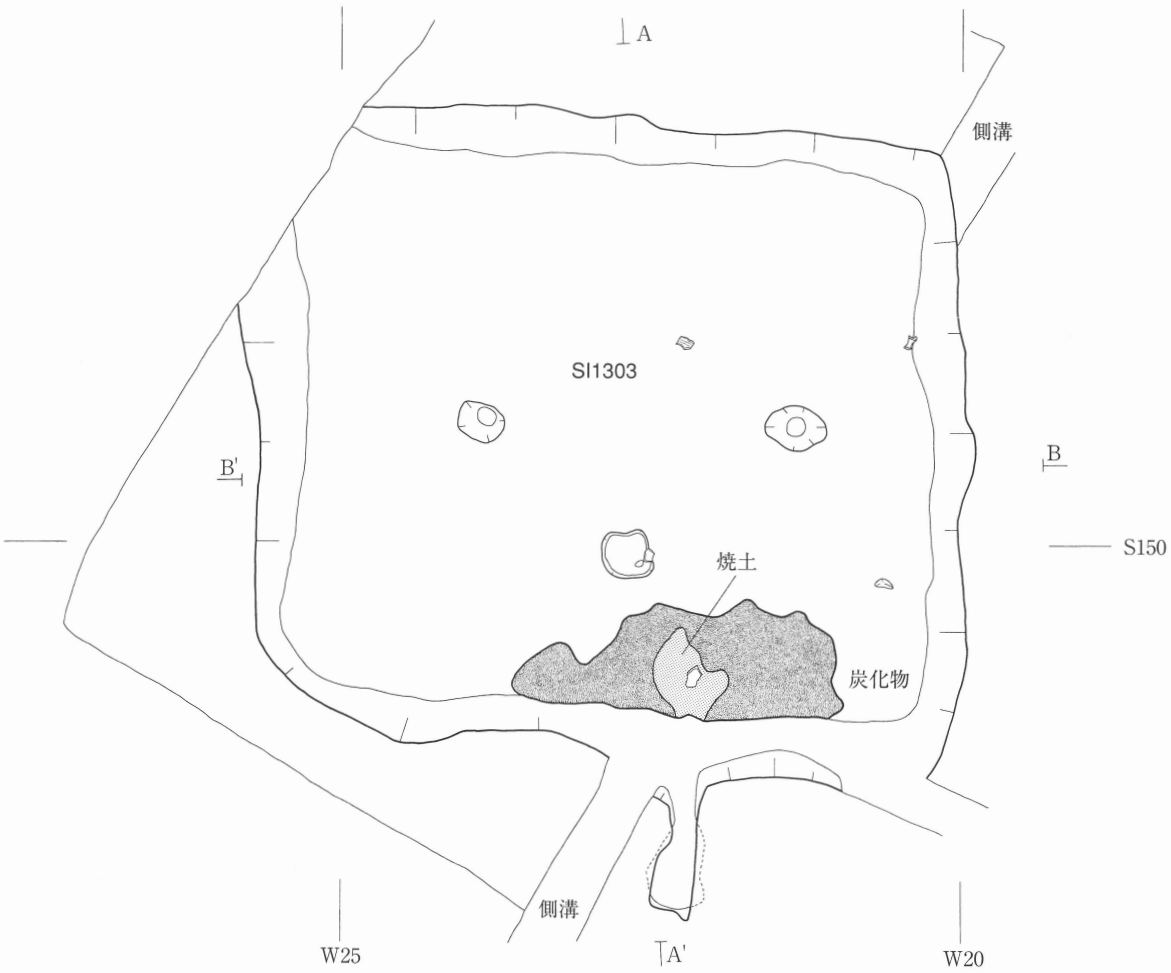
カマドは南壁東寄りにあり、天井部やソデの部分が撹乱を受け煙道のみ検出された。煙道は長さ160cm、上幅25～35cmである。カマド前面の箇所に焼土ならびに炭化物が堆積している

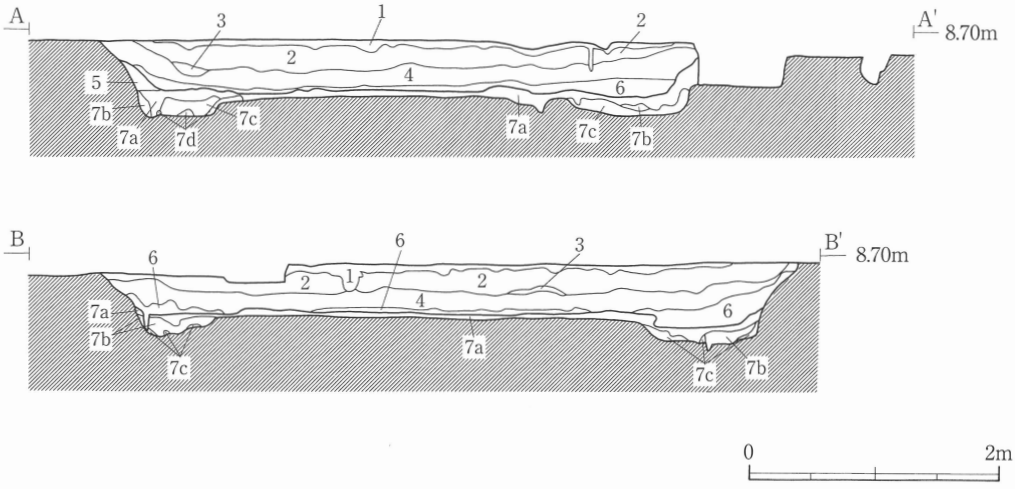
遺物は住居跡床面近くの堆積土中から体部に段や稜を持たない土師器<中>C-114・115坏（第143図11、12）、両面黒色処理されたC-118蓋（第143図10）、内面にカエリのない須恵器<中>E-83・87蓋（第143図14、15）などが出土している。また堆積土の上層からは底部に「金」もしくは「平」とヘラ書きされた須恵器<中>E-84高台付坏（第143図16）や、釘などの鉄製品が出土している。またこの他に掘り方埋土中から頸部のみの須恵器<中>E-86長頸壺（第143図13）も出土している。



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
1	N-66-①	鉄製品	釘	SI1303	2	長さ8.0以上　幅～0.9　厚さ～0.9				65	
2	N-66-②	鉄製品	釘	SI1303	2	長さ5.6以上　幅～0.7　厚さ～0.7				65	
3	N-66-③	鉄製品	釘	SI1303	2	長さ4.8以上　幅～0.7　厚さ0.4～0.7				65	
4	N-64	鉄製品	鉄鏃	SI1303	2	長さ13.0　幅0.3～0.6　厚さ0.3～0.5				65	
5	N-62	鉄製品	釘	SI1303	2	長さ8.8　幅0.5～1.1　厚さ0.5～0.8				65	
6	N-58	鉄製品	釘	SI1303	2	長さ8.0　幅0.8～1.8　厚さ0.8～0.9				65	
7	N-59	鉄製品	不明	SI1303	2	縦1.8～2.8　横7.4				65	
8	N-61	鉄製品	不明	SI1303	2	縦2.0～2.4　横6.8				65	
9	N-63	鉄製品	鉄鏃	SI1303	2	長さ14.8　幅0.2～0.5　厚さ0.2～0.4				65	
10	C-118	土師器	蓋	SI1303	4	残存高1.6　口径18.0	体部ヘラミガキ、端部黒色処理	体部ヘラミガキ、端部黒色処理		65	
11	C-114	土師器	坏	SI1303	4	器高4.5　口径11.5　底径5.5	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅣ2a	65	
12	C-115	土師器	坏	SI1303	4	器高5.0　口径17.7　底径8.9	口縁部ヘラミガキ、体部・底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅣ1a	65	
13	E-86	須恵器	長頸壺	SI1303	9	残存高11.5	口頸部ロクロナデ	口頸部ロクロナデ		65	
14	E-83	須恵器	蓋	SI1303	4	残存高4.8　口径16.0	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅱ3	65	
15	E-87	須恵器	蓋	SI1303	2、4	残存高1.5　口径19.0	端部ロクロナデ、体部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅱ	65	
16	E-84	須恵器	高台付坏	SI1303	2	器高3.5　口径17.2　底径12.8	口縁部・体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅰ1	65	

第143図　SI1303　出土遺物





層位	土　色	土 性	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト	火山灰を含む
2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物・火山灰を多量に含む
3	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	炭化物と焼土を多量に含む
4	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	炭化物と焼土を微量に含む
5	10YR4/4　褐色	シルト	
6	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む
7a	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む
7b	10YR5/2　灰黄褐色	シルト質粘土	炭化物を微量に含む
7c	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物を微量に含む
7d	10YR6/2　灰黄褐色	シルト質粘土	

第144図　SI1303　平・断面図

3．寺院西方建物群

方四町Ⅱ期官衙の南西で、郡山廃寺の北西に位置している。南を材木列(塀)で区画され、その北に掘立柱建物跡が配置されている。建物跡の全容が明らかな遺構には、総柱建物跡が多い。方四町Ⅱ期官衙の内部でも総柱の建物跡はきわめて稀で、しかも一箇所に集中するような地点は今のところ発見されていない。Ⅱ期官衙全域でも、この地区のみ複数棟の総柱あるいは束柱のある建物が検出されている。

SB1370建物跡（第96次・第146図）

桁行７間、総長15m(柱間寸法220cm)、梁行２間、総長5.2m(柱間寸法260cm)の東西棟の建物跡で、方向は梁行(西柱列)でN―2°―W、桁行(南柱列)でE―3°―Nである。柱穴は一辺50～110cmの隅丸方形で、深さは30～50cmである。柱痕跡は直径15～30cmである。内部の柱は、柱穴や柱痕跡とも小規模なものが多く、柱筋も梁列ではほぼ揃っているものの、桁列では不揃いとなっている。よって内部の柱は、束柱であると考えられる。S1E5のみ抜き取り穴が検出されている。

遺物は柱穴掘り方より、土師器坏、甕片、須恵器甕片が出土している。

SD1367・1372溝跡、SA272・1380材木列、SB1390・1395建物跡を切り、SD1381溝跡に切られている。

SB1375建物跡（第96次・第146図）

南北１間以上、総長2.8m以上(柱間寸法280cm)で、建物跡の南西隅と考えられ、柱列の方向はN―0°―E(真北方向)である。柱穴は一辺50～110cmの隅丸長方形で、深さは40～50cmである。柱痕跡は直径28～40cmである。調査区北壁際で落込みを検出しているが、柱間寸法から別遺構の一部と考えられる。

遺物はS2柱穴掘り方より、土師器甕片が１点出土している。

SD1367溝跡に切られている。

SB1390建物跡（第96次・第146図）

東西２間、総長3.8m(柱間寸法185～190cm)、南北２間、総長3.8m(柱間寸法180～195cm)の総柱建物跡で、方向は西柱列でN―3°―E、南柱列でE―2°―Sである。柱穴は一辺50～75cmの隅丸方形で、深さは30～40cmである。柱痕跡は直径20～30cmである。一部の柱に抜き取り穴が見られる。

SD1372溝跡を切り、SB1370建物跡に切られている。

SB1395建物跡（第96次・第146図）

東西２間、総長４m(柱間寸法200cm)、南北２間、総長4.4m(柱間寸法210～220cm)の総柱建物跡で、方向は西柱列でN―3°―W、南柱列でE―2°―Nである。柱穴は一辺50～90cmの隅丸方形で、深さは50cm程である。柱痕跡は直径20～25cmである。一部の柱に抜き取り穴が見られる。調査区の制約から確認できなかったが、南北の規模が２間以上になる可能性が残されている。

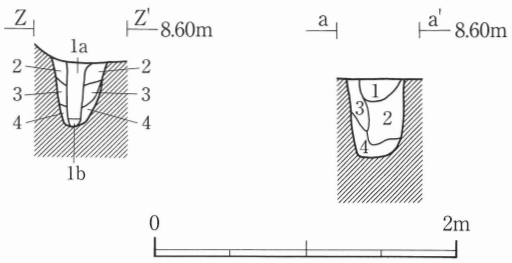
SD1367・1369溝跡、SA1380材木列を切り、SB1370建物跡に切られている。

SA1365材木列（第96次・第146図）

直径５～25cm程の丸材をE―2°―N方向に立て並べている。掘り方は上幅15～35cmで、深さは残存状況の良好な箇所で45～50cm、調査区西半では削平され途切れている。

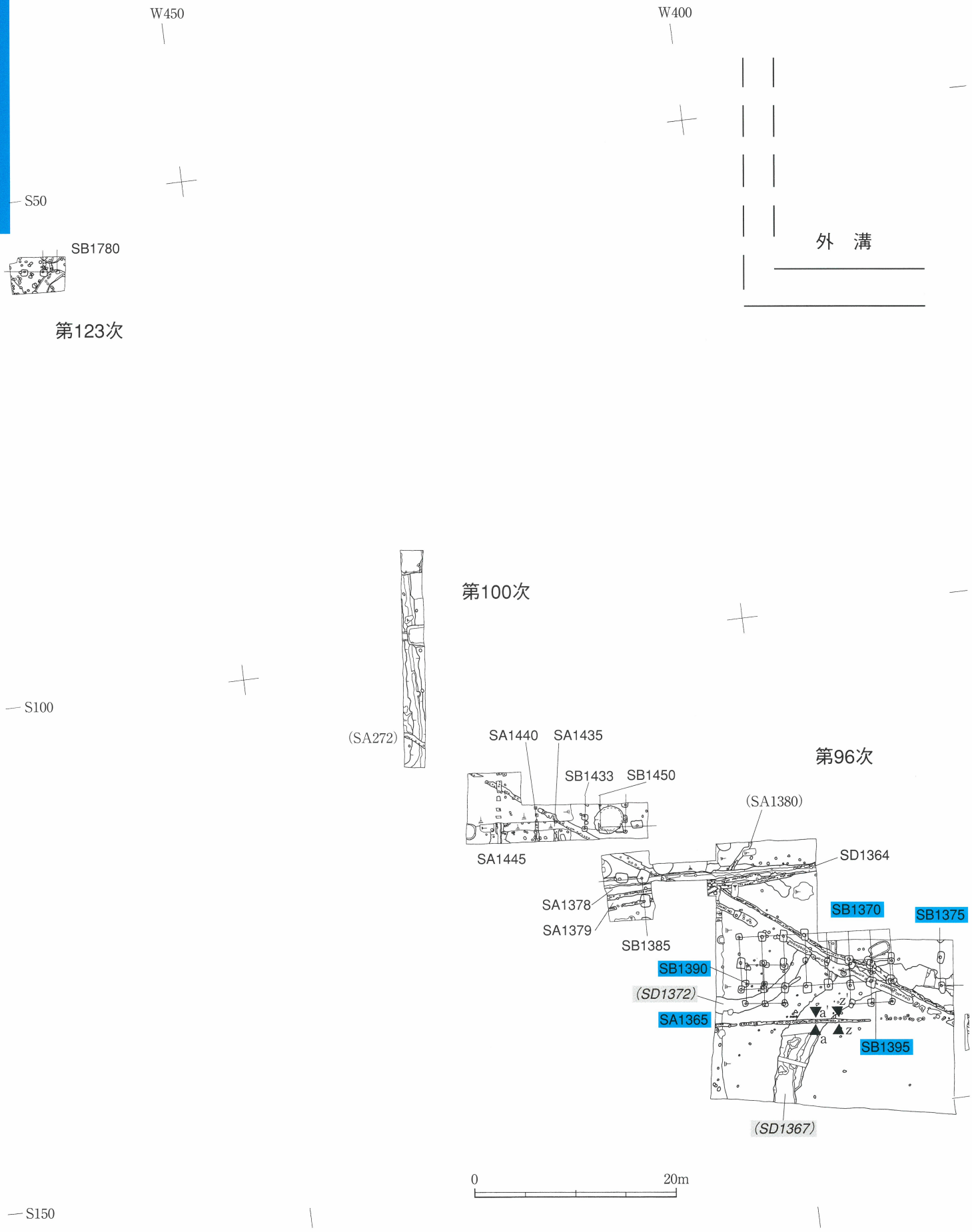
遺物は掘り方中より土師器坏、甕、須恵器甕片が少量出土している。

SD1367溝跡、SA272・1380材木列を切り、SD1381溝跡に切られている。

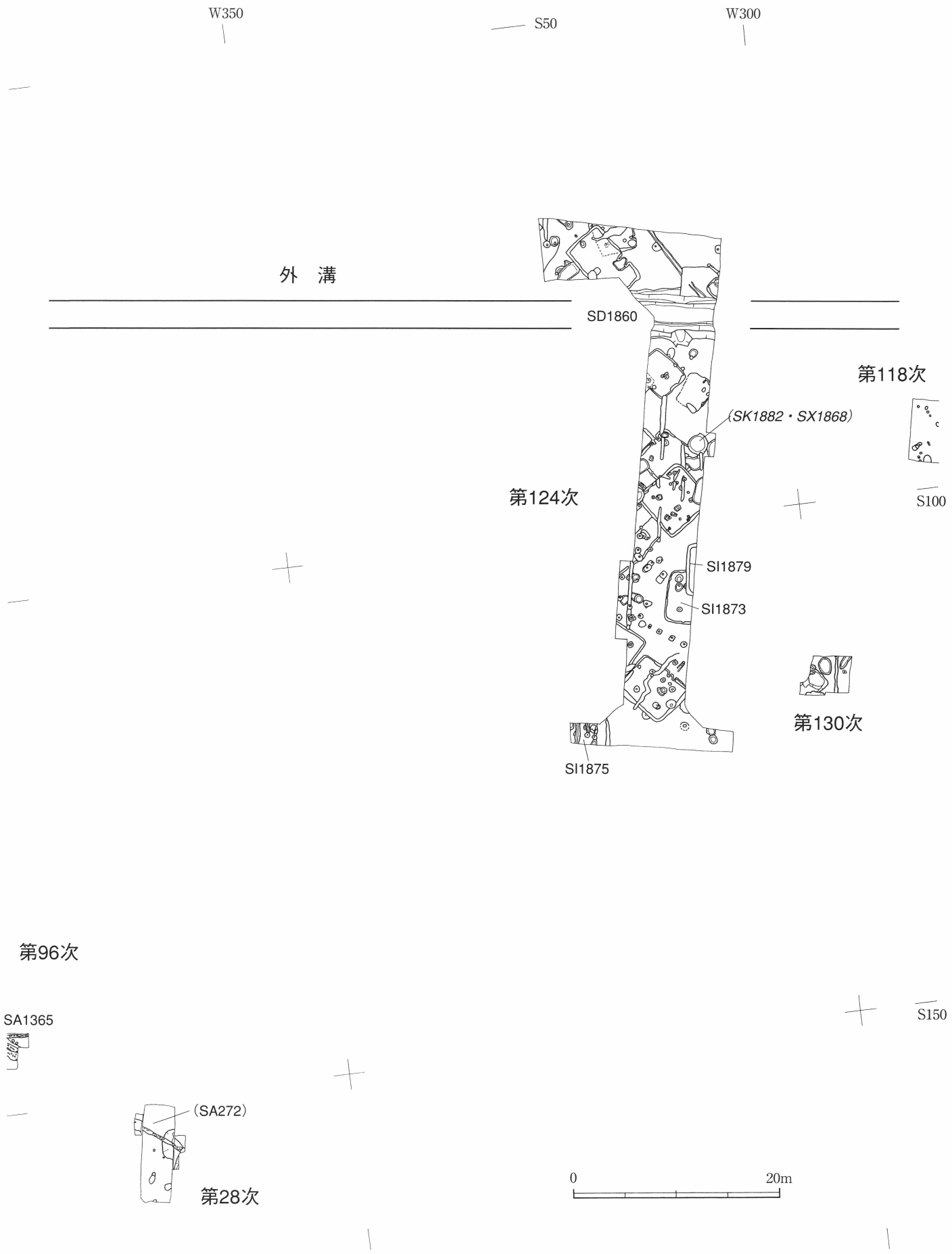


層位	土色	土性	備考
z-z'			
1a	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	柱痕跡
1b	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	灰色粘土を含む
3	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	
4	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄
a-a'			
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	柱痕跡の一部
2	10YR3/4 黒褐色	粘土質シルト	
3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	
4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	

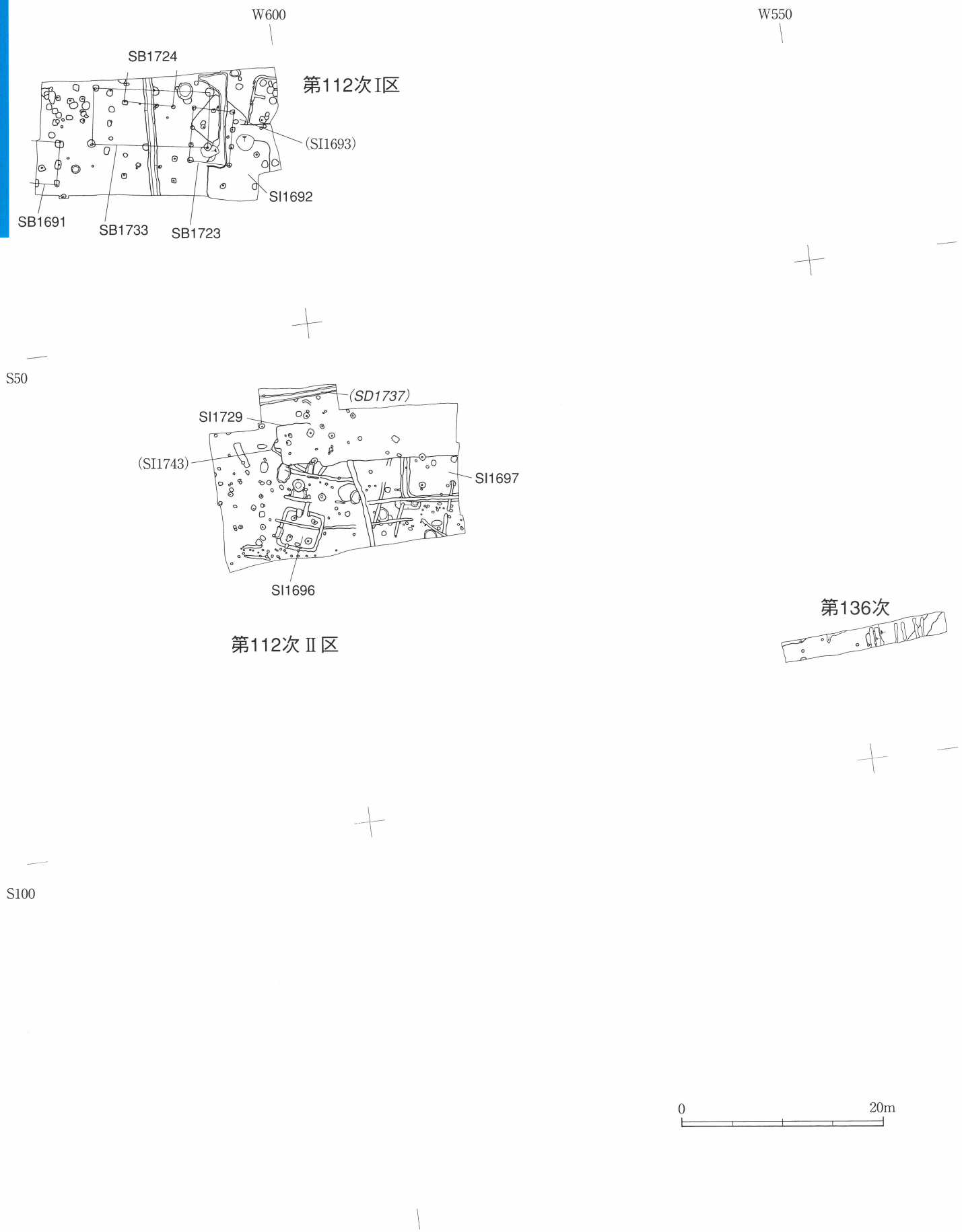
第145図　SA1365　断面図



第146図　Ⅱ期官衙南方1



第147図　Ⅱ期官衙南方2



第148図　Ⅱ期官衙西方1

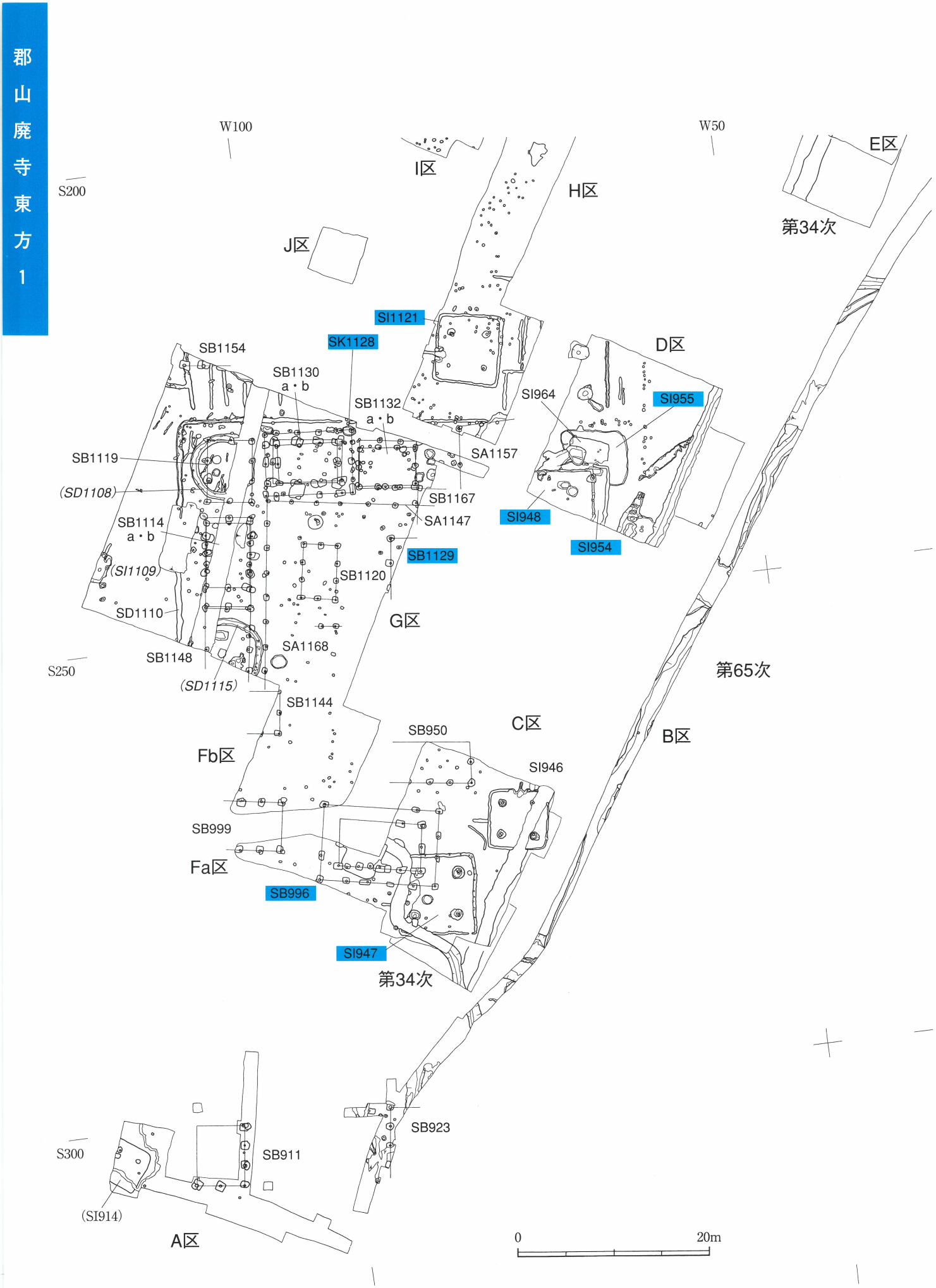
4．寺院東方建物群

郡山廃寺の東に位置し、16棟ほどの掘立柱建物跡が検出され、３時期の変遷が確認されている。建物の中にはSB1130建物跡やSB996建物跡のように、規模は小さいながら四面廂付建物跡が含まれ、最終時期の遺構群にはSA1147一本柱列による塀跡が伴っている。第65次調査については、正式報告が刊行されているので、記載を省略すべきところではあるが、遺跡全体の年代的な検討の上で重要な遺構、遺物が含まれているので、一部ではあるが掲載する。

SB996建物跡（第65次・第149、150図）

桁行５間、総長12m（身舎部分柱間寸法210～220cm、平均215cm、廂部分柱間寸法220～300cm、平均246cm）、梁行３間、総長８m（身舎部分柱間寸法220～260cm、平均240cm、廂部分柱間寸法220～280cm、平均260cm）の東西棟の四面廂付建物跡で、梁行の方向はN―2°―Eである。柱穴は一辺60～110cmの隅丸長方形のものが多く、柱

第149図　SB996、SI947　平面図



第150図　郡山廃寺東方1

痕跡は身舎で直径15～26cm、廂で直径14～28cmである。柱穴の深さは、身舎で35～60cmで、廂で30～70cmである。N3E1柱穴の柱痕跡下部の材が残存していた。身舎のN1E1のみに抜き取り穴が見られる。

遺物は掘り方中より土師器坏、甕片や、須恵器坏、甕片が出土している。

SI947・1101竪穴住居跡を切り、SD931溝跡に切られている。

SI947竪穴住居跡（第65次・第149、150図）

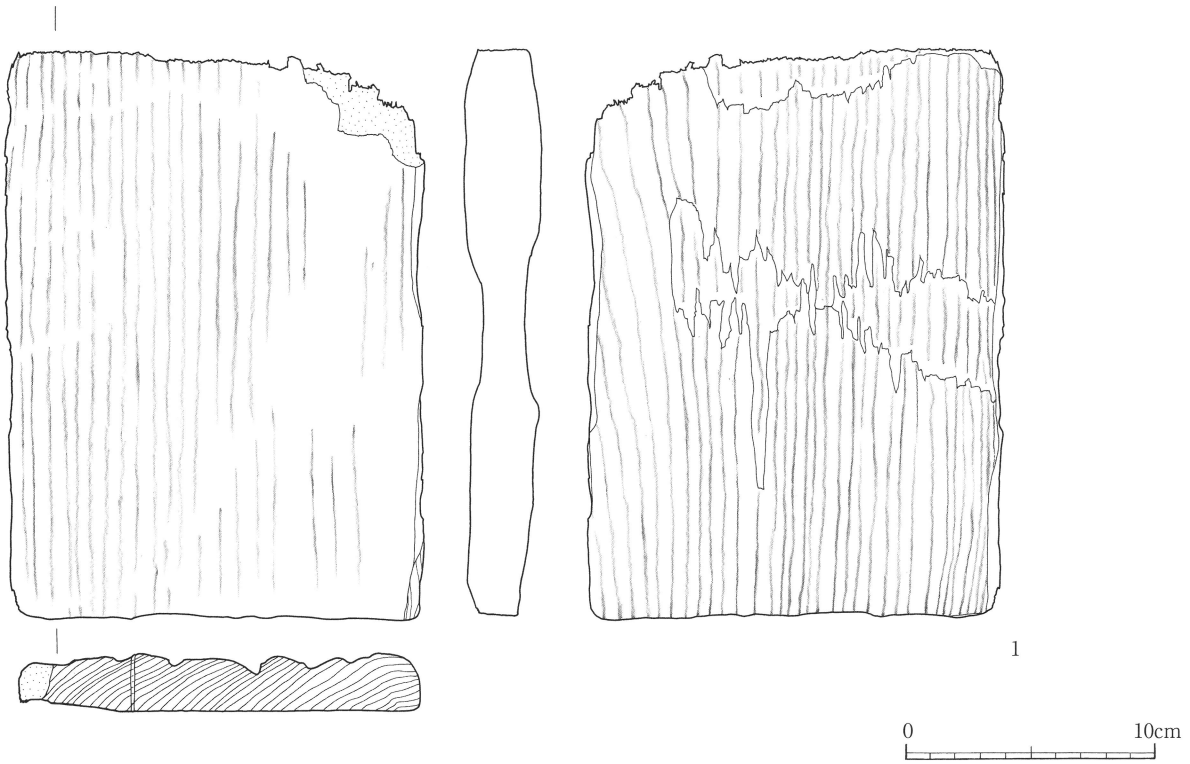
東西8.2m、南北8.6mの隅丸方形で、東壁の方向はN—2°—Wである。壁は垂直気味に立ち上がるところと緩やかに立ち上がるところがあり、高さは15～30cm残存している。床面は褐灰色粘土による貼床で、西側の床面上に焼土ならびに炭化物が広がっている。床面上で5つのピットを検出したが、そのうち規模や形態、配置からP1～P4が主柱穴と考えられた。P1、P3からは底面より礎板状に板材が重なり合って出土した。各々の板材は脆弱であったが、P3から出土した板材（第151図1）は、埋設時の形態を明瞭に残していた。

カマドは西壁中に位置したと推定されるが、SD931溝跡に切られ煙道のみ検出された。煙道は残存長100cm、上幅22～27cm、下幅12～16cmで、明瞭ではないが先端がやや凹んでいる。

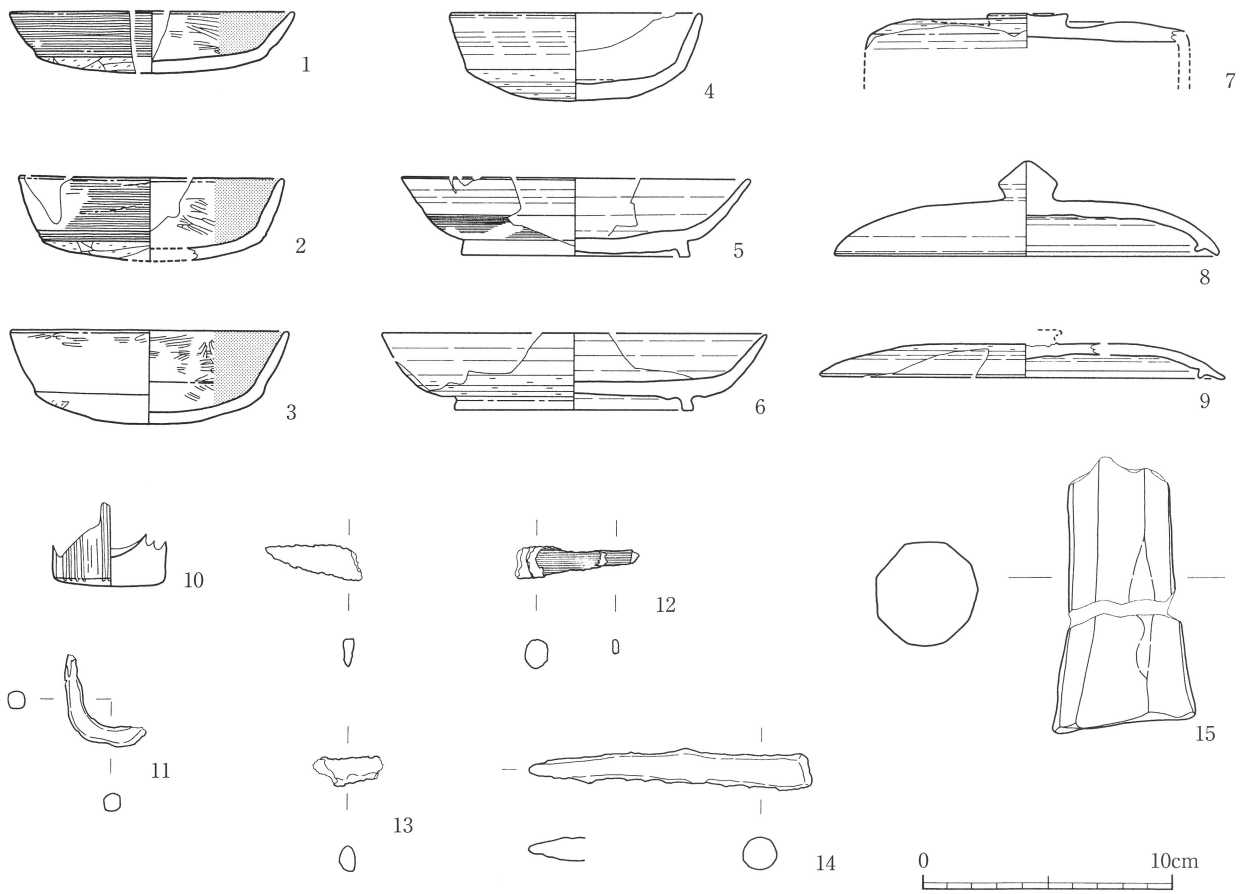
周溝は上幅15～40cm、下幅4～21cm、床面からの深さは7～12cmで、断面形はほぼU字形である。周溝内よりピットを14箇所で検出した。

遺物は住居跡床面から体部の下端に段のある土師器<中>C-8坏（第152図2）、丸底の須恵器<中>E-1坏（第152図4）、器高があまりなく体部が外傾する<中>E-17高台付坏（第152図5）、器高が比較的高いと推定される<中>E-77蓋（第152図7）、天井部が平らな<中>E-19蓋（第152図8）、天井部がさらに低くなる<中>E-18蓋（第152図9）、残欠の鉄製品<中>N-26・27不明品（第152図11、13）などが出土している。またP1から鉄製品<中>N-15刀子（第152図12）、P3から土製品<中>P-9（第152図15）、周溝内から比較的扁平な土師器<中>C-3坏（第152図1）が出土している。その他堆積土中から土師器<中>C-33坏（第152図3）、須恵器<中>E-78高台付坏（第152図6）、土製品<中>P-10不明品（第152図10）、鉄製品<中>N-24不明品（第152図14）などが出土している。

SD931溝跡、SB997建物跡に切られている。



第151図　SI947　出土遺物（1）



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
SI947（1）											
1	中L-1	木製品	板材	SI947	P3	長さ22.7　幅16.6　厚さ1.8～3.2				65	
SI947（2）											
1	中C-3	土師器	坏	SI947・周溝	堆積土	器高2.5　口径11.4　底径9.2	口縁部・体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ　黒色処理	AⅡ3	65	
2	中C-8	土師器	坏	SI947	床面	残存高3.4　口径（10.7）　底径（8.8）	口縁部・体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ　黒色処理	AⅡ3	65	
3	中C-33	土師器	坏	SI947	堆積土	器高3.8　口径11.2　底径9.2	口縁部ヘラミガキ、体部・底部不明	ヘラミガキ　黒色処理	AⅡ3	65	
4	中E-1	須恵器	坏	SI947	床面	器高3.6　口径10.2　底径8.8	口縁部・体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	不明	Ⅰ1a	65	
5	中E-17	須恵器	高台付坏	SI947	床面	器高3.1　口径14.0　底径9.2	口縁部・体部ロクロナデ→一部ナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅰ1	65	
6	中E-78	須恵器	高台付坏	SI947	堆積土	器高3.1　口径15.4　底径9.6	口縁部・体部ロクロナデ→ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅰ1	65	
7	中E-77	須恵器	蓋	SI947	床面	残存高1.4　口径（13.0）	つまみ部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ		65	
8	中E-19	須恵器	蓋	SI947	床面	器高4.8　口径15.4	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅰ2a	65	
9	中E-18	須恵器	蓋	SI947	床面	残存高1.3　口径16.3	端部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅰ2	65	
10	中P-10	土製品	不明	SI947	堆積土	縦3.4以上　横4.6	体部ハケメ、底部指ナデ	指ナデ		65	
11	中N-26	金属製品	不明	SI947	床面	長さ3.7　厚さ0.5～0.75				65	
12	中N-15	鉄製品	刀子	SI947	P1	刀部長3.8以上、茎部長4.2以上、茎元幅1.3、棟幅～4.0				65	
13	中N-27	金属製品	不明	SI947	床上	長さ2.8以上、幅0.7～1.1				65	
14	中N-24	金属製品	不明	SI947		長さ11.4、幅～1.5				65	
15	中P-9	土製品	不明	SI947	P3	縦11.8以上、横4.0～5.5	ヘラケズリ			65	

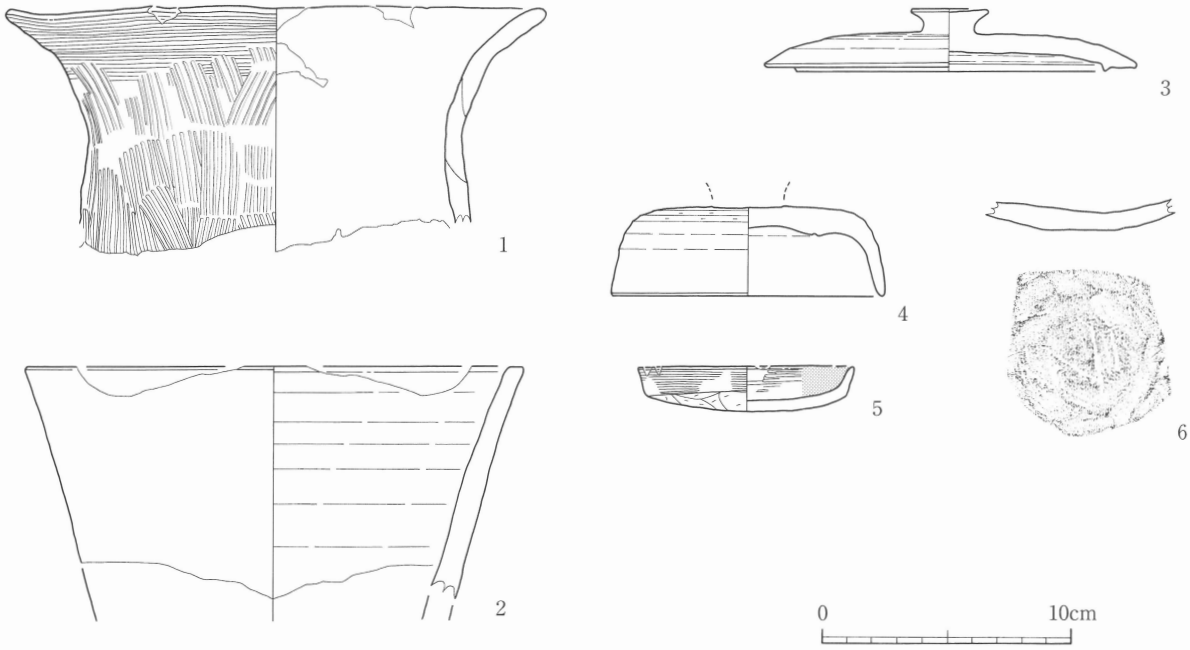
第152図　SI947　出土遺物（2）

SI948竪穴住居跡（第65次・第150、155図）

東西6.1m、南北5.15m以上の方形か長方形と推定され、東壁の方向はN―2°―Wである。壁は垂直に立ち上がり、高さ20～25cm残存している。床面は灰黄褐色粘土質シルトと黒褐色粘土による貼床で、P1の西側に80×135cmの範囲で、高さ6cmのマウンド状の高まりがある。床面上で10個のピットを検出したが、そのうち規模や形態、配置からP1が主柱穴と考えられた。

カマドは北壁中に天井部やソデが崩壊した痕跡のみを検出した。これらを撤去した床面上で83×45cmの不整形で、深さ5cm程のピットを検出した。

周溝は北壁の一部と東壁に認められ、幅14～25cm、深さ3～6cmで、断面形はU字形である。周溝内よりピッ



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
1	中C-37	土師器	甕	SI948	床面	残存高8.75　口径21.6	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	口縁部・体部不明	AⅠ	65	
2	中E-81	須恵器	甕	SI948	P1	残存高10.2　口径20.0	口縁部・体部不明	口縁部・体部ロクロナデ	Ⅰ	65	
3	中E-9	須恵器	蓋	SI948	P1	器高2.5　口径14.9	端部・つまみ部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ→ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅰ2b	65	
4	中E-79	須恵器	蓋	SI948	掘り方	残存高3.5　口径10.3	端部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅱ2	65	
5	中C-4	土師器	坏	SI948	堆積土	器高2.8　口径8.6　底径8.0	口縁部・体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅡ3	65	
6	中C-89	土師器	坏	SI948	堆積土	残存高1.2　底径3.0	体部ヘラケズリ、底部木葉痕	ヘラミガキ、黒色処理		65	

第153図　SI948　出土遺物

トを6箇所で検出した。

遺物は住居跡床面からハケメ調整の顕著な土師器<中>C-37甕（第153図1）、堆積土中からはきわめて小型の土師器<中>C-4坏（第153図5）、底部に木葉痕の残るC-89坏（第153図6）、掘り方埋土中からは器高が高い須恵器<中>E-79蓋（第153図4）、P1からカエリがありきわめて扁平な須恵器<中>E-9蓋（第153図3）、口縁部がラッパ状に開くE-81甕（第153図2）が出土している。

SI954・955竪穴住居跡を切っている。

SI954竪穴住居跡（第65次・第150、155図）

東西7.3m以上、南北5.9m以上の方形か長方形と推定され、東壁の方向はN—4°—Eである。壁は垂直に立ち上がり、高さは残存状況の良好な箇所で20cm程である。床面は黒褐色粘土質シルトによる貼床である。床面上で2個のピットを検出したが、そのうち規模や形態、配置からP1が主柱穴と考えられた。

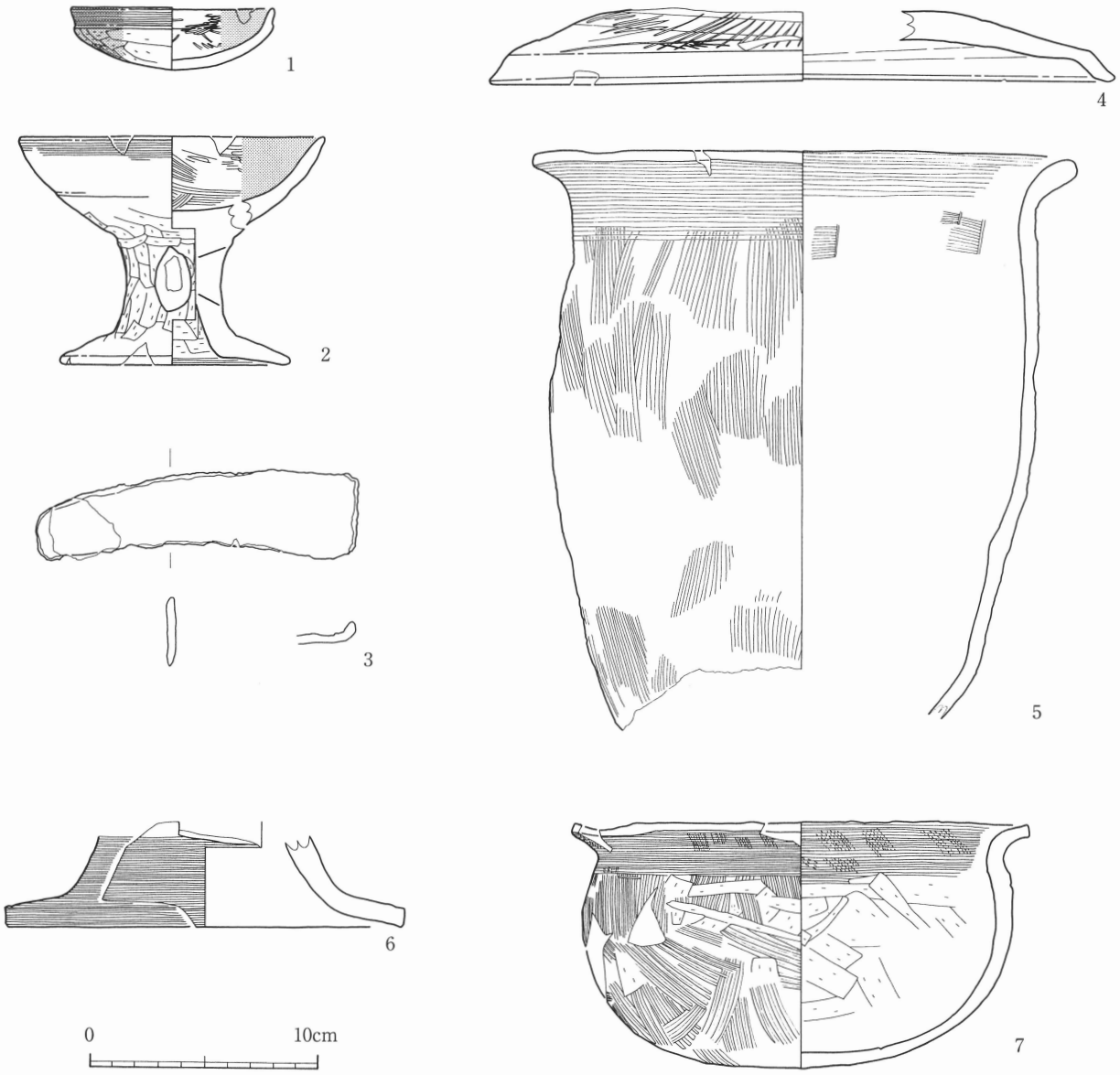
周溝は幅21～30cm、深さ10～11cmで、断面形はU字形である。北壁の西半で途切れている。

遺物は住居跡床面から脚部に窓を有する土師器<中>C-18高坏（第154図2）、基部がL字に折れ曲がった鉄製品<中>N-9鎌（第154図3）、堆積土中からはハケメ調整の土師器<中>C-94甕（第154図5）、P2からは両面黒色処理され、小振りの土師器<中>C-15坏（第154図1）、天井部に櫛描き状の沈線が多数入る須恵器<中>E-82蓋（第154図4）が出土している。

SI955竪穴住居跡を切り、SI948竪穴住居跡に切られている。

SI955竪穴住居跡（第65次・第150、155図）

東西6.56m、南北5.7mの隅丸方形で、南北軸の方向はN—0°—Eである。壁は緩やかに立ち上がり、高さは5～20cm残存している。床面は黒褐色粘土質シルトによる貼床で、張替えを伴う造り替えがあると考えられる。



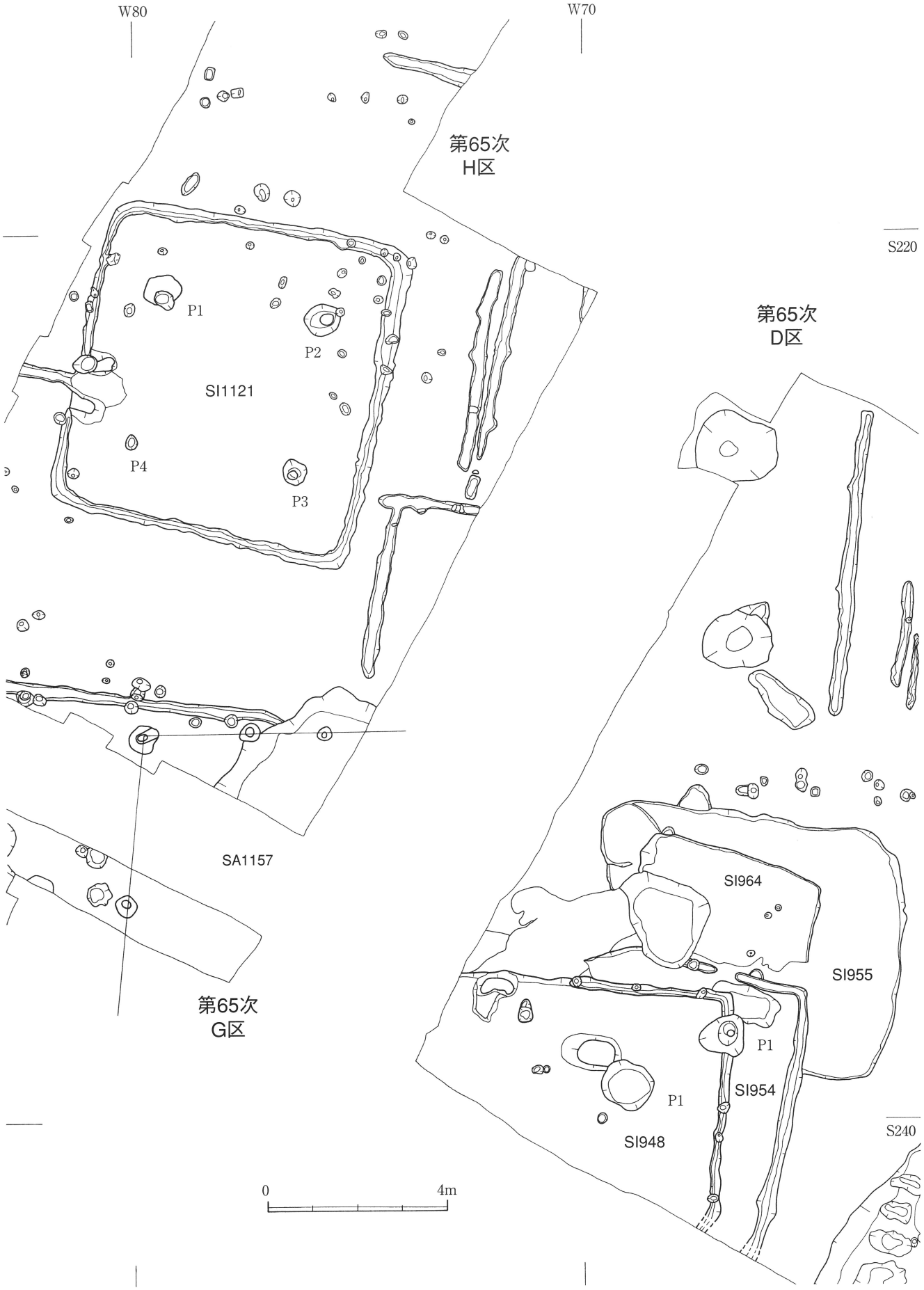
図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
1	中C-15	土師器	坏	SI954	P2	器高2.7　口径8.8　底径8.7	口縁部ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリ黒色処理	口縁部→底部ヘラミガキ、黒色処理	AⅡ1b	65	
2	中C-18	土師器	高坏	SI954	床面	器高10.0　口径13.3　底径10.1	口縁部ヨコナデ、坏底・脚柱部ヘラケズリ、脚裾部摩滅	坏部ヘラミガキ・黒色処理、脚柱部ヘラケズリ、脚裾部ヨコナデ	Ⅰ	65	
3	中N-9	金属製品	鎌	SI954	床面	長さ14.1				65	
4	中E-82	須恵器	蓋	SI954	P2	残存高3.0　口径27.0	端部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ→櫛描沈線	ロクロナデ	Ⅱ2	65	
5	中C-94	土師器	甕	SI954	堆積土	残存高25.7　口径23.6	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	AⅠ1b	65	
6	中C-35	土師器	高坏	SI955	掘り方	残存高4.0　底径17.4	脚裾部ヘラナデ	脚裾部一部ヘラケズリ	Ⅱ	65	
7	中C-20	土師器	鉢	SI955	堆積土	器高10.8　口径20.0	口縁部ハケメ→ヨコナデ、体部・底部ハケメ→ヘラケズリ	口縁部ハケメ→ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリ	Ⅱ	65	

第154図　SI954・955　出土遺物

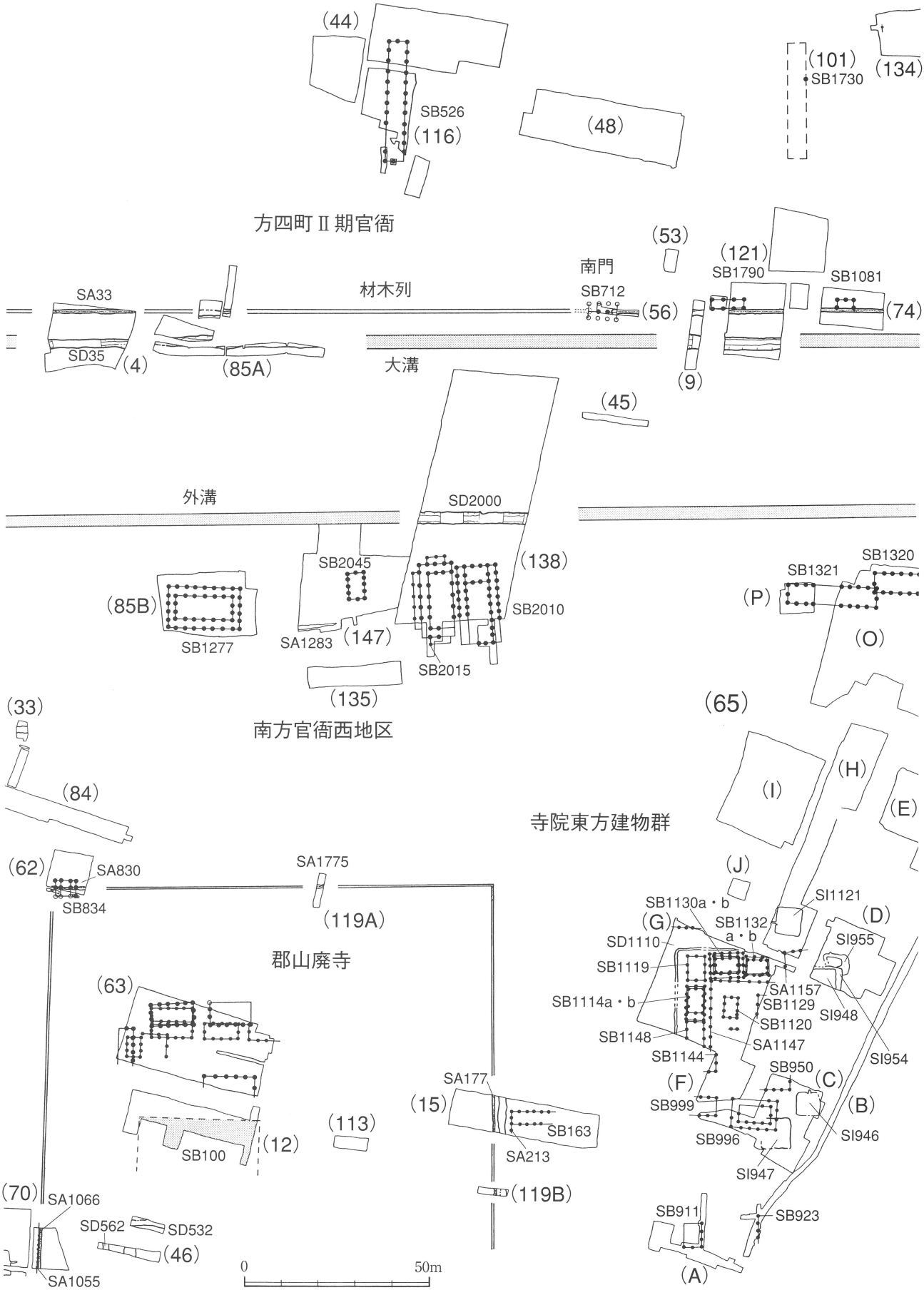
カマドは北壁やや西よりにあり、55×75cmの範囲が深さ13cm程で舌状に北に延びている。周辺の床面上に焼土やソデなどの痕跡が全くないことから、住居の使用された最終段階より以前の旧カマドと考えられる。

遺物は堆積土中から半球形の土師器<中>C-20甕（第154図７）、掘り方埋土中から窓の付いていた痕跡を留める土師器<中>C-35高坏脚部片（第154図６）が出土している。

SI954・964竪穴住居跡に切られている。



第155図　SI948・954・955・1121　平面図



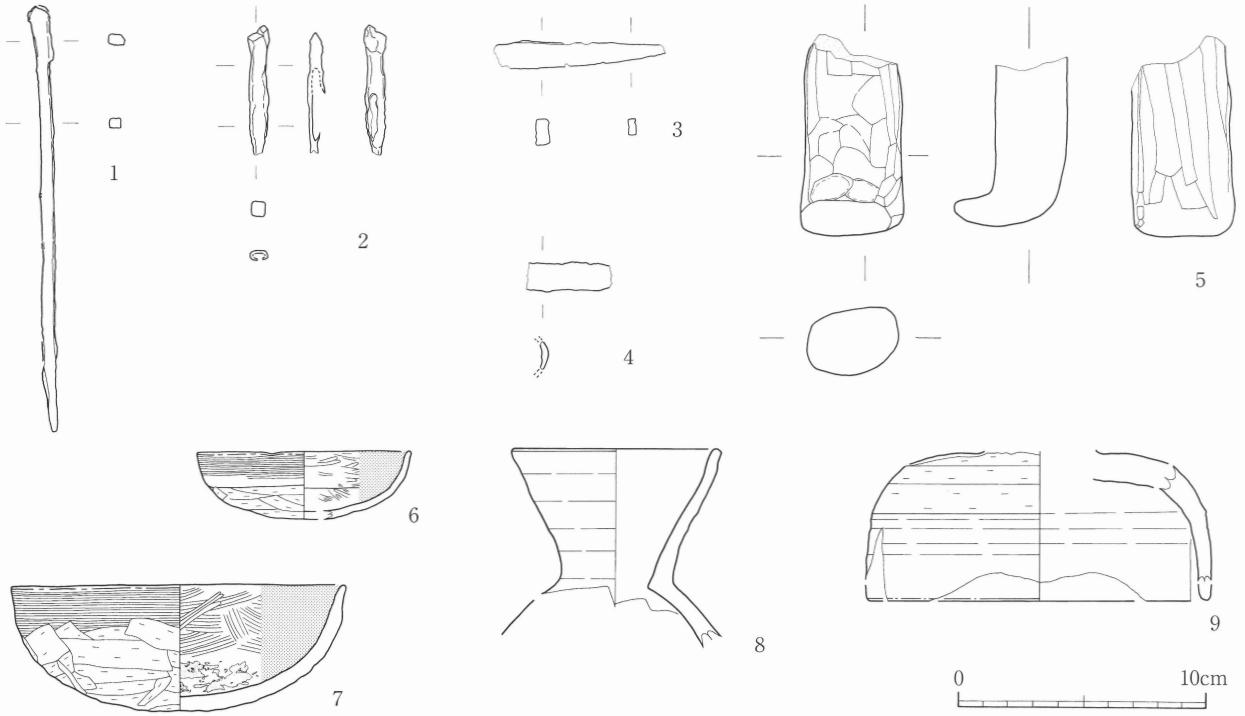
第156図　寺院東方建物群周辺遺構配置図　（　）内は調査次数

SI1121竪穴住居跡（第65次・第150、155図）

東西6.8m、南北7.5mの隅丸方形で、東壁の方向はN—5°—Sである。壁は垂直気味に立ち上がり、高さは30～40cm残存している。床面は灰黄褐色粘土質シルト、褐灰色シルト質粘土による貼床で、カマドの周辺には灰、炭化物、焼土が堆積している箇所がある。床面上で4個のピットを検出し、規模や形態、配置から主柱穴と考えられた。またP1の西側には90×100cmの範囲で、高さ5cmの範囲でマウンド状の高まりがある。

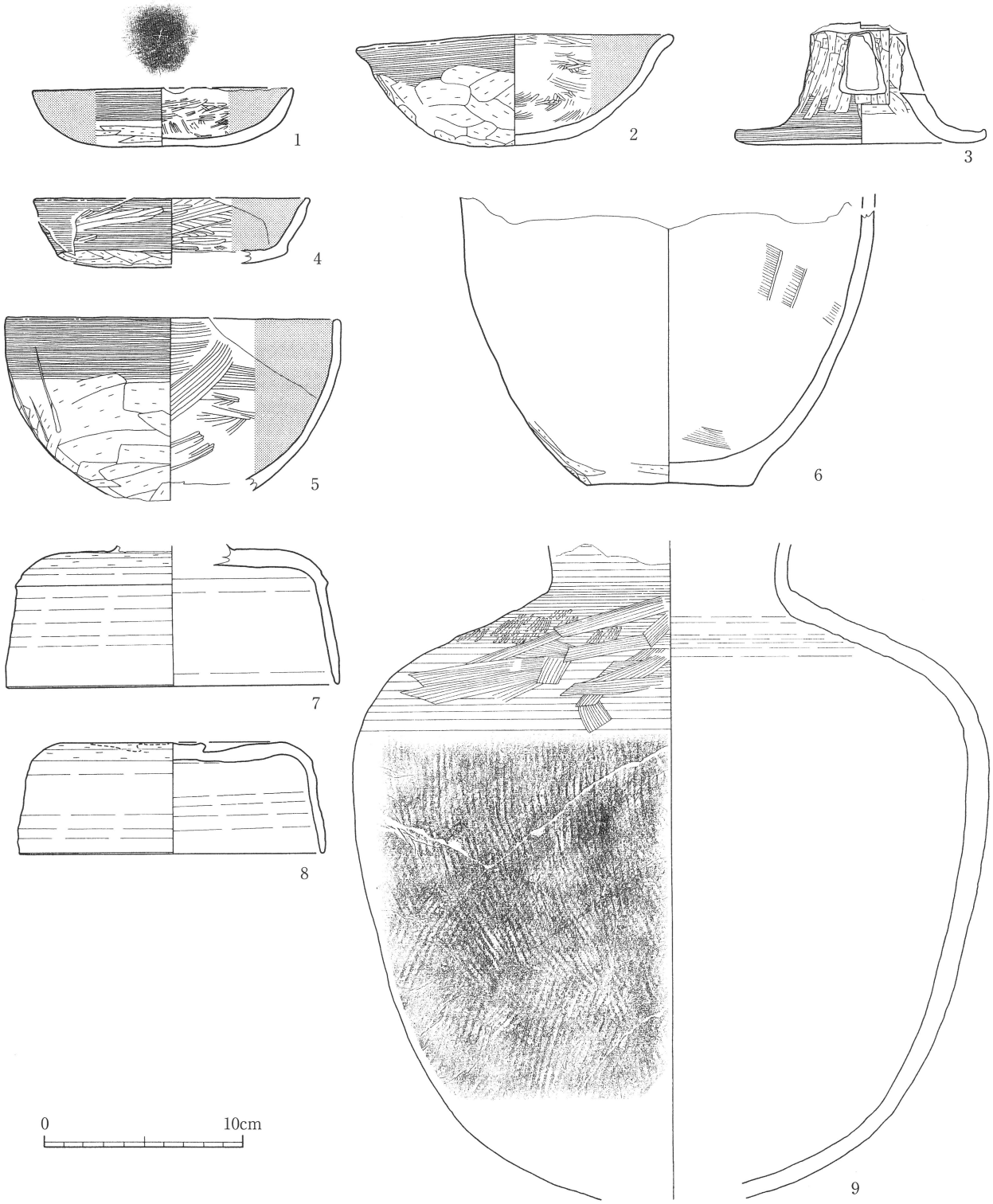
カマドは西壁やや南よりに位置し、灰黄褐色、にぶい黄褐色粘土質シルトなどで貼床をした後に構築されている。焚口と燃焼部、煙道が検出された。両ソデの先端幅は80cm、奥行きは90cmで、底面には60×40cm、深さ5cm程のピットがある。このピット上の天井部には直径10～20cmの礫が環状に配されている。

遺物は住居跡床面から口縁部がラッパ状に開く土師器<中>C-63坏（第158図2）、内面に「×」の線刻のある土師器<中>C-64坏（第158図1）、大型で鉢状の<中>C-65坏（第158図5）、平底風の<中>C-67坏（第158図4）、カエリがなく大型の須恵器<中>E-49・51蓋（第158図8、7）、丸底のE-50甕（第158図9）、鉄製品<中>N-4刀子片、N-69不明品、N-3鉄鏃（第157図3、4、1）、K-3紡錘車が出土している。なおカマド内から体部下半のみの土師器<中>C-61甕（第158図6）、南ソデの構築土中から脚部に窓を有する土師器<中>C-60高坏（第158図3）、周溝内から鉄製品<中>N-7不明品（第157図2）が出土している。その他堆積土中から小振りな土師器<中>C-66坏（第157図6）、半球形で内面黒色処理された<中>C-12坏（第157図7）、カエリがなく大型で扁平なツマミを有する須恵器<中>E-52蓋（第157図9）、口縁部のみの<中>E-4壺（第157図8）などが出土している。このうち土師器<中>C-12坏と須恵器<中>E-4壺は内面に漆が付着している。なお床面上のピット中から脚の可能性のある土製品<中>P-18（第157図5）が出土している。



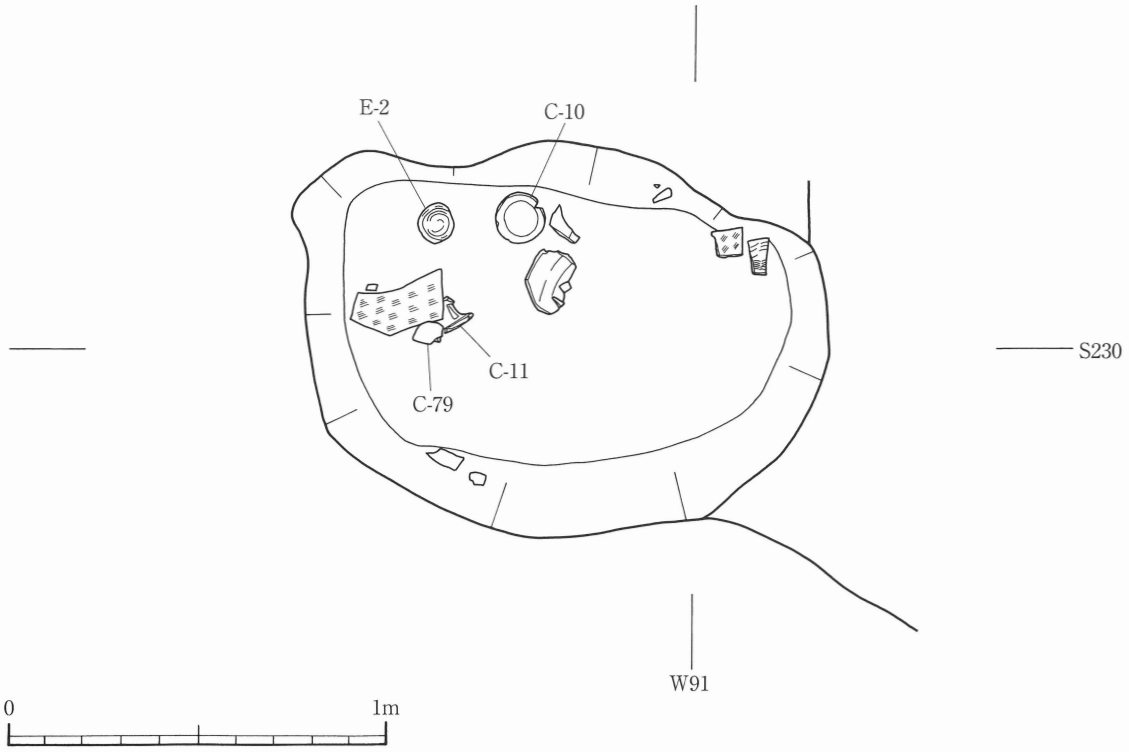
図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点 出土遺構	出土地点 層位	法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
1	中N-3	金属製品	鉄鏃	SI1121	床面	長さ17.1　幅0.7　厚さ0.5				65	
2	中N-7	金属製品	不明	SI1121	12	長さ5.2　幅0.7　厚さ0.6			周溝内	65	
3	中N-4	金属製品	刀子	SI1121	床面	長さ6.9　幅1.1　厚さ0.5				65	
4	中N-69	金属製品	不明	SI1121	床面	長さ3.4　幅1.1　厚さ0.3				65	
5	中P-18	土製品	脚か	SI1121	P	長さ8.0　幅3.7　厚さ2.7	(A) 指圧痕→ヘラケズリ	(B) ヘラケズリ		65	
6	中C-66	土師器	坏	SI1121	堆積土	器高2.7　口径8.5	口縁部・体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅢ2	65	
7	中C-12	土師器	坏	SI1121	堆積土	器高5.02　口径13.4	口縁部ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	漆付着、AⅣ1a	65	
8	中E-4	須恵器	壺	SI1121	堆積土	残存高8.1　口径8.3	口縁部ロクロナデ	不明	内面漆付着	65	
9	中E-52	須恵器	蓋	SI1121	堆積土	残存高6.0　口径13.8	端部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅱ3	65	

第157図　SI1121　出土遺物（1）



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
1	中C-64	土師器	坏	SI1121	床面	器高2.9　口径13.1　底径11.4	口縁部・体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	「×」有り、AⅣ2b	65	
2	中C-63	土師器	坏	SI1121	床面	器高5.6　口径15.9　底径2.6	口縁部ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅣ2a	65	
3	中C-60	土師器	高坏	SI1121	南袖	残存高6.2　底径13.5	脚柱部ヘラケズリ、脚裾部ヨコナデ	脚柱部ヘラケズリ、坏底部ヘラミガキ→黒色処理	Ⅰ	65	
4	中C-67	土師器	坏	SI1121	床面	器高3.5　口径13.7　底径11.6	口縁部・体部ヨコナデ→一部ミガキ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅡ3	65	
5	中C-65	土師器	坏	SI1121	床面	残存高9.2　口径16.8　底径7.6	口縁部ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅣ2a	65	
6	中C-61	土師器	甕	SI1121	カマド	残存高12.8　底径8.4	体部下端ヘラケズリ、底部木葉痕	ヘラナデ		65	
7	中E-51	須恵器	蓋	SI1121	床面	残存高7.1　口径16.8	端部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅱ3	65	
8	中E-49	須恵器	蓋	SI1121	床面	器高5.5　口径13.4	端部・つまみ部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅱ3	65	
9	中E-50	須恵器	甕	SI1121	床面	残存高33.1　底径（9.0）	頸部・体部上半ロクロナデ→ヘラナデ、体部下半平行叩き	頸部・体部上半ロクロナデ		65	

第158図　SI1121　出土遺物（2）



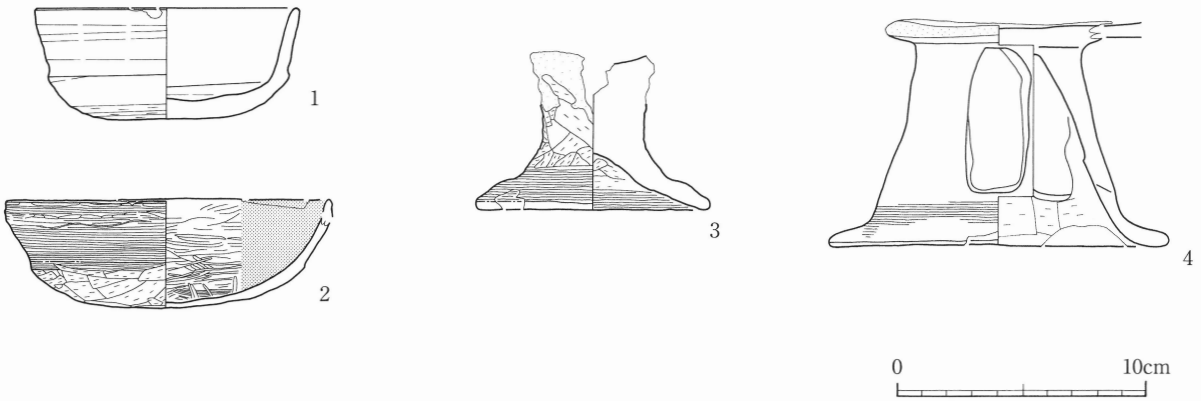
第159図　SK1128　平面図

SK1128土坑（第65次・第150、159図）

東西140cm、南北104cmの不整形で、深さは19cm、壁は緩やかではあるが直線的に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐色粘土質シルトで、焼土粒を含んでいる。

遺物は堆積土中から体部に段があり、口縁部にかけて丸みを持って外傾する土師器<中>C−10坏（第160図２）、脚部が中実の<中>C−79高坏（第160図３）、脚部に縦長の大きな窓のある<中>C−11高坏（第160図４）、体部中に稜を有する須恵器<中>E—2坏（第160図１）や須恵器甕片が出土している。

SB1130建物跡N1E1柱穴を切っている。



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
1	中E-2	須恵器	坏	SK1128		器高4.5、口径10.6、底径9.7	口縁部・体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅰ2	65	
2	中C-10	土師器	坏	SK1128		器高4.4、口径12.9、底径10.9	口縁部ヨコナデ→部ヘラミガキ、体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅢ2	65	
3	中C-79	土師器	高坏	SK1128		残存高6.3、底径9.4	脚裾部ヨコナデ、脚柱部ヨコナデ→ヘラケズリ	脚裾部ヨコナデ→ヘラケズリ、坏部ヘラミガキ→黒色処理	Ⅱ1	65	
4	中C-11	土師器	高坏	SK1128		残存高8.8、底径13.6	脚裾部ヨコナデ、脚柱部ヘラケズリ	脚裾部ヘラケズリ、坏部ヘラミガキ→黒色処理	Ⅰ	65	

第160図　SK1128　出土遺物

第３節　郡山廃寺

遺跡南部に位置し、材木列により東西120～125m、南北167mの区画された中にある。その区画内の中央、西よりにSB100基壇建物跡があり、規模や瓦の出土量、周辺の遺構配置から講堂跡と考えられた(註17)。この建物跡の北側にはSB890建物跡などの掘立柱建物跡が ⊓ 形に配置され、僧房として使われていたものと見られている(註18)。また講堂の南側にはSD562・532溝跡で区画された一画があり、瓦の出土量の多さから溝で囲まれた内部に瓦葺き建物の存在が推定されている。この東の巨石が出土したと伝承のある地点は、区画のほぼ中心となっており、塔跡の推定地と考えられている(註19)。これらの遺構を取り囲むSA830・1850材木列上の２箇所で門が発見されている。以下主要な遺構についてふれることにする。

SB100基壇建物跡（第12次・第164図）

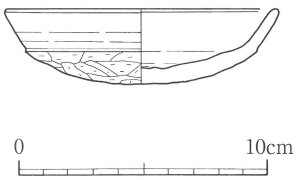
東西32m以上、南北12m以上の基壇版築を検出した。撹乱が著しく、版築の広がりを調査区断面や最下層土の分布などから推定した。方向は基壇北端の推定範囲で、E―2°―Sと見られる。版築が最も良好に残存している部分では、厚さ２～３cmのシルトや粘土の層が18～20枚重なり、高さが50cm程となっている。基壇北部に東西４m、南北2.2～2.3mの範囲が周囲の底面より、18cm程深くなっている。

基壇上部は削平を受け、礎石や根固め石などは検出されなかった。

SB214建物跡に切られている。

SB890建物跡（第63次・第164図）

桁行５間、総長11.8m(柱間寸法220～245cm)、梁行３間、総長5.8m(柱間寸法195～205cm)の東西棟の建物跡で、桁行の方向はN―1°―Wである。柱穴は一辺60～130cmの隅丸長方形で、深さは55cm程、柱痕跡は直径15～20cmである。各柱穴の掘り方は長辺を揃えて掘り込まれている。

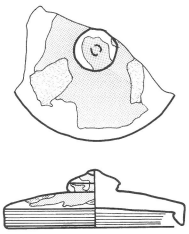


第161図　SB890　出土遺物

柱穴掘り方埋土より底部が手持ちヘラケズリされた須恵器E-276坏(第161図)が出土している。

SK851土坑（第63次・第164図）

平面形が250×330cmの不整隅丸方形を呈する、深さ20cm程の土坑である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。この土坑から三彩Ⅰ-51蓋(第162図)が出土した。いわゆる奈良三彩の小壺の蓋である。Ⅰ-51蓋はくすんだ緑色と光沢のある褐色の釉が観察される。また器面に茶褐色の付着物も見られるが釉かどうかは明らかでない。蓋の径は4.7cm、紐を含めた高さが1.5cmである。胎土は乳白色を呈し緻密である。



第162図　SK851　出土遺物

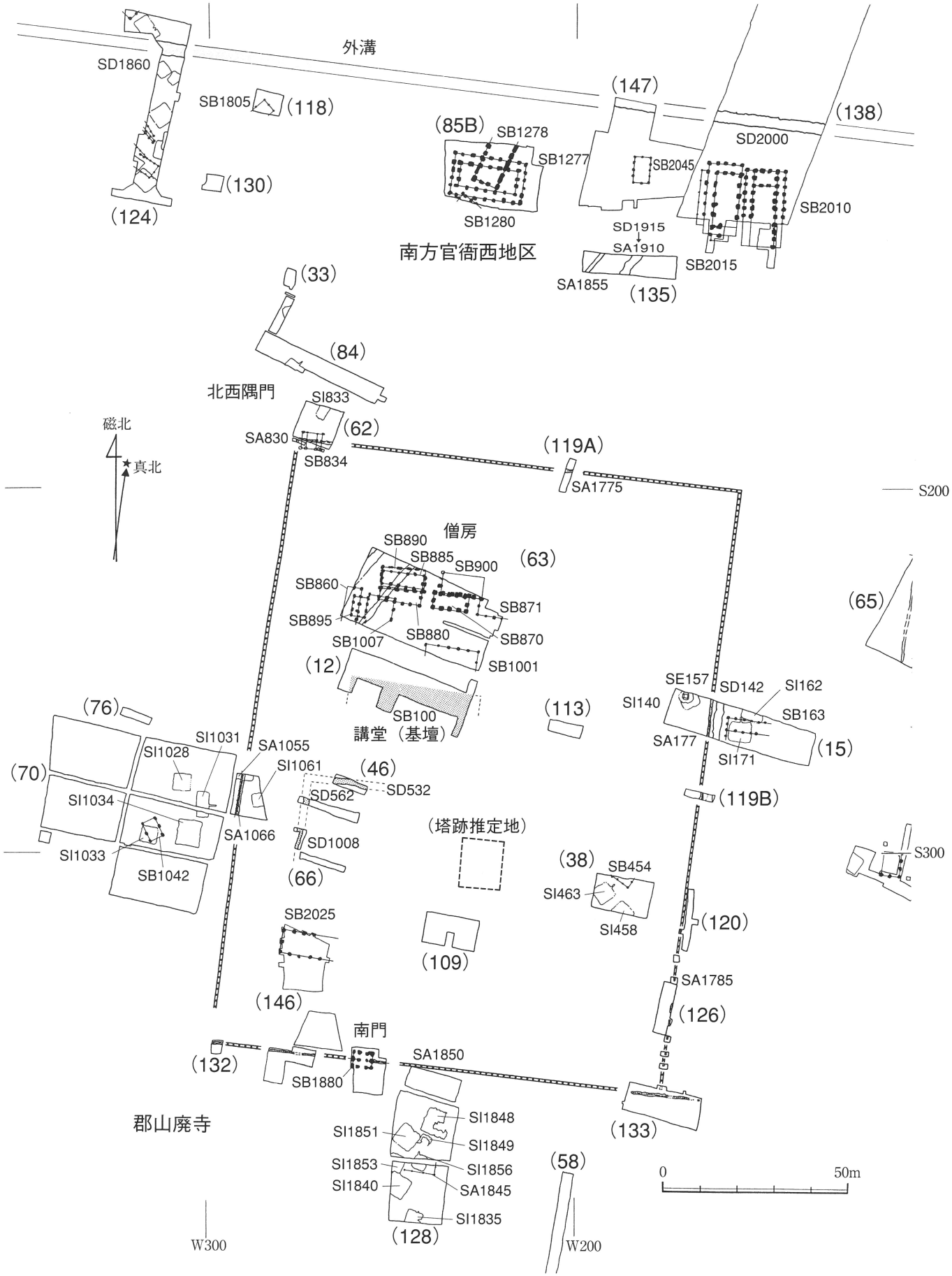
SD532溝跡（第46次・第164、166図）

上幅140～160cm、下幅15～40cm、深さ50～90cm程で、ほぼ真東西方向に延びる溝跡である。壁は下半部で直立気味に立ち上がり、上半部で傾斜を有し緩やかに広がる。

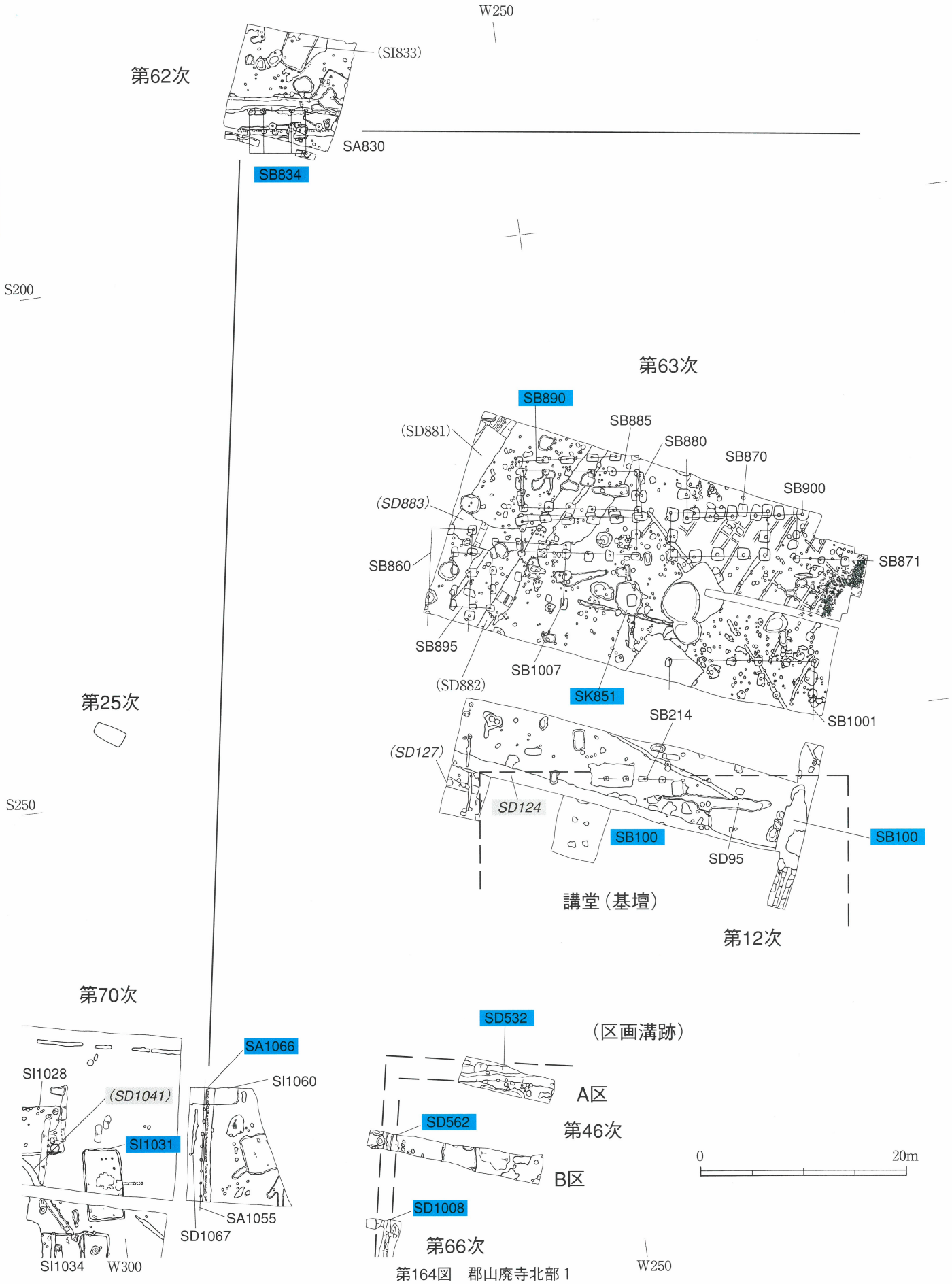
遺物は遺構の検出面と堆積土中から、多量の瓦が出土した。検出面上から粘土板巻き作りによるF-30丸瓦(写真図版708)、凹面に布目痕が残り、周縁にのみヘラケズリが施され、凸面に縄叩きの後、ナデにより叩きの痕跡を擦り消したG-23平瓦(写真図版708)、胴部の破片で内面に格子状の叩き目が残るH-9鴟尾片が出土している。この他に堆積土中から、多量の瓦、土師器、須恵器片が出土している。

SD562溝跡（第46、66次・第164、166図）

上幅130～210cm、下幅16～40cm、深さ70～120cm程で、N―6°―E方向に延びる溝跡である。壁は下半部で直立気味に立ち上がり、上半部で傾斜を有し緩やかに広がるか、V字形を呈している。検出された位置と断面形、遺物の出土状況から、第66次調査のSD1008溝跡に連続していると考えられる(註20)。またこの溝跡は、北側で東に



第163図　郡山廃寺遺構配置図　（　）内は調査次数



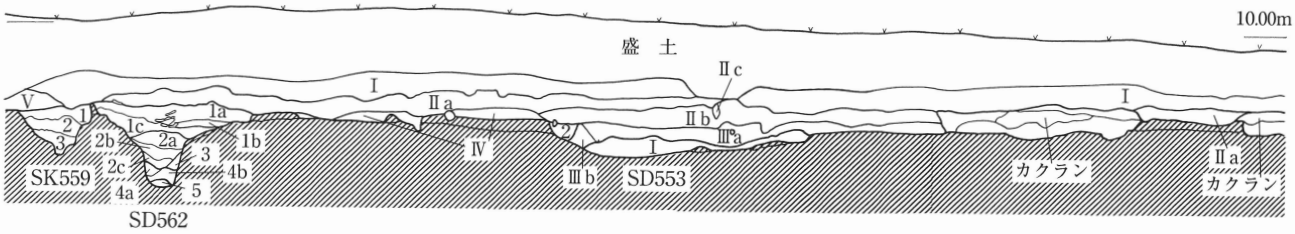
第164図　郡山廃寺北部1

屈曲するものと推定される。

遺物は検出面と堆積土中から、多量の瓦が出土した。堆積土１層中からは、八弁で直径4.6cmの中房の中に５個（１＋４）の蓮子が配されたＦ−32軒丸瓦（第167図３）や、同じ文様のＦ−31・33軒丸瓦（第167図２、４）、凹面に布目痕と摸骨痕が残り、凸面に縄叩きの後、一部ナデにより叩きの痕跡を擦り消したＧ−24平瓦（第167図５）、凸面に4条ないし5条の櫛描き波状文の施されたＧ−26平瓦（第167図７）が出土している。この他にＨ−13・14鴟尾、Ｇ−27平瓦、土師器坏、甕片、須恵器甕片が出土している。

第66次調査区からも同種の軒丸瓦、平瓦、丸瓦が出土している。そのうちＧ−43・44・60平瓦（第168図12、第167図６、第168図３）は、凸面に朱が付着しており軒平瓦の代用で葺かれたことが考えられる。また丸瓦の中に軒丸瓦の一部で、瓦当が付いていた可能性のあるものがある。

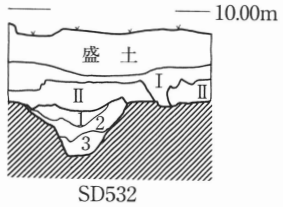
第46次調査区Ｂトレンチ南壁



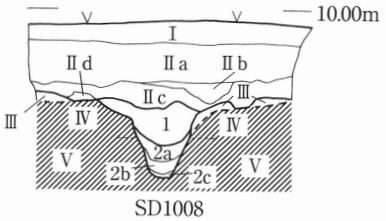
層位	土　色	土　性	備　考
基本層位			
Ⅰ	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	表土
Ⅱa	10YR3/2　黒褐色	シルト	
Ⅱb	10YR3/2　黒褐色	シルト	
Ⅱc	2.5YR5/2　暗灰黄色	シルト	
Ⅲa	10YR3/3　暗褐色	シルト	瓦を含む
Ⅲb	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	
Ⅳ	5Y5/3　灰オリーブ色	シルト	
Ⅴ	5Y4/1　灰色	シルト	
SD553			
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	
2	2.5Y4/1　黄灰色	シルト	

層位	土　色	土　性	備　考
SD562			
1a	2.5Y4/2　暗灰黄色	シルト	瓦片を多く含む
1b	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	
1c	2.5Y4/1　黄灰色	シルト	
2a	10YR3/4　暗褐色	シルト	
2b	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	
2c	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	
3	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	
4a	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	
4b	2.5Y4/1　黄灰色	シルト質粘土	
5	2.5Y4/4　オリーブ褐色	砂	
SK559			
1	2.5Y4/1　黄灰色	シルト	
2	2.5Y4/1　黄灰色	シルト	
3	5Y4/1　灰色	粘土質シルト	

第46次調査区
Ａトレンチ西壁



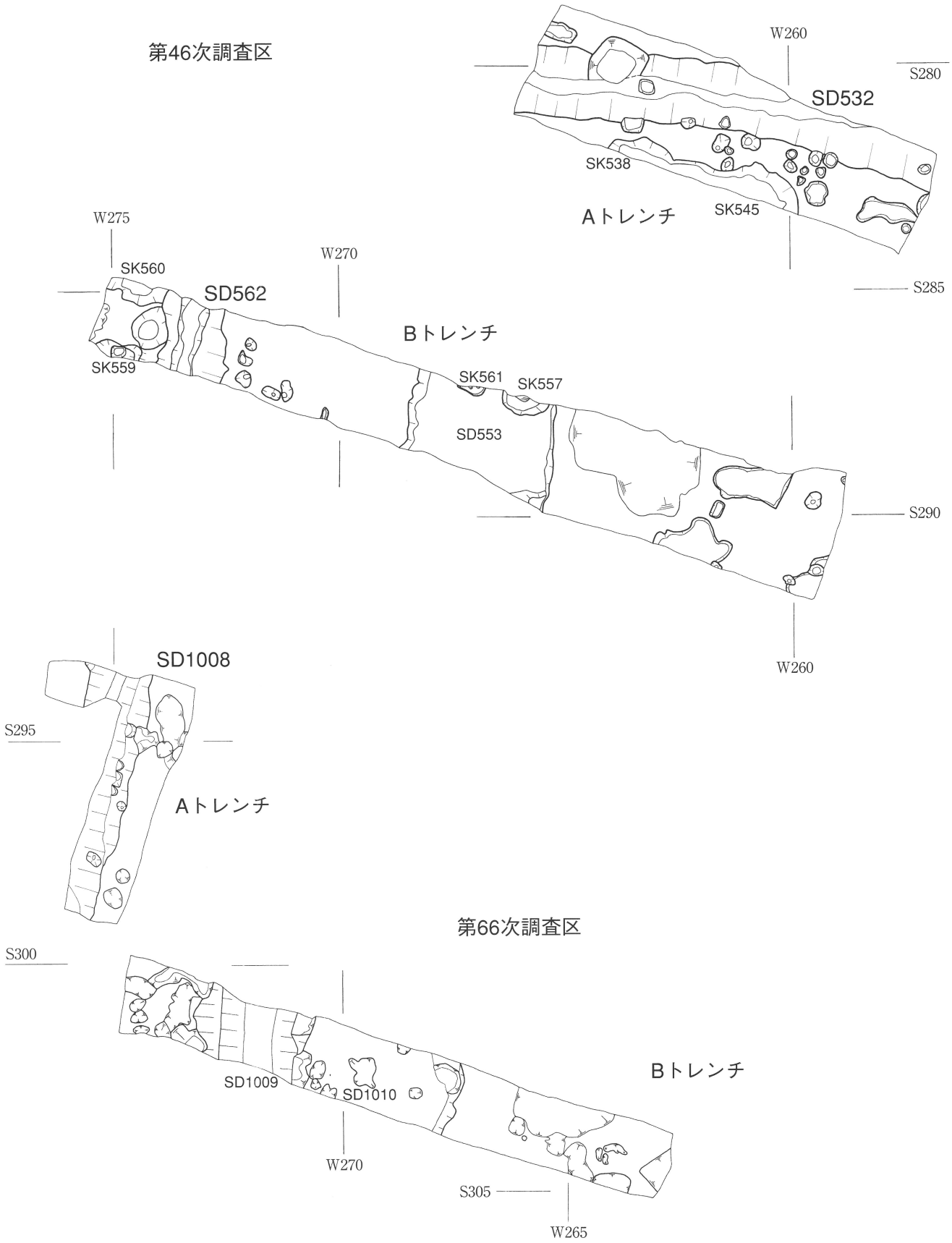
第66次調査区
Ａトレンチ南壁



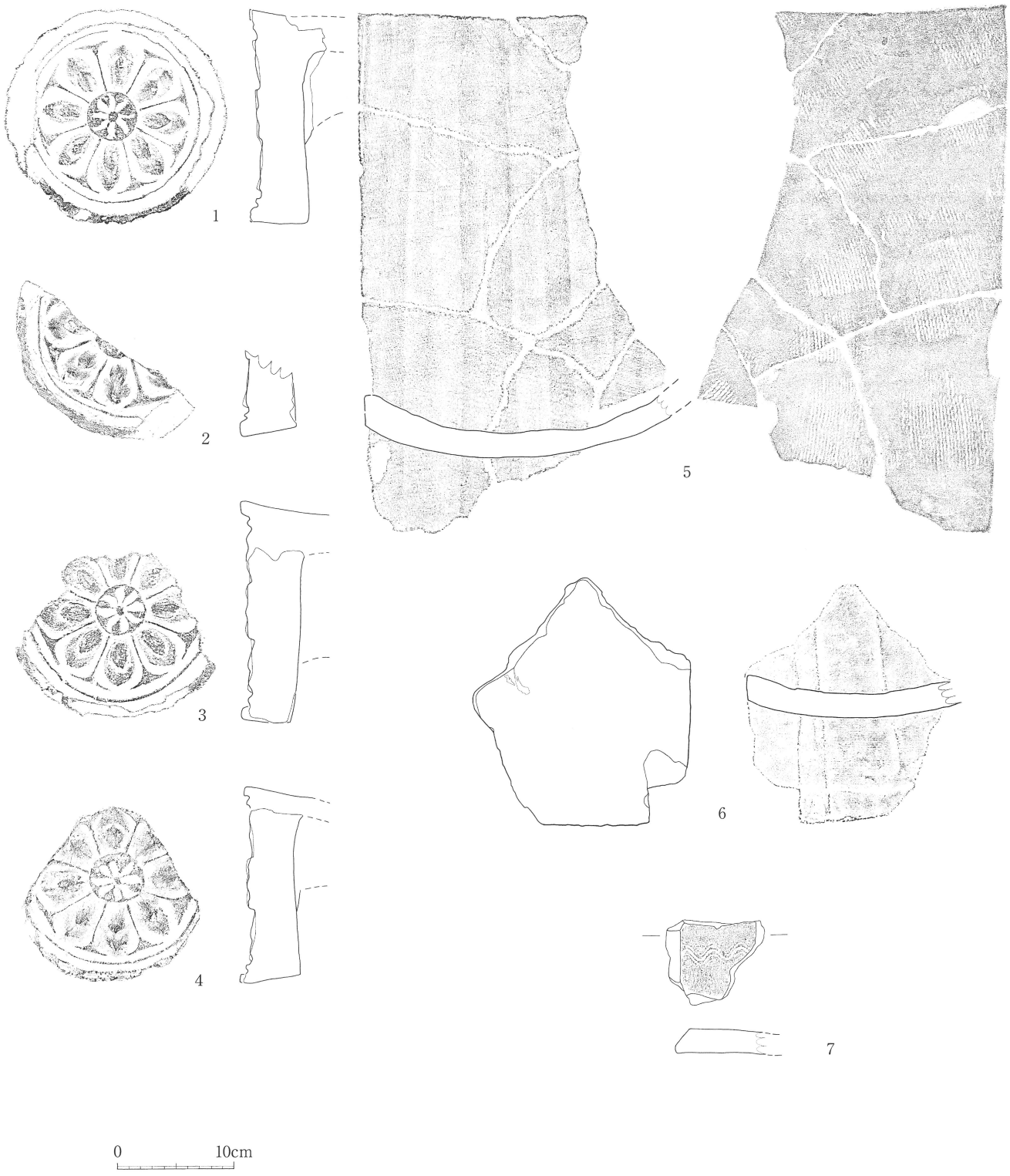
遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
第46次調査区Ａトレンチ西壁				
基本層位	Ⅰ			耕作土
	Ⅱ	10YR3/3　暗褐色	シルト	
SD532	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	瓦を含む
	2	10YR2/3　黒褐色	シルト	
	3	10YR3/3　暗褐色	シルト	

遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
第66次調査区Ａトレンチ南壁				
基本層位	Ⅰ	5Y　黄色	砂	盛土
	Ⅱa	10YR3/3　暗褐色	シルト	ゴミ多量に混入
	Ⅱb	10YR3/3　暗褐色	シルト	しまりなし
	Ⅱc	10YR3/4　暗褐色	シルト	耕作土
	Ⅱd	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色シルト混入
	Ⅲ	10YR5/6　黄褐色	シルト	暗褐色シルト混入、地山漸移層
	Ⅳ	10YR6/8　明褐色	シルト	地山
	Ⅴ	10YR7/4　にぶい黄褐色	粘土	地山
SD1008	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	酸化鉄、マンガン粒含む
	2a	10YR3/2　黒褐色	シルト	にぶい黄橙砂質シルトを若干含む
	2b	10YR5/2　灰黄褐色	シルト質砂	黄褐色シルトを若干含む
	2c	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	黄褐色シルトを含む

第165図　SD532・562・1008　断面図

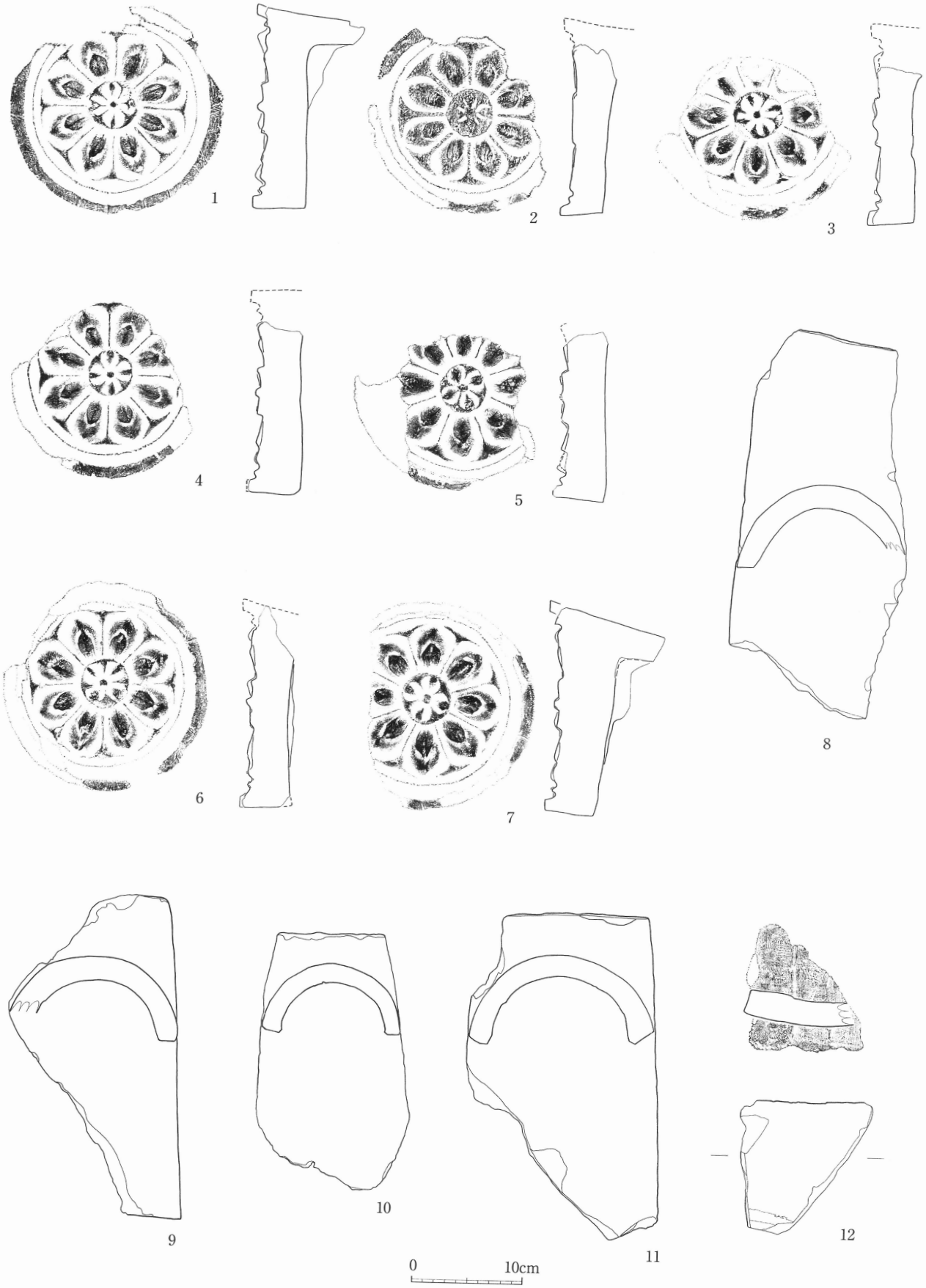


第166図　SD532・562・1008　平面図

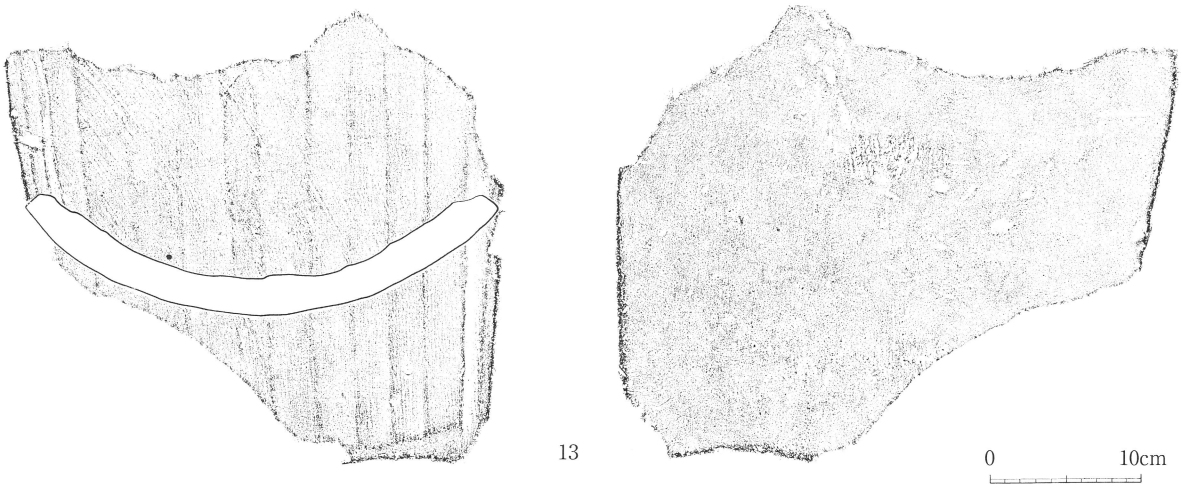


図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
1	F-34	瓦	軒丸瓦	SD562		直径18.2　中房径4.2　厚さ4.9	単弁連華文	瓦当側面ケズリ、瓦当裏面ケズリ→ナデ		46	707
2	F-31	瓦	軒丸瓦	SD562		直径7.5　厚さ4.8	単弁連華文	瓦当側面ケズリ、瓦当裏面ケズリ・ナデ		46	707
3	F-32	瓦	軒丸瓦	SD562		直径18.7　中房径4.6　厚さ3.3	単弁連華文	瓦当側面・瓦当裏面ケズリ		46	707
4	F-33	瓦	軒丸瓦	SD562		直径14.8　中房径4.2　厚さ4.9	単弁連華文	瓦当側面・瓦当裏面ケズリ→ナデ		46	707
5	G-24	瓦	平瓦	SD562		縦45.0　横25.5　厚さ2.3	凸面・縄叩き目→ナデ	凹面・布目痕、糸切り痕、模骨痕		46	707
6	G-44	瓦	平瓦	SD1008	2	縦20.2　横18.6　厚さ2.2	凸面・縄叩き目→ナデ、朱付着	凹面・布目痕、模骨痕		66	728
7	G-26	瓦	平瓦	SD562		縦7.2　横8.3　厚さ2.0	凸面・縄叩き目→ナデ→波状沈線	凹面・布目痕、糸切り痕		46	

第167図　SD562・1008　出土遺物



第168図　SD1008　出土遺物（1）



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
1	F-58	瓦	軒丸瓦	SD1008	1	直径18.2　中房径4.2　厚さ4.6	単弁連華文	瓦当側面・瓦当裏面ケズリ		66	727
2	F-59	瓦	軒丸瓦	SD1008	1	直径（17.5）　中房径4.4　厚さ3.8	単弁連華文	瓦当側面・瓦当裏面ケズリ		66	727
3	F-60	瓦	軒丸瓦	SD1008	1	直径（17.9）　中房径4.2　厚さ4.1	単弁連華文	瓦当側面・瓦当裏面ケズリ		66	727
4	F-61	瓦	軒丸瓦	SD1008	1	直径（18.0）　中房径4.2　厚さ4.5	単弁連華文	瓦当側面・瓦当裏面ケズリ		66	727
5	F-62	瓦	軒丸瓦	SD1008	1	直径（18.0）　中房径4.4　厚さ（4.8）	単弁連華文	瓦当側面・瓦当裏面ケズリ		66	727
6	F-63	瓦	軒丸瓦	SD1008	2	直径（18.6）　中房径4.1　厚さ（4.7）	単弁連華文	瓦当側面・瓦当裏面ケズリ		66	727
7	F-64	瓦	軒丸瓦	SD1008	1	直径18.7　中房径4.3　厚さ4.4	単弁連華文	瓦当側面・瓦当裏面ケズリ		66	727
8	F-65	瓦	丸瓦	SD1008	1	縦32.7　横15.1　厚さ2.1	凸面縄叩き→ナデ	凹面布目痕		66	728
9	F-66	瓦	丸瓦	SD1008	1	縦28.7　横15.0　厚さ2.3	凸面ナデ→ケズリ	凹面布目痕、粘土板合わせ目痕		66	728
10	F-57	瓦	丸瓦	SD1008	1	縦22.9　横13.7　厚さ1.7	凸面ナデ→ケズリ	凹面布目痕、タガ痕		66	728
11	F-56	瓦	丸瓦	SD1008	1	縦28.7　横16.6　厚さ1.9	凸面縄叩き目→ナデ	凹面布目痕、粘土板合わせ目痕		66	728
12	G-43	瓦	平瓦	SD1008	1	縦12.0　横11.8　厚さ2.4	凸面縄叩き目→ナデ、朱付着	凹面布目、模骨痕		66	727
13	G-42	瓦	平瓦	SD1008	1	縦29.5　横30.2　厚さ2.5	凸面縄叩き目→ナデ	凹面布目痕、糸切り痕、模骨痕		66	727

第169図　SD1008　出土遺物（2）

SB834建物跡（第62次・第164図）

桁行３間、総長5.5m（柱間寸法130～140・270cm）、梁行は２間と推定され、総長4.3m（柱間寸法205～224cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はE―1°―Sである。柱穴は一辺45～84cmの不整形で、深さは約30cm、柱痕跡は直径15～20cmである。SA830材木列の一部を抜き取って建てられ、棟通りはSA830材木列と一致している。各柱穴は抜き取り穴を伴い、北の桁行柱穴のみ２箇所ずつまとめて抜かれている。

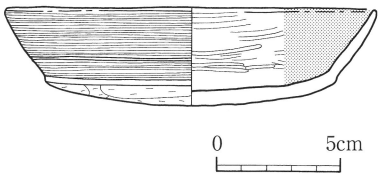
SI835竪穴住居跡、SK832土坑を切り、SD828溝跡に切られている。

SA1066材木列―郡山廃寺西辺―（第70次・第164、171図）

直径12～20cmの丸材をN―4°―Eの方向に密接に立て並べている。掘り方は上幅68～70cm、深さは20～30cmである。底面は平坦で壁は直立している。北の第62次調査で、この材木列が鍵形に曲りSB834建物跡（門跡）に接続している。

西側に35～40cm離れ、SA1055一本柱列が平行している。

遺物は掘り方埋土中より、内面ヘラミガキ黒色処理され平底風の土師器C-635坏（第170図1）が出土した。

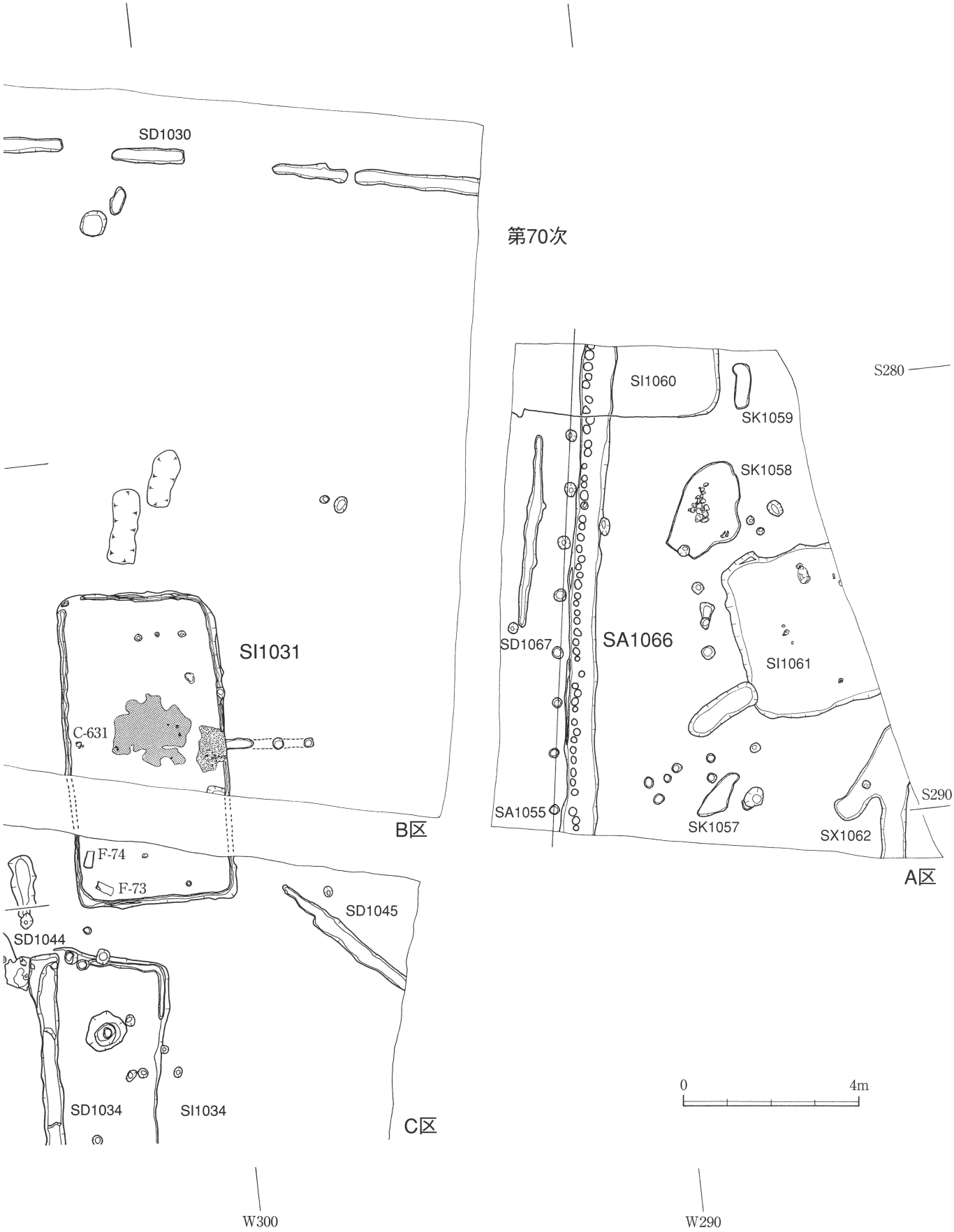


第170図　SA1066　出土遺物

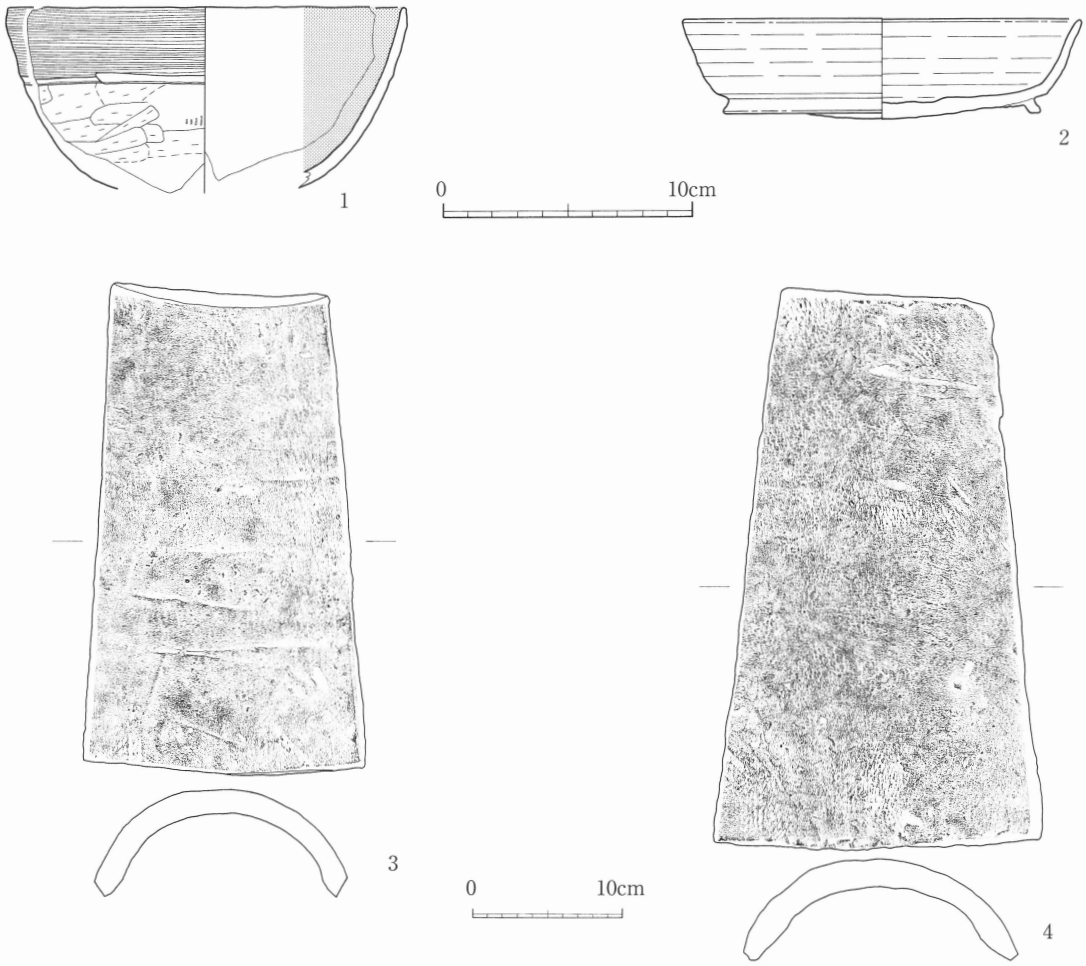
SI1060竪穴住居跡に切られている。

SI1031竪穴住居跡（第70次・第164、171図）

東西3.6m、南北6.95mの長方形で、方向はN―4°―Wである。北半は床面直上まで撹乱が及んでいるが、南半では壁の高さは20cmまで残存している。床面は全面に貼床が見られ、カマドの前面の住居中央において炭化物の集積が見られる。カマドは東壁の中央にあり、削平が著しいが燃焼部底面と煙道がかろうじて残存している。煙道は



第171図　第70次調査区　SI1031、SA1066　平面図（郡山廃寺西部）



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
1	C-631	土師器	坏	SI1031	床面	残存高7.5　口径（15.8）	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ナデ→ヘラミガキ→黒色処理	AⅣ2a	70	731
2	E-289	須恵器	高台付坏	SI1031		器高4.1　口径16.1　底径12.8	口縁部体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅱ1	70	731
3	F-73	瓦	丸瓦	SI1031	床面	縦31.6　最大幅18.6　最小幅14.2　厚さ1.6	凸面縄叩き目→ナデ	凹面布目痕		70	731
4	F-74	瓦	丸瓦	SI1031	床面	縦36.6　最大幅21.7　最小幅13.9　厚さ1.9	凸面縄叩き目→ナデ	凹面布目痕		70	731

第172図　SI1031　出土遺物

長さ200cm、幅22cm、深さ２cmで、先端に直径20cm、煙道底面よりさらに３cm程深いピットがある。壁際には幅７～20cm、床面からの深さが６～８cmの周溝が巡っている。

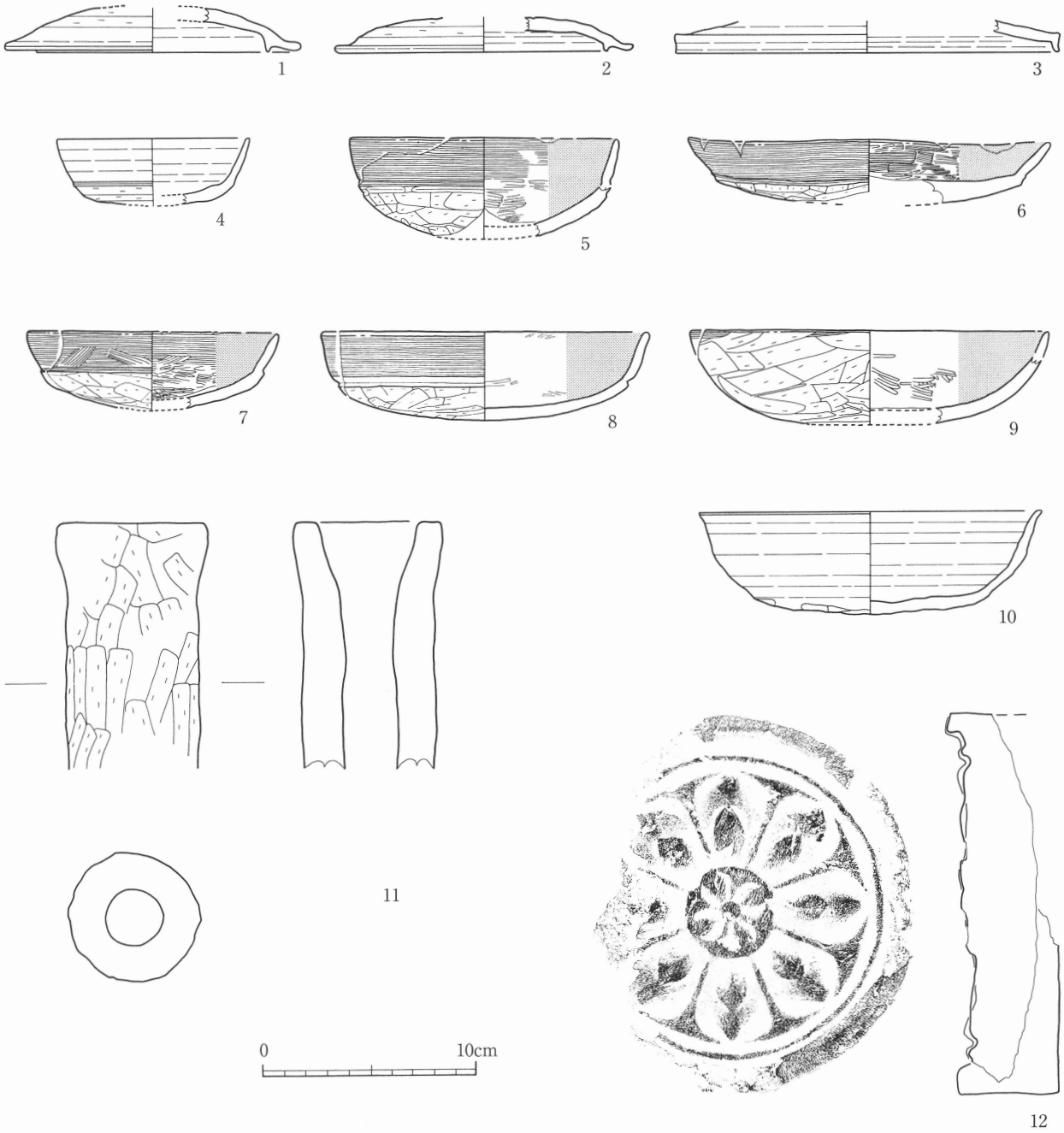
遺物は床面より丸底で内面黒色処理された土師器Ｃ-631埦（第172図１）、全長が31.6cmと36.6cmの丸瓦Ｆ-73・74（第172図３、４）が出土し、堆積土中より底部が高台より下がった須恵器Ｅ-289高台付坏（第172図２）、Ｅ-290高坏片や黒小玉石２点などが出土している。

SI143竪穴住居跡（第15次・第176図）

南北5.5m、東西６mのやや歪んだ隅丸方形で、壁は緩やかに立ち上がり、壁高が15～26cm残存している。壁に沿って幅22～38cm程の周溝が巡っている。床面はほぼ全面に貼床が認められ、北壁中央にカマドが付設されている。周辺の床面上からは多量の焼土が検出されている。

柱穴と見られるピットが床面上の４箇所から検出された。掘り方は直径70～90cmの円形、深さは80cm程で、柱痕跡は直径20cm程である。

カマドは燃焼部が幅70cm、奥行40cmで、奥壁より長さ170cm、幅30cm、深さ10cmの煙道が延びている。煙道部の先端は直径30cm、深さ10cmのピット状を呈している。燃焼部中央から煙道の方向はN―6°―Wである。焚き



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	調査次数	写真図版
				出土遺構	層位						
1	E-94	須恵器	蓋	SI143	P11	残存高2.1　口径13.8	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ、カエリあり	Ⅰ2	15	
2	E-51	須恵器	蓋	SI143	検出面	残存高1.6　口径14.0	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ、カエリあり	Ⅰ2	15	
3	E-53	須恵器	蓋	SI143	検出面	残存高1.5　口径18.0	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅱ	15	657
4	E-73	須恵器	坏	SI143	床面	残存高3.1　口径9.0　底径7.4	口縁部・体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅰ1	15	657
5	C-97	土師器	坏	SI143	堆積土	残存高4.5　口径12.6　底径11.3	口縁部・体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	口縁部・体部ヨコナデ一部ヘラミガキ、底部ヘラミガキ、黒色処理	AⅡ2	15	657
6	C-98	土師器	坏	SI143	P11	残存高2.9　口径16.9　底径14.2	口縁部・体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	口縁部・体部ヨコナデ一部ヘラミガキ、底部ヘラミガキ、黒色処理	AⅡ3	15	657
7	C-96	土師器	坏	SI143	堆積土	残存高3.6　口径11.8　底径10.4	口縁部・体部ヨコナデ一部ナデ、底部ヘラケズリ	口縁部・体部ヨコナデ一部ミガキ、底部ヘラミガキ、黒色処理	AⅡ2	15	657
8	C-90	土師器	坏	SI143	堆積土	器高4.15　口径15.2　底径13.4	口縁部・体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅡ2	15	657
9	C-102	土師器	坏	SI143	堆積土	残存高4.3　口径16.8	口縁部ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	AⅣ1a	15	657
10	E-69	須恵器	坏	SI143	床面	器高4.8　口径16.0　底径11.0	口縁部・体部ロクロナデ、底部ヘラケズリ	ロクロナデ	Ⅱ1b	15	657
11	P-2	土製品	ﾌｲｺﾞ羽口	SI143	周溝上面	全長11.5　口径6.8	ヘラケズリ	不明	円面に鉄滓付着	15	657
12	F-9	瓦	軒丸瓦	SI143	周溝 堆積土	直径17.9　中房径4.6　厚さ4.8	瓦当面重弁連華文	瓦当側面ヘラケズリ、瓦当裏面ナデ→ヘラケズリ		15	657

第173図　SI143　出土遺物（1）